

幻想恩義

銀の鯉節

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昔、ある館に男が迷い込む。その男は元々別世界の人間であり、外から来た者であった。男は館をさま迷う内にとある少女と出会い、気づけば元の世界へと帰ってきていた。

戻れて喜ぶのも束の間、それ以降男の周りで不可解な現象が起こるようになった。一度変化した物を元に戻すことは決してできなかった…。

目次

? 引き寄せられるモノ	1
? 湖	7
? 廻り道	22
? 衝突	32
? 芽生え	43
? 辺りに漂うは紅き霧	55
? 無力	62
? 第二の不穏	72
? 激情	81
1 0. 救出作戦	90
1 1. 崩壊	104
1 2. 再燃の始まり	121

?引き寄せられるモノ

——誰だ貴様は。

響く少女の声。しかしただの声ではない。重く押し掛けるような声は私の喉を塞ぎ、全身を硬直させた。

——…：だんまりか。

何も言えない。動けない。極度の緊張が体を縛る。

——っ?!

しかし少女は私を睨みつけると、小さく声を上げて目を見開いていた。

——なんなんだ…その禍々しいものはっ!!

少女は声を荒らげる。何を問われようが何も出来ない。体が動かせらるようになる気配すら感じない。

——動くなよ…そこから。私が葬り去ってやる。

少女は手に紅色に光り輝く棒…槍のような物を作り出し、私へと狙いを定める。

——こんな人間がいるとはな…。貴様がいては今後の計画に支障が出る。

少女は再び私を睨みつける。しかし最初の時ほどの余裕は見えず、むしろ額から汗を滲ませていた。

——さらばだ。

少女の手から放たれた槍は、視界全てを真っ白にさせた。そして視界は戻らぬまま上か下かも分からなくなり、やがて思考すらもが止まった。

青い空。地を走る風は木々を揺らして音を生む。車の走行音や人々の足音、声が混ざり合い、大きな雑音となって辺りに響かせる。

俺は電車に揺らされながら市内の高校から自宅へと向かっていた。今日は教員の会議やらで午前授業だったのだ。

ある生徒は部活へ。またある生徒は集団でカラオケやゲーセンへ。そして、特に用事のない生徒は自宅へ。

まもなく〇〇駅、〇〇駅です。混雑しておりますのでご降車の際はお気をつけ下さい。

アナウンス後に電車は停車し、ぞろぞろと降りてゆく列の中に紛れて、改札を超えてゆく。

昼時というのもあって混んでいる。通学時ほどではないが少々ぶつかってしまう。

「あの、これ落としましたよ」

後ろからかかったのは女性の声。彼女の手には【黒羽信哉】と表記された生徒手帳の入った財布があった。

「ああ！すいません、ありがとうございます…！」

女性は「いえ」と言つて、そのまま奥へと姿を消した。

財布を落としたことに気づけなかった事への恐怖感をヒシヒシと感じながらも、家へと向かった。

自転車に乗り換えて、街を走る。途中にある商店街で食欲が爆発してしまうような匂いを発しているのが、空腹時の最大の敵だ。

軽食なら大丈夫ではないか、などの葛藤と戦いながら何とか商店街から抜け、住宅地へと到達する。

ここまで来たらすぐそこが家なので、俺は小さく安堵する。

「…コロッケ買っておけば良かったかな…」

小さな誘惑に対しての後悔が生まれつつあるが、自転車を車庫に収納して家へと入る。

ギラギラと差し込む日光から逃れただけでもとても涼しく感じるものだ。

「おお帰ったか信哉」

「ただいま、じいちゃん」

「信哉〜！ワシもう腹減って飢えそ！はよはよ！」

「ひいじいちゃん今作るから…」

この家には俺を含め、五人が住んでいる。

一人目は俺を迎えた祖父、黒羽隆くろばねたかし。七十歳だ。

二人目は飯を要求してきた曾祖父、黒羽和夫くろばねかずお。この人はボケが始まっているのか自分のことを七十五歳だと言っている（本来なら九十五歳）。しかし、本人の言う通り見た目は七十代なので恐ろしい所だ。

三人目は仕事で不在の父、黒羽雄幾くろばねゆうき。四十二歳だ。妻……俺の母が昔に亡くなってからは家事や仕事を担う一家の大黒柱となっている。

四人目は小学三年生の弟、黒羽明寛くろばねあきとら。九歳だ。トラ（明寛のあだ名）は男子のわりに大人しい子で、いつでもニコニコしているような和ましい子だ。とても可愛い。

最後に俺、高校二年生の黒羽信哉くろばねしんやだ。十七歳で、大学進学を目指して頑張っている。得意な科目は現代文だけだ。その他は苦手。

……と、まあ男五人で暮らすむさい家庭だ。曾祖母は寿命で、祖母は病気で、母は事故で亡くしている為、この家族には華がない。

塩分量を控えめにしながら、野菜を炒めていく。気温が高いので熱中症予防のためにも、酢の和え物を作っておく。

数十分の調理を終えて、祖父、曾祖父と俺の三人で食卓に座る。いただきますと同時にご飯を食べ始める。

「なあ信哉や。ワシはな昔、こゝろんなに小さな嬢ちゃんから助けてもらった事があるんじゃ」

曾祖父がご飯を食べながらジエスチャーをする。すると祖父が目線をずらさずに、曾祖父を注意する。

「父さんや、今は食事中なんだからじつとしとれって……」

「むっ……それもそうだな……。おつこの料理、この前テレビでやってたアレじゃろ！えくと……ムンジング！」

「これはただの野菜の炒め物だよ、ひいじいちゃん。……ムンジングなんて料理あるの？」

「あゝ……覚えとらんない！」

こんなやり取りを毎食やりながら、過ぎるのが小さい頃からの日常みたいなので、自然と笑みが零れでる。

歳をとったとしても落ちない食欲を見る限り、二人の丈夫さを確認出来て嬉しい反面少しだけ心配な感情もあるが、自分の作った料理

を美味しくそうに食べてくれるのでそんな気などがする程度であった。「いや〜…あれはホントに仏様か？あ、嬢ちゃんだったな！ぐはは！迷ってるワシをここに送ってくれたもんなあ！いつか会えたらお礼をしたいのお…！」

「はいはい…父さん、食事中だからじつと…」

「おおそうじゃな！んん〜、信哉の料理は美味しい！」

「ありがとう」

こんな日常が続けばいいなど、私だけではなく家族全員が思っている筈だ。

夕方になり、弟の明寛も帰ってくる。そして本来ならば夜遅くまで仕事で帰って来れない筈の父も帰ってくる。

「父さん、帰ってくるの早いね」

「ああ、今日は残業分も全て終わらせられる程調子良かったからな」

「ねえ信兄、今日は遊べる…？」

「ああ、遊べるぞ。ゲームか？」

「うんつ。えへへ…」

明寛は口が張り裂けんとばかりに大きな笑みを作って自分の部屋へ、とてとてと戻っていった。

ホントに明寛は優しい子だ。癒してくれるし、和ましてくれるし、可愛いし。あんな弟を持って幸せものだなあ。

「信哉あ！ワシは腹が減って…」

「今から作るから、ひいじいちゃん」

明寛に和まされた分、力も湧いたので料理に取り掛かろうとした時だった。

「あれ…醤油が切れてる？」

醤油が切れている事に気づく。困った。

すると父がその事に気づいて、車の鍵を持ち出した。

「信哉、少し買い物に行かないか？」

「買い物…？じゃあ醤油買いたいんだけどいい？」

「ああ。明寛、お前も来るか？」

丁度部屋から出てきた明寛にも聞くと、明寛は嬉しそうに行くつ

と答えた。

おじいちゃん達は留守番という形で家に残るので、買い出し要員としての三人が車に乗るこんだ。

「いつものスーパーでいいか？」

「うん、お願い」

「ねえ信兄！新発売のバーボンうまぞこ買ってもいい?!」

「バーボン：??安かったら買うよ」

「ほんとっ?!」

「シートベルトしておけよ。最近交通量多くなって急に止まることあるから」

父は俺達がシートベルトを付けたことを確認すると、発進させる。

家を曲がってすぐの商店街を超えて、四車線区画の道路へと出る。

「ホントに…車が多いな」

「そうなんだよ。運転する時が怖くなったな…」

ここ周辺では人口の過密化が懸念されるほど移住者が最近増えてきたのだ。原因としては付近に建てられた王手メーカーの工場。その従業員が引越して来た為である。他にも観光資源なども充実している為、テレビでも取り上げられる程の充実した街との事だ。

ブウウウンツ!!

突然後方から機械の唸る音が聞こえた。目線だけ後ろへ流すと五、六台のバイクがいた。

バイクは車と車の細い間を通って、俺たちを追い越して行った。

「危ない運転をするなあ…」

「中々なダイナミックだな。その分事故の起こる確率が高いんだろうけどな」

三十メートル先に見えてきた建物がお求めのスーパーである。入口にはタイムセールと掲げられており、運がいいように感じた。

「タイムセールか。他のものも買っておこうかな」

「なかなか面白い物にも付き合ってやれないし、今の内に買っておいた

方がいいんじゃないか？」

「そうだな…。ん、そうする」

父がハンドルを切り、スーパーの入口へ入ろうとした時だった。ギヤギヤギヤギヤツ

聞いたことのない大きな摩擦音が辺りに響き渡ると同時に、俺達の周りは暗くなった。

「なっー」

一瞬ではあったが俺は窓の外が見えてしまった。

大型トレーラーが斜めになってこちらへ滑り込むように、倒れてくるのを。

咄嗟に出た声は次の瞬間に訪れる轟音によっていとも容易く掻き消されたのだった。

ー赤い。赤と黒が入り交じる世界が広がっている。そして激流に流されているような、上も下もわからない状態が続く。

目の前に手が見える。その手は俺の何かを掴んだ。いや、それ以前に体という形の感覚がない。だから掴まれたとしてもわからない。しかし、掴まれた感覚はあった。抵抗も何もできない。

その手によって激流の中を引っ張られる。何処に自分がいるのかもわからない。

どのくらい経ったのだろうか。ドロドロとした赤と黒の空間が徐々に薄れて、白くなっていつている。その変化に比例して掴まれる感覚や激流は消えてゆく。

そしていつの間にか真っ白の空間に漂っており、今度はゆっくりと黒く染まってゆく。深く、黒く、侵すように。

?湖

——誰だ貴様は。

響く少女の声。しかしただの声ではない。重く伸し掛るような声は私の喉を塞ぎ、全身を硬直させた。

——…だんまりか。

何も言えない。動けない。極度の緊張が体を縛る。

——っ?!

しかし少女は私を睨みつけると、小さく声を上げて目を見開いていた。

——なんなんだ…その禍々しいものはっ!!

少女は声を荒らげる。何を問われようが何も出来ない。体が動かせるようになる気配すら感じない。

——動くなよ…そこから。私が葬り去ってやる。

少女は手に紅色に光り輝く棒…槍のような物を作り出し、私へと狙いを定める。

——こんな人間がいるとはな…。貴様がいては今後の計画に支障が出る。

少女は再び私を睨みつける。しかし最初の時ほどの余裕は見えず、むしろ額から汗を滲ませていた。

——さらばだ。

少女の手から放たれた槍は、視界全てを真っ白にさせた。そして視界は戻らぬまま上か下かも分からなくなり、やがて思考すらもが止まった。

………い、…きろ……おい、起きろ!……信哉!!

「っ?!

大きな揺れと声によって俺は目を覚ました。一瞬記憶に過ぎる、

倒れてくる大型トレーラーの姿。しかし記憶はそこで暗幕されていて思い出せなくなっていた。

「信哉……良かった……!」

俺を揺さぶって声を掛けていたのは父であった。状況を明らかにする為にも辺りを見回してみるが、余計に混乱するようなものであった。

「何処だよ……」

いつの間にか俺達は木々が鬱蒼とした森の中にいた。霧が発生して視界が不良となっている。

「んっ……」

自分の後ろからもう一人の声が聞こえた。後ろを振り返ると明寛がゆっくりと目を開けていた。

「信兄……?」

「どこか……痛いところとかないか?」

父が恐る恐る明寛へと尋ねる。どうやら父も事故の瞬間は理解していたようだ。

明寛は欠伸をして目を擦りながら「大丈夫だよ」と言った。

この場にいる者全員が怪我をしていない事に安心する。

そしてその上で考える。ここが何処なのかを。

「病院……でも何処かの敷地内って訳でもなさそうだね」

「車もない。それに携帯も使えなかった」

「携帯もっ……?!」

俺はポケットにいた携帯を取り出す。すると画面を触っても明かりはつく事がなく、また電源ボタンを押してもつく事はなかった。

「マジか……」

「どうしたの……?何かあったの……?」

誰かの唾を飲む音が響いた時、寝惚けていた明寛は目を覚まして今の状況を何となく感じ取っていた。父と俺の神妙な表情に不安を感じたのか顔を覗き込む。

とりあえず明寛を不安で追い込ませない為にも、俺は精一杯笑った。

「大丈夫だ、トラ！俺や父さんもいるしな！」

「うん…」

明寛はこれ以上何も言わなかった。恐らく下手な追及は自身を追い詰める事を理解しているのだろう。だからこそ、ここが何処なのかなどの問いはしなかった。

「霧が濃いな…。これじゃあ迂闊に動いたら怪我をしかねない…」

「とりあえず空は木々に覆われてるから雨に当たるとは無さそうだ」

「そうだな…せめて木の根元でジツとしていよう」

立ち上がろうとした時、俺は初めて自分が袋を握っていることに気づく。

このポリ袋は俺達が行くはずだったスーパーの物だ。つまり、買いた物をしないと持っている筈もないのだ。

「中に入ってる…?!」

袋の中に入っているものを取り出すと、醤油にツナ缶、ぶどうジュースにバーボンボンうまぞこと書かれたお菓子が入っていた。

「こ、これは…?!」

「あつーバーボンボンうまぞこっ！」

明寛は自分の欲しかった物が目の前にあって驚いていた。そして、驚いてるのは明寛だけではなく俺や父もだった。

「ど、どういう事だ…?!俺らはまだ買い物はしていないよな…?」

「確かそうだった気がするが…思い違いか？」

奇妙に思いつつも、手元にある物を確認する。食事としてはツナ缶がご馳走だろうか。そこに醤油をかければある程度の腹の満たしにはなるだろう。……バーボンボンうまぞこはよくわからないので、明寛に全部あげることにした。

木の根元に座り込むと、訪れたのは静寂であった。俺も父も今の状況を受け入れる事で精一杯なのだ。目の前に広がる霧は視界を濁らせて、まるでその様子が俺達の不安定な未来への道筋にも見え、恐怖を感じさせた。

そんな中、明寛が耳を澄まして「んんん」と唸っていた。

「どうしたんだ？トラ…？」

「波の音が聞こえるっ！」

「あっおい、待て!！」

明寛は突然立ち上がり、走り出す。

俺と父は慌てて明寛の後を追う。すると水の音が聞こえてきた。

「海だっ！」

「えっ…ええ?!！」

明寛がいた場所の目の前には波が押し寄せていた。

俺も父も思わず目を丸くしてしまった。なぜなら、俺達が住んでいる地域周辺に海や湖は存在しないからだ。

霧が濃くて全てをみる事はできないが、横幅からしてかなりの大きさのようだ。

「水も綺麗だ…。潮臭くもないし、湖か…？」

父は少し波に近付いて、手で水を掬って口に運ぶ。

「ただの水だ…。てことは湖か」

「ちよ、ちよつと待って父さん。俺達の住んでいる周辺に湖だなんてもの一つもないんだよな?!」

「ああ、ない。だからもう俺たちはここが何処なのか、完全にわからないという事だ」

俺は息が詰まってしまった。霧に囲まれたこの地がいつたいたいのような場所なのか。日本の何処なのか。わからない。だからこそ、境界が見えず果てしなく広大な未知が恐怖を生み出し、思考を徐々に鈍らせていた。

その様子を見て、父はニカツと笑った。

「大丈夫だ、信哉。俺がいる。水が豊富な場所はかなりの確率で生活が繁栄している。もしかしたらこれはダムかもしれない。一応、川を見つけて降りてみると街があるかもしれない。だから大丈夫だ」

「父さん…ありがと」

「ああ」

父の言った事は説得力があるので、とてつもない安心を得ることができた。同時にまだ自分が幼いとも感じたのだった。

「さてと…とということだ！湖を散歩しよう！」

「お散歩っ?!僕も行くっ！」

「そうだな、みんなで行こう。信哉、近くに木の棒とか無いか？」

辺りを探してみると、流木が打ち上げられてるのを見つけて、その流木を父に渡す。

「ありがとう。それじゃあ行くか！」

父は声を上げて、歩き出す。その時に地面に木を突き刺して扶けた。

「こうやって目印を定期的につければ、この濃霧の中でも迷わない筈だ」

父はゆっくりと足を前に進ませる。明寛の事を配慮した上でゆっくりしているのだろう。

俺はそんな父を見てとても頼りになつて有難かったが、どうしても消しきれない恐怖があった。それが父に対しての申し訳なく、悲しかった。

結果から言うと、日が沈むまでに集落や街を見つけることはできなかった。それどころか道路さえも。

湖の周りを二時間ほど歩いて、川を見つけたので、そのまま沿つて下つたのだが、何も見つからなかった。

体力や食料の事を考えるとあまり無鉄砲に行くことは無理なので、日が落ちると共に行動を止めることにした。

ツナ缶を開けて醤油を使い三人で分け合つてその日の夕食を終えた。

ちなみに明寛のバーボンボンうまぞこは大事にとってある。本人曰く、いざと言う時にとの事。

夕食を終えると辺りは完全に暗くなり、気温もより低くなる。体温の消費を抑えるためにも風当たりの少ない場所へ移動し、身を寄せあつて眠ろうとした。

しかし、慣れない環境なだけあつて深い睡眠をとることは難しい事だった。

「あつ…星」

目が覚めて寝付けない時にふと空を見上げると、いつの間にか霧は消えており夜空に浮かぶ星々が綺麗に見えた。

「こんなにも星が…まるで天の川だな…」

月は雲にかかって見えていないが、ほとんど晴れ渡っている夜空は絶景であった。

「光害がないのだろうか。その事を考えると近くに街がある可能性も少ないだろうなあ…」

「父さん…」

星を眺めていると、父が嘆くように呟いた。だが、その事は俺も予想は出来ていた。

いくら森の中と言えど、道路も電線もないのは稀だろう。

「俺は…諦めないよ。絶対に生きるから…!」

「俺もだよ…!親として息子二人を置いていくわけにはいかないからな…」

俺と父の間で眠る明寛はぐっすりと眠っていた。かなり疲れていたのだろう。

俺もだんだんと瞼が重くなっていく。

(ひいじいちゃん達は…大丈夫だろうか…)

星を最後に目を閉じ、暗闇の中へと落ちていった。

……

……

…

目覚めれば朝になっていた。川に通る風が少し肌寒く、また自分がどこにいいのか迷いそうになる。

「…ああ、湖に沿ってきたんだっけ…」

昨日の行動を思い出すと共に体を起こすが、前日と同じように袋を手に握っている事に気づく。

「なっ?!また袋…?!」

俺は袋の中に入っている物を取り出してみる。キャベツにもやし、冷凍食品の枝豆、パン、マーガリン、牛乳、ボールペンが入って

いた。

「どうしてここにあるんだ?!」

俺の声で目を覚ました父も、袋の存在に気づいて目を丸くしていた。

「流石に、買った覚えはないぞ…」

「また袋が…。信哉が買っていないと言うなら、誰かが近くにおいて眠っている間に渡してきたのか? いや、そんな事する意味は無いはずだ…。うーん…。因みに中には何が入ってるんだ?」

「食パンにマーガリン、牛乳。あとペンとその他だ」

食パン6枚入り、一リットル牛乳、普通のマーガリン、三色使えるボールペンなどが袋の中から取り出される。

「パンか。食料が入っていたのは幸運だったな…」

「しかも牛乳もだ。完全な朝食セットだな。こりゃ」

不思議に思いつつも、取り敢えず明寛を起こすことにする。

ゆさゆさと肩を揺らすと、明寛はゆっくりと目を開けた。

「んっ……。信兄い…」

眠たそうに目を擦る明寛は、目の前にある牛乳のパンに気づくと、信哉に驚いた表情で詰め寄った。

「どっ…。どうしたのこのパンっ?!」

「それが俺にも分からなくてな…。だけど取り敢えずは食べよう。少しでも元気でいるためにな!」

明寛は少し考える素振りを見せたあと、笑顔でうんつと応えた。信哉や雄幾も彼の笑顔を見て力が湧いたような錯覚を感じた。守りたい、ただその考えが信哉の中で刻まれるように生まれたのであった。

食事を終えた後、川を下って再び歩き出す。しかし、寝た環境や栄養の不足、ストレスが原因で疲れは抜けきる事がなく、足取りを重くさせていた。

川は徐々に広がっていき、草木も徐々に鬱蒼とし、足場も泥に等しく、歩く距離・泥の中歩く・草木を押し避けていくなどの行動で体力を奪われていく。

ひたすら歩くが景色は変わらない。鬱蒼とした森の中に続く川を下り続ける。

その合間に、昼食のようなものを残ったパンで補い、再び歩き出す。

そして俺達はまた何にも辿り着けずに夕方まで歩き続けてしまったのだった。

「脚も疲労で限界みたいだな…浮腫んでる…」

「父さん、日も落ちるし今日は休もう…。トラも限界だ…」

「ごめんなさいい…あ、脚が…」

昨日と同じように風を凌げそうな場所を探す。その時にやけに蠅などの虫がしつこく視界に入ってきて、多少苛つくが、一際目立つ大木を奥で見つけ、根元へと移動する。

「よし、この木の下で休もう。…：それにしても蠅が多い…何なんだ？」

父も蠅の事が気になっているらしく、私も激しく同感だった。耳をすませば羽音が聞こえるほど、蠅は大量に発生していた。

移動したくても、日はもうすぐに落ちてしまおうし、俺達の脚が悲鳴をあげようとしているので無理であった。

冷凍枝豆も時間が経ち、解凍されて食べ頃になっているのでありつくことにする。

枝豆の入った袋を手を持ち、開けようとした時だった。

「うおっ」「えっ」「んっ」

突如、視界が黒に染まる。わずかな光もない、完全なる闇。ついさっきまで薄らと紅色に染っていた筈の空も真つ暗であった。星も何も無い、純粹の闇が俺たちを支配していた。

「信兄い…?!父さん…?!」

「みんな、いるな?!」

「掴んだ！信哉に明寛だな？」

俺たちは動くことが出来なかった。何も見えないからこそ、全てが分からなくなる。

木はどこだ。手は。石は。食べ物は。

手探りで探そうとしても腰が引けて、大きく動くことができない。

その状況が数分続く。緊張が徐々に高まっていったその時、近くでガザガサと草木を掻い潜って何者かが通る気配を感じた。

三人は息を飲んだ。耳を澄まして、状況を必死に探ろうとする。しかし、緊張しているため鼓動がバクバクと激しくなっていて、雑音が混ざっていた。

耳を澄まして数十秒後。再び草木を掻い潜る音が聞こえた。その時、微かに人の声のようなものも聞こえた気がした。

「…今、聞こえたか…？」

「気のせいじゃないなら…女の子の声を聞いた…」

互いに寄り添いながら小声で確認を取る。その時に誰かが小さく震えているのを感じた。明寛だろうか。

「誰か…いるのか？」

今にも消え入りそうな父の声が闇へと溶け込む。

一瞬、背筋が凍るような静寂が襲いかかる。誰かの、唾を飲み込む音が大きく聞こえた。

その時だった。

「そこなのだー」

決して大きくはない、ただ普通の少女と思しき声が聞こえた。すると同時に張り裂けんばかりの音が。

「うわあああつ?!」

父の声だった。低い声の悲鳴が静寂を壊し、最恐の恐怖が生み出される。

「あつ…あああつ…?!」

「父さんどうしたんだ?!」

「うわあああん兄いいいい!!!」

暗闇の中で反響する叫びは冷静を喰らい混乱を生み出した。

その叫び声の中に、何かが碎ける音と、生暖かい液体が徐々に紛れていくのを俺は気づいた。

父の叫び声が徐々に弱くなっていく。すると、視界を奪っていた

闇も薄らと消えて、消えゆく夕日が辺りを照らす。

俺は辺りの光景が目に入って、一瞬死んだ。いや、死んだような錯覚を覚えた。

足元には徐々に溜まってゆく赤い水たまり。その中央に横たわる父、そして口を赤く染まらせた少女が咀嚼しながらコツチを見ている。た。

父の腕はありえない方向へ折れ曲がってして、指や腕の部分的箇所が齧り抉られたように、存在していなかった。

「父さん…っ!!」

父から少女を引き剥がそうと、立ち上がった時、俺は再び視界に入った父の全貌を見て脱力してしまう。

「……」

父はもう呼吸すらしてはいない様子であった。それもそうだろう。首は骨が見えるほど肉が抉られており、強い力で引っ張られたのか本来ならば繋がっている頬も引きちぎられ、片顎がブラブラと宙に浮いていた。

少女は俺たちが狼狽えていても特に反応せずに、ただ父を貪り続ける。

明寛は既に気を失って、俺にもたれかかっていた。俺の肩に乗っかっている明寛の頭が、ガクンとズレた衝撃で、俺は気がついた。

父は死んでいる。そう脳内で何度も復唱して、ようやく俺の膝は上がり始める。

「はぁーっはぁーっはぁーっ」

ガクガクと不安定な脚で息を荒立てながら、明寛を抱えて立ち上がる。

少女の目線は俺達を捉えているが、父を貪り続けていた。

例え少女が自分達を追ってこようと、何がなんでも明寛を守り抜く事だけを心に決め、その場から駆け出した。

夕日も沈み、夜の闇が包み込む中、必死に走り続ける。

「ううっ…ううっ…」

泣きそうになる。声を上げて叫びたい。誰かに助けてもらいた

い。走れば走るほど負の感情が無限に湧き出してくる。

しかし、抱えている明寛を強く抱き締めて、自身の気を保ち、夜の闇を駆け抜ける。

足を止めてしまつてはダメなような気がした。振り返つてしまつては殺されるような気がした。だから俺は限界が来て倒れるまで走り続けた。

……

……

……

ある朝、俺は眩く差し込む朝日によつて起こされる。そして、起床してまもなく、近くに置かれてあつた目覚まし時計が鳴り響く。

「…ふぁ。ゆつくりと作るか…」

部屋を出てキッチンへと向かい、いつも通りに朝ごはんや父や明寛のお弁当を作り始める。

いつも通りにベッドから起きて、いつも通りに朝ごはんを作る。いつも通りの筈だ。

その…筈なのだ。しかし、俺は今がいつもと違うような気がした。はつきりとしたものはなく、ぼんやりと。勘に似たような感覚で、いつも通りを異常のように感じる。

「…。」

俺は無言で朝ごはんを作り続ける。時刻は七時。いつも通りなら明寛や父達が起きてくる筈だ。

しかし、起きてきたのは曾祖父さんと

祖父の二人であつた。

「信哉あーっ！飯ーっ！」

「父さん…まずは挨拶でしょうに…。おはよう、信哉」

「おはよう。もう少して弁当できるからちと待っていてくれ」

「はーよーはーよー！」

賑やかな曾祖父さんを祖父が静止させる。いつも通りだ。何も

変わりはない。

でもやはり父と明寛がいつまで経っても降りてこない。

「じいちゃん！ひいじいちゃん！トラと父さん起きてない？」

今キツチンから離れられないため、二人へと訊ねる。しかし、二人揃って起きていないとかえしてきたのであった。

弁当も朝食も出来上がり、未だに起きていない明寛と父を起こしに行く。だが部屋を覗いても二人の姿はなかった。

「…二人がいない？…どういう事だ…？」

俺は突如、とてつもない不安に襲われる。ただ二人の姿が見えないだけで、まるで治安の悪い外国へと一人置いていかれたような恐怖や不安は感じない筈だ。

「信哉あゝどうしたあゝ??」

モグモグと咀嚼しながら曾祖父さんが、帰ってこない俺を心配してやってくる。

いつも通りなら、口にもものを入れながら来ないで、と注意するのだが、今回は違った。

俺は曾祖父さんへ助けを求めている。

「ひいじいちゃんっ…!!トラと父さんがいないんだ…!!どこに、どこに行っただのか知らないか…?!」

「んん？明寛と雄幾がか？二人でどっかトンスラこいてんじや…：あっ…：」

曾祖父さんは明寛がいつも使っているベッドを見て、目を見開いていた。すると、急いで父の部屋へと行き、ベッドを見るが先程と同じような反応をしてみせた。

「そうか…：。そういう事なのか…：」

曾祖父さんは項垂れるように顔を下げて、呟いた。

俺が言及しようとする前に、曾祖父さんは話をし始めた。

「俺は…昔、ある少女に助けられた事があるんじや…：」

「そ、それは何度も…：」

「それからじゃ…：。俺はここへ帰ってきてから奇妙な現象を体験するようになったのじゃ…：。白いモヤが目の前で動いたり、冷たい空気が

儂だけを包み込んだり…。所謂、怪奇現象つてもものが起こるようになつたのじゃ…」

「か、怪奇現象…」

曾祖父さんは俺を見据えて「そうじゃ」と言うと、力強い眼差しで俺を見定めるように全身を見た。

「やはり、お前もか…。朝、見た時から違和感を感じたんじや…」

俺は曾祖父さんの言っている事が引つかかるように感じると同時に、何か胸が苦しくなるのを感じた。何故か聞きたくない。その思いが強く生み出される。

「ど、どういう…ことなんだ…?」

その思いを押し込めて、俺は曾祖父さんから詳細を聞き出そうとする。何がやはりなのか。違和感の正体とは何なのか。

曾祖父さんの口が動くにつれて緊張が高まっていく。唾を飲む。

「信哉…。明寛や雄幾はここにはいない…そして、信哉。お前もだ…」

いない。曾祖父さんからそう言われた。しかし、違うようには感じられない。むしろ不明瞭な納得が俺の中に生まれていた。

「儂は少女に助けられた事がある。でも、どうして助けられる状況になつたのか。それは儂が神隠しにあつたからじゃ」

「神隠し…?!」

「信哉達は神の悪戯によつて連れ去られたんじや…儂と同じようにな…」

俺は曾祖父さんの苦笑いする顔を見て、突然体に電流が流れたような気がした。すると、森の中を駆け巡る大量の記憶が脳内で一気に流れ出す。

「ぐっ…うっ…」

目の前も一瞬見えなくなり、強烈な吐き気が襲いかかる。気づけば視界は元に戻っており、急いでトイレへと駆け出した。

「うおっ…えええっ…っ」

鼻にくるツンとした匂いと共に感じる、苦さとしよっぱさ。その嗅覚と味覚から再び吐き気が生まれるが、何とか押し戻す。

口を洗う為に洗面台へと向かった時だった。鏡と向かい合うと、

目の前に映るのは自分の姿ではなく、森にて木によしかかる俺の姿と倒れている明寛の姿だった。

「お、俺が…森に…！トラモか…?!」

鏡を寄り詰めていると、後を追ってきた曾祖父さんが俺に言った。

「信哉…お前は特別なのかもしれぬ…。神隠しに合いながらもお前はここに居る…。特別だからこそ助かる術があるのかもしれぬ…」

俺は曾祖父さんに言われて全てを思い出し、理解した。先程の記憶は実際に起こったものである事。そして、俺達は曾祖父さんが失踪中にいたのであろう場所にいるという事。

「信哉、儂は少女に助けて貰った…。暗闇の中で紅色の瞳を燃やし、髪は銀色で青みがあり、威厳を放つ少女にな…」

「紅色の瞳、銀色の髪…」

曾祖父さんは俺の手を掴み、俺を立ち上がらせた。

「信哉、お前はここに帰ってこれている!!それはおそらく儂が過去に神隠しにあっているからじゃ。そしてじきにこの世界からお前は連れ去られた世界へと戻ってしまうだろう!それまでの間に支度をせい!それが今のお前さんにできる、最善の策の筈じゃ!」

「ひいじいちゃん…!!」

曾祖父さんは俺に力強く、そう言った。先程まで感じていた不安や恐怖は消えた訳では無いが、立ち向かう勇気が小さく湧き上がってくるのを感じ取る。

記憶はある。だから不足しているもの、するであろうものをできるだけとり押さえる。

「父さん、信哉。どうしたんだ?」

祖父が心配して洗面台へとやって来る。俺は先程吐いたことも忘れたように、スッと立ち上がり、祖父の隣を駆け出していった。

「し、信哉…?!父さん、信哉はどこへ…」

「信哉は生きるために全力を尽くしてるんじゃないよ…」

「は、はあ…」

……
……
……

俺はチャリに乗って、ホームセンターへと急いだ。片道10分ほどの距離にある店舗だ。

店へと駆け込むと、サバイバルナイフ、簡易濾過装置、懐中電灯ソーラパネル付きを手にしてレジへと向かう。

「あ、あとは何があったらいいんだ…?」

ホームセンターを後にして、次の場所へ必要な物を追い求めて、街中を駆け回る。

大きなリュックに買ったものを詰め込んで、自転車を跨ぐ。

学校がもう始まっている。だが気にしない。物資を集め続ける。

気づけば昼になっていた。リュックの中はタオルなどの道具や食べ物でいっぱいだった。

家に帰って、自分の状況を確認する。

「こ、これぐらいで…大丈夫か…?」

もう必要なものはないかと、辺りを見回してみると、テーブルの上に小銭用財布があった。

「…ないよりは、ある方がマシ…か?」

財布を手に取り、リュックを背負った時だった。

「ぐ…あ…?!」

今までに体験したことも無い感覚が襲いかかる。どっちが上で下、自分がどこに足をつけているのか、またはどこにいるのかすら分からなくなる。

感じるのは川の中にいるような、流される感覚。ゾゾゾと頭や体、脚へと何かが勢いよく触れる。

混乱する中、徐々に意識まで消えてゆく。

回る世界。歪む世界。暗い世界。無の世界。様々な空間を行き来するように、俺は意識を失っていった。

? 廻り道

——誰だ貴様は。

響く少女の声。しかしただの声ではない。重く伸し掛るような声は私の喉を塞ぎ、全身を硬直させた。

——…だんまりか。

何も言えない。動けない。極度の緊張が体を縛る。

——っ?!

しかし少女は私を睨みつけると、小さく声を上げて目を見開いていた。

——なんなんだ…その禍々しいものはっ!!

少女は声を荒らげる。何を問われようが何も出来ない。体が動かせるようになる気配すら感じない。

——動くなよ…そこから。私が葬り去ってやる。

少女は手に紅色に光り輝く棒…槍のような物を作り出し、私へと狙いを定める。

——こんな人間がいるとはな…。貴様がいては今後の計画に支障が出る。

少女は再び私を睨みつける。しかし最初の時ほどの余裕は見えず、むしろ額から汗を滲ませていた。

——さらばだ。

少女の手から放たれた槍は、視界全てを真っ白にさせた。そして視界は戻らぬまま上か下かも分からなくなり、やがて思考すらもが止まった。

草木の揺れる音。荒ぶ風が体を冷やす。そして、木の葉から落ちた雫が自分の顔に当たった事により、目が覚める。

どうやら雨が降ったらしく、服が濡れており、葉は萎れ、地面には水溜りができていた。

「う…あ…」

信哉はゆっくりと起き上がる。その時に肩や背中、脚に痛みが伴い、顔を歪めた。

意識が朦朧としながらも辺りを確認する。

「ぐっ…。森…戻ってきたのか…」

自分達は木々が生い茂る森の中にいた。枝から枝を生成し続ける木は空をも覆っていた。

自身が一度、元の世界に戻った事を、その時に沢山の物を準備していた事を思い出す。

「あっそういえばリュック、リュックは…?!」

自身の背中にはリュックが無かったため、辺りを探す。その時にすぐ傍に明寛が倒れているを見つけ、同時に明寛と自分の間にリュックが地面に埋まり掛けているのを見つける。

「トラ…!!トラ…!!」

明寛の口元へと手をかざす。微かにだが息を感じた。

俺はすぐさまリュックを掘り出して、中からタオルを取り出して、雨で濡れてしまった明寛の体を拭き始める。

するとその間に明寛が目覚める。

「信…兄い…?ゴホッ!」

「だ、大丈夫かトラ?!痛いところとかないか?寒くないか?」

俺は明寛へ必死に声をかけるがあまり反応がない。

明寛は心労も度重なって今までにないほど衰弱していた。

何をしたらいいのかわからなかった。どうしたら助かるのかわからなかった。道具があらうと、元が既にボロボロであるならばどうしようもない。

一旦行き詰まった考えをリセットする為にも、その場から少し離れる。

深呼吸をして、肩を回す。そして前を向いた時だった。

「あ…」

俺は明寛を抱いて逃げたが、その時に我武者羅に走った為、自分達が何処にいるのかわからないと思っていた。

しかし、違った。目の前には見覚えのある波打ち際と、父が刻んだ目印が近くにあった。

戻ってきていたのだ。自分達が歩いてきた道を。そしてもう一つ、大きな発見があった。

「建物…屋敷が、ある…!!」

この間の時は濃い霧で包まれていた湖だが、今日は雨は降っていないが霧がないため、端から端まで見える程に空気が澄んでいた。

そのため、湖から伸びる島の畔に建っている大きな赤い屋敷を簡単に見つける事ができた。

始めて見えた生きる希望。俺は見つけたただけだというのに目に涙を浮かべていた。

(しつかりしろ…!!まだ安全じゃないんだ…!!)

気を緩ませぬよう、頬を叩き、未だ朦朧とする意識をハッキリさせる。よし、と空を見上げた時だった。

「あ……」

思わず声を失ってしまった。空は綺麗な星々の夜空が広がっているとと思ったら、まるで大地を吸い込もうとしているようにも見える紅く染まった大きな満月が佇んでいた。

そして、月を除いた空は赤みがかった霧で包み込まれ、紅月から差し込む光が辺りを不気味に紅く照らしていた。

俺は意識を奪われていたが、すぐさま明寛の元へと戻り、湖の建物へと移動する事を決めた。

「トラ…！大丈夫か?!今、大きな家を見つけたからな…！頑張れよ…！」

明寛を抱き上げ、歩み始める。浜辺に出ると姿がまる見えなので、湖を見失わないように少し森へ入って移動する。

耳を澄まして、微かな物音から周囲の状況を探る。いくら大きな月が辺りを照らせども、森の中には光が届かないため、視界での危険察知が難しいのだ。

あまり足音をたてぬよう、ゆつくりと足を踏み、素早く歩く。

以上の行動を心がけていたおかげか、唐突に聞こえる草木を掻い潜

る音と何者かの気配を感じ取る事ができ、即座に木の根元へ身を隠す。

木の影から物音のした方向へと視線を向ける。すると、暗闇の中で蠢く影を見つける。

(…!!あの影、高さが2mを優に超えているぞ?!)

その時、風が強く吹いた。空を覆う枝葉は揺らされ、隙間が生まれる。そしてその隙間から月光が差し込んで、影を照らした。

「…は？」

俺は目を疑った。

影の正体は巨大な生物ではなく、宙に浮いている少女であったからだ。

さらに言うとその少女、背中に羽を生やしているのだ。

(人を食う幼女だったり、空を飛ぶ幼女だったり…なんなんだよ、此処は…)

俺は空を飛ぶ少女に見つかったはならないような気がして、そのまま木の影に隠れ続けた。

数分して少女の姿は消え、周囲を確信してから再び移動を始める。

「あ、足が重い…?!か、体もか…?!」

大きな館へ近づくに連れて、体が重くなってゆく。いや、実際には重くなってはいないのだろう。ただ本能の警鐘のようなものが俺の中で必死に鳴らされていた。まるで自ら死に場所へと向かっているような、そんな考えが生れるせいで足取りを無意識に重くしていたのである。

「…!!」

しかし、明寛の様子を見る限りそのような事は言っではいられないようだ。俺は急ぎ早に館へと向かった。

……

……

……

重かった足取りや煩い警鐘はいつの間にか消えていて、足取りも速くなっていた。

そのため館には無事着けたのだが問題がある。

「なんだよ……この惨状……」

門の前までやって来たのだが、地面や木々はボロボロで激しい戦闘が繰り広げられたような状態となっていたのだ。

もし戦闘があつたというのなら、まだ近くで勃発しているのかもしれない。だが行かねばならないのだ。

意を決して、館に足を踏み入れた瞬間だった。

「うおっ……?!があっ……?!」

自分自身が何なのか、一瞬何もかも分からなくなる。

ピリツと電流のようなものが流れたと感じると同時に、押し寄せる激情の激流。

その激情は永き年月によって積み重なれた負の感情や、激昂、自責の念らしく、全てが一気に押し寄せて、体が動かなくなる。

「あっ……があ……うっ……」

痙攣に等しい状態となり、息が出来なくなる。目の前の視界は赤や黒、緑などの色をグチャグチャに混ぜたようなドロドロとしたものに変わる。

徐々に意識が混濁し、体が軽くなってゆく。視界のドロドロは最初なんの形も無かったが、ゆっくりと人の様な形が形成される。

そして、その人の様な模様は口を動かして声には出さなかったが、はつきりところ言った。

『壊せ』

その瞬間、痙攣が止み、視界も戻り、息も大きく吸った。

俺は倒れていた。そして、今の現象が何なのか全く理解できなかつた。

だが、俺の中にとてつもない寂しさが残っており、今にも押しつぶされそうだった。

自分の傍に倒れている明寛を抱き上げて、そのまま強く抱く。明寛が弱つていようと遠慮なんてできず、全力で抱きしめた。

「うあつ……うあああああああああああああああつ!!!」

押し寄せる寂しさは孤独感を生み、その孤独感が絶望を生み、絶望が涙を生んだ。

まるで世界が自身の全てを消しにかかっているような感覚だった。離せない。離れたら死んでしまう。そんな気がして、俺は明寛を離せずずっと抱きしめ続けた。

どれほど泣いただろうか。俺が正気を取り戻したのは月が頭上を超えて、沈み始めた時であった。

「トラ……めんなあ……」

俺はまだ泣いていた。泣き止む事ができなかった。今にも精神は崩れ落ちそうだった。

明寛の呼吸はどんどん静かになっていっていた。体温も徐々に下がってきている。

俺は何もできていなかった。

せめて、この館の中に入ってやる、と。俺は何かしなければという焦燥感から、震える脚を無理やり動かして、館の中へと入っていった。館の中も外の状況と全く同じであった。酷くボロボロで所々にナイフが刺さってあった。

俺は壁に刺さっていたナイフを手を持って、そのまま前へと進む。

幾段も続く階段を上る。一階、二階……

そして、三階に到達した時、大きな音と衝撃が鳴り響く。

「なんだよ……!!なんだよおつ……!!」

俺は怒りを感じていた。衝撃で揺れる館。その衝撃はボロボロになった建物を倒壊させるには充分であった。

足元の床が、徐々に亀裂が生じる。足早に移動しようとした時、天井が崩落した。

「あつ……」

瓦礫は俺の肩に直撃し、俺は勢い余って弾き飛ばされる。肩に鈍い痛みが走る。

それでもゆっくりと、起き上がり明寛を抱き直す。

「トラ…俺が…いるからな…」

天井から崩落した瓦礫は頭部にも当たっていたらしく、額から血が垂れる。

意識が朦朧とする中、自然と足を進ませる。すると、一際目立つ大きな扉の前に到達する。

「はあっ…はあっ…」

扉の奥からは声が聞こえた。少女の声だ。

俺は躊躇なんてしなかった。大きな扉を精一杯の力で押し開ける。

ギギギギギ…

重い軋む音が響く。部屋に入ると、中にはthe魔法使いと言えるような服装をした少女と、神社等でよく見るお祓い棒をもった紅白の服を着た少女がいた。

「はあっ…はあっ…」

「なんだ…？…この住民か？」

「知らないわ…そんな人間…」

魔法使いのような少女が俺へ疑惑の視線を向ける。すると部屋の端で倒れている背中から蝙蝠の翼を生やした少女が発言する。

俺の様子を見て、お祓い棒を持つ少女はまさか、と言って続けた。

「あなた…まさか外から来たの…？」

俺はその問に対する応えを発言するほど力は残っていなかった。力がなくなり、タオルを巻いて抱いていた明寛を地面に寝かせてしまふ。

「はあっ…はあっ…」

「なっ子供?!大丈夫なのかよ…?!」

魔法使いの容姿の少女が慌てて駆け寄る。

明寛の頬を手を当てて、息を飲んでいた。

「こんなに…冷たくなっちゃったら…。つて、お前もよく見たら怪我してんじゃねえか?!しっかりしろっ!」

「うっ…はあっ…」

俺は立つことすらできず、そのまま床に倒れ込む。先程まで熱かった傷部分が何も感じなくなる。限界だった。

「ト…トラあ……」

手を伸ばす。明寛の顔を見ると、あの笑顔が蘇る。口が裂けんばかりに最高の笑顔をする明寛の姿が。

「この感じ…元々衰弱していた所にあの吸血鬼の霧のせいで更に追い打ちになったようね…」

「き…り…?」

「そ。もう私達があの吸血鬼を懲らしめたから霧は消えていくけど…遅かったみたいね」

「アイツが…。アイツのせいなのか…?」

薄れていた意識が徐々にはつきりとしていく。そして同時に体よ芯から何か熱いものが湧き出すような感覚があり、身体が熱くなっていく。

「アイツの…せいで、トラは…」

「お、おい立つなって…?!」

もう立つ力すら残っていない筈だった。

もう声を出す力さえも無いはずだった。

もう諦めた筈だった。

だが今は、沸々と湧き上がるような感覚があり、じつとせずには居られなかった。

この館へ入る時の感情が再び湧き上がる。しかし、今度は寂しさは沸き起こらない。純粹な怒りが、そしてあの蝙蝠の翼を生やした少女への恨みの念が一気に生産されてゆく。

「お前の…せいで…!!お前のせいでええーっ!!!」

俺は無意識に手をかざす。すると横たわる少女の額から小さなガラス玉のような物が見えて、それが自分の手元にもあった。

同時にただならぬ存在感が信哉から放たれていた。今まで感じたこともない力が彼から放たれていた。

そして、その力を感じとった少女は目を大きく見開いて冷や汗をかいていた。

「そ、そんな…?!この感じはフランの…」

「ぶっ壊れるおおーっ!!!」

『キュッ!』

俺は手に浮かぶ小さなガラス玉のような物を握り潰した。ガラス玉は手の中で弾ける。

すると同時に少女の頭が瞬間膨張し、破裂。液体が飛び散る音と共に少女の頭だった物が弾けて、無へとさせた。

一瞬、魔法使いの少女とお祓い棒を持つ少女は現状の理解が遅れた。

「うおおあああつー!!!」

信哉は頭のない少女へと飛びかかり、体を素手で殴り付けた。すると、少女の体に穴が開き、背後の壁が砕け散る。

その場にいる二人の少女が信哉を止めにかかろうと駆け出す。

すると同時に、空中に突如現れた大量のナイフが信哉へと放たれていた。そして信哉の元に少女の姿はなかった。

「うっぐうう…!!」

大量のナイフが信哉の背中に突き刺さる。

顔を痛みで歪め、膝を落とす。

「お嬢様っ…!!」

先程までいなかった、メイド姿の女性が少女を抱き抱えていた。

そして、瞳から涙を流し信哉を睨みつける。

「許さないっ…!!どんな理由があろうと…貴様だけは…!!」

「クソがあああー!!」

信哉は背中にナイフが突き刺さった状態で、メイドが抱く少女目掛けて突進してきた。

メイドは懐から懐中時計と、どこからかナイフを取り出して、身構えた。その時に、ピリツとした電流のようなものが流れたのをメイドは感じていたが、無視して信哉へ攻撃を仕掛けようとしていた。

「時よ止まれ…!!貴様を切り裂いてやるっ…!」

世界の色が変わると共に、音も止み、風も止む。先程まで動いていた少女達が停止しており、メイドだけが動いていた。

メイドは信哉の喉元へナイフを突きつける。しかし次の瞬間、メイドの前から信哉は姿を消した。

「えっ……ー……があっ?!」

驚くのも束の間、突如メイドは横からの衝撃に襲われて地面へと転がり飛ばされる。

そして同時に色褪せた世界が、元に戻る。

「ど、どういう?!」

信哉はメイドを横から殴ったのだ。信哉の拳はメイドの顎を捉え、強烈な一撃を送り込んでいた。

そのため脳が揺れ、メイドは立ち上がることができなかった。

「止まった……時間を……動けるなんて……っ?!」

「うああっ……うおああああっ!!」

目に涙を浮かべ、あの吸血鬼の少女へと再び拳を向けた時だった。

ひっそりと存在していた明寛の呼吸は消え、小さく揺らいでいた炎が吹き消されたのを感じた。

その瞬間、信哉は金縛りにあった。そして、視界も急速に白くなっていく。音が遠ざかってゆく。意識も消え去ってゆく。

(あっ……)

ただの無が目の前に迫ってくるような気がした。そして、完全に意識が失われる寸前に、信哉は声を聞いた。

『王を護れぬとは何事だ。このような不屈き、決して許さぬ』

俺は世界から真っ白になって、消えた。

……

……

……

……い、……きろ……おい、起きろ……信哉!!

「っ?!」

大きな揺れと声によって俺は目を覚ます。何があったのかと顔を上げると、そこには父がいた。

? 衝突

「父、さん…?!」

俺は今、酷く混乱している。理由はたくさんだ。

まず父が目の前にいる。そして、明寛もすぐ傍にいる。俺も生きている。手には袋を持っている。リュックも背負っている。

今までの事が全て重なったかのような錯覚に陥る。

「だ、大丈夫か…? 怪我とかは…」

「あ、うん。大丈夫…だ…」

記憶もある。父は少女に食られて死んだ。明寛は俺と共に館で力尽きた。

……ただ、館での記憶は途中で途切れている。覚えている最後の記憶は、明寛を抱く力も無くなって倒れたのが最後だ。

一人で悶々と考えていると明寛が目覚める。

「ん、んう…。信兄い…?」

「トラ…」

正真正銘のトラだ。そして父さんも決して幻なんかじゃない。

では今までの事は何だったのか。俺は無理難題を押し付けられたかのような身の狭い感覚を感じた。

「とりあえずみんな無事で良かった…!」

「そうだな…。とりあえずご飯あるから食べて」

俺は考えながらも、手に持っている袋から食料を取り出す。

「あっ! バーボンボンうまぞこっ! 買っておいでくれたの?!」

「い、いや私達はスーパーで買い物をする前に事故にあった筈だ…!? だから袋を持っている筈なんて…んん?!」

父は俺が袋を持っていた事に酷く混乱する。すると、俺な背負っているリュックの存在にも気づく。

「そ、そのリュック、家を出る前に持ってきていたか…?!」

父が思っている以上に慌ててるため、俺は話すべきか迷ったが話す事にした。今までの事を…。

「実はね、父さん。俺も確証を持てるわけではないんだけどね…。かくくしかじか…」

「そ、そうなのか?!?そういう事なら信哉は予知夢、または未来からやって来たって感じなのか?!?」

「俺も分からない…。リュックを手に入れたのは大分後だし、袋を持っているのは最初だけで、もうひとつの袋はまだもってないし…。予知夢とも、未来からやってきたとも言いづらい…」

「っ…!!」

父は言葉を失っていた。明寛は空腹からかバーボンボンうまごこをチビチビと食べていた。なので、話を聞いているはずもないのであった。

その後、食事を取って少し休憩しながら信哉の話を聞いて、移動する事にする。

草木を掻い潜って、湖の浜辺へと出る。

「信哉の言う通り…湖だこりゃ…」

「んで、俺の記憶では右方向へと歩いていつて下流を下った」

「人や家は見つかったのか?」

「いや、見つからなかった。途中で姿は少女の化け物に襲われたから逃げただけどね…」

俺は敢えて父がそいつに喰われたという事を隠した。言いたくなかった。

実は今、信哉は密かに幸せを感じていた。もう出会える筈のない父と話ができている。もう見れないはずだった明寛の笑顔が見れている。それがとてつもなく幸せで、嬉しかった。

「じゃあ…反対の左方向はどうだったんだ…」

「左方向は湖に沿って歩けば、自然と畔に建っている館に辿り着いたよ」

「館…そうか。じゃあ左方向に進もう。信哉の話からだ空を飛んだりする化け物の少女がいるらしいからな…気をつけよう」

以前歩んだ道とは反対の、館への道を歩む事にした。

ザツザツと足音を鳴らす父と明寛だが、一方で信哉は無意識に足音

のしない歩き方をしており、また音に敏感になっていた。

「父さん、トラ。もう少し静かに歩こう。辺りが静かなだけに分かりやすい」

「そういえば信哉、さつきから物音一つたててなかったな…。どう歩けばいいんだ…?」

「こう…親指の付け根から…」

静かに歩くためのレクチャーを終えると、再び歩み出す一行。信哉にとつては同じルートをもう一度辿っていることにすぎない上、誰よりも警戒しているため危険察知能力は三人の中で群を抜いていた。

辺りは依然、濃霧に覆われており視界五メートル以降は見る事ができない。慎重に進んで行く。

無言の時間が続く。静寂は信哉達の余裕を削り、緊張を作り上げていった。

しばらく歩いた。目の前にはうっすらと見える、畔の入口らしきカーブ。

記憶通りならばその先に館はある。

「だいぶ歩いたな…」

「…トラ大丈夫か?」

「ち、ちよつと疲れた…かも…」

道の途中には大きな段差やぬかるんだ地面など明寛にとつて大変な場所も多々あった為、披露が目に見えるほど現れても仕方がなかった。

その様子を見かねて、父は休憩を提案する。

「明寛もこの様子だ…。少し休もう…」

「父さんも疲れているみたいだし、そうしようか…」

「ぐっ…まさかここで衰えを痛感するとはね…。それに比べ、信哉は現役だから元気ありあまつているみたいだな…」

「まあね…。夏だつてのに、この霧のせいか肌寒いな…。休憩する間だけでもこれ使つて…」

俺はリュックを下ろして、中からタオルを取り出し父と明寛に渡す。

同時に簡易濾過装置も取り出して、空の容器を持つ。

「何処にいくんだ…?」

父が心配そうに訊ねる。俺はただ水を汲みに行くだけだから、と言ってその場を後にした。

浜辺へと歩み寄り、水の清潔さを確かめる。

「透き通っているな…。あまりにも汚染されすぎていたらこんなじゃ濾過できなかったから有難いな…」

いくら濾過装置と言えども簡易だ。ドロドロの腐臭のする水は対応できない。

迷い込むところが自然豊かで良かったとも思えた。

「だいたい一リットルありや足りるよな…?」

俺は空の容器に水を入れ、その場から立ち上がった時だった。

「うおおああああつ!!」

「んっ?!」

突如響く悲鳴。その悲鳴の主はすぐに俺の前に現れる。

目の前の草木が激しく揺れたその次の瞬間、大きな影か濃い霧の奥からは草木を突っ切って俺の頭上を超えていった。

超えていくその時、その影が何者かを俺は見逃さなかった。

「父さんっ…!!」

俺は躊躇せず容器を捨てて、何者かに連れ去られる父を追うために湖へと入っていく。

すると、霧の奥から声が聞こえた。

「信哉あーっ!!明寛をがぶあつ…?!」

「父ーさん!!また…失ってたまるかよ…!!」

父の声は水の泡出つ音によって掻き消される。どうやら溺れかけているらしい。

すると、またすぐに父の声が聞こえる。しかし声は徐々に遠ざかってゆくように感じた。

「ぶはあ…!明寛を…!!明寛が危ないんだ!!俺よりも明と…かぶっ…?!」

「と、トラが…?!」

俺は再び、究極の決断を強いられる事態へと陥ってしまう。躊躇する。頭の中ではもう父が手の届かない遠いところへ連れていかれているのも分かっていた。

でもだ。また、見捨ててしまうのか。せつかくまた出会えたと思っていたのに。

すると間もなく、父が連れ去られた方向から色とりどりの眩い光が、霧の拡散よってぼやつと見えた。

「ひ、光っ…?!」

その光を確認できたのが境に、聞こえていた父の声が途絶えたのだった。

俺の中でとてつもない悔しさも後悔が生まれようとしていた。しかし、そんな事を干渉に浸るほど今に余裕はなかった。

「…っ!!…っ!!…くそっ」

俺は後ろを振り返り、明寛の元へと急ぐ。ズボンのポケットにしまわれたナイフを手にとって、全力で駆け出した。

すると、今度は森の中から光が発生していた。何が光っているのかと、目を凝らす。火ではない。黄色や青、緑など様々な光が入り混じっているからだ。

「火花か…?」

俺は身構えて先程、休憩するために座った場所へと飛び込んだ。すると、濃い霧の中から黄色に光る玉が突然近づいてきていた。

「うおっーーーーー」

俺は咄嗟に膝を落として、回避する。黄色に光る玉はそのまま通過していき、やがて消えた。

「光の原因はアイツか…i:トラアーツ!!」

全力で明寛を呼ぶ。すると信兄い助けてえ!と叫ぶ声の下から聞こえた。

声の元を探ると、少し急な下り坂の元に複数の影に囲まれた明寛の姿があった。

「トラから離れるやあーっ!!」

下り坂を勢いをのせて下り、その勢いで複数のうちの一つの影へめ

がけて、蹴りを炸裂させる。

「でりやあつー！」

「んぎやつ!？」

「ち、チルノちゃん?!」

俺が蹴ったのは宙に浮く少女であった。他の影も宙に浮く少女で、蹴り飛ばされた少女に気を取られてた。

そのうちに明寛を抱き上げて、全速力で駆け上がり、荷物を拾い上げて館へと駆け抜ける。

「ち、チルノちゃん! だから急に飛びかかるのはやめようって…」

「あ、アタイってばサイキョー…ね…」

「チルノちやあああん!!」

………

少女の叫び声が後ろの方から聞こえたが、俺は全力で走った。振り返らない。

走っている間にも、明寛の状態を確認する。呼びかけで反応がないため、気を失っているようだった。明寛を抱いている時に、肩部分が異様に冷たく感じたのをおかしく思ってみると、不思議な事にその部分だけ氷が出来ていた。

「…!!霜焼けや凍傷になってなきやいいが…!」

俺は速度を上げて、そのまま館へと急いだ。

……

……

………

館の門の前に来るのは二回目であった。しかし、今回は前回と違う。

整った木々や大地。整備された巨大な門。そしてその門の下でひっそりと立ち続ける一人の門番。龍と刻まれた帽子を被る、紅髪の

長髪を風で靡かせる彼女の元へ。

俺は門番らしき彼女の元へと駆け寄る。

「あ、あの…すいませんっ」

「…」

彼女は背筋を伸ばし、緊張したままで、反応はない。

もう一度問いかけてみる。

「あのっすいませんっ！」

「…」

またしても反応がない。ただ一点を見据えて。

初対面の人へ触れるには抵抗があるが、事態が事態だ。俺は彼女の肩へ手を伸ばし、揺さぶろうとした。

「っ?!」

彼女に触れた瞬間、静電気のような衝撃が指先から全身へと走る。

手を気にしながらも彼女の方へと視線を向けると、未だに視線すら微動だにしない姿があった。

もう一度、手を伸ばした時だった。

「っ?!」

世界の色が突然、黒くなり白くなり色褪せる。風が止み、靡いていた彼女の髪も空中で固定されたかのように浮いたままであった。

「な、何が起きているんだ…?!」

自身の腕元にいる明寛へ視線を移す。明寛も周りと同様に色褪せてしまっていた。

しかし、俺はこの現象をどこかで体験した事があるような気がした。初めて、というような感じはない。だからこそ、不思議とそれほど混乱もしない。

「静かだ…自然の音も何も無い…。究極の静寂がここにあるのか…」

俺はあまりの静けさに気を取られ、手に持っていたサバイバルナイフをうっかり手から落としてしまう。

咄嗟に足を引き、ナイフを目で追う。しかし、ナイフは落ちなかった。俺の手から離れた瞬間に、色褪せて宙で止まったのだ。

「止まった…?!まさか、まさかそうなのかつ?!いや、ありえない!そ

んな事、あろう筈がない…!」

俺はこの現象が何なのか、分かったような気がした。しかし、その考えはこの世界の作り上げたバランスをいとも容易く崩壊しかねない。また、対処する事もできない。起こったら最後、そう感じた。

冷や汗を掻きながらも、宙で止まったナイフを取り、ズボンへとしまう。

その時だった。

「そんな…どうして動いているの…?!」

凜とした風格を放つ、メイド姿の銀髪の女性が門の奥で立っていた。

俺は驚いて、声を出せなかった。息を整えてやっと出した声は裏返っていた。

「あ、アナタはっ?!」

メイド少女は俺に驚きながら、一呼吸すると、冷徹な視線へと変わり、冷ややかな対応もなる。

「お嬢様から人間は追い返せ、と言われております。お引き取りください…いっ!!」

メイド少女は言葉の最後で門番へと、どこからか取り出したナイフを投げつける。ナイフは宙で止まり、色褪せる。

そして、パツと一瞬で停止していた何もかもが動き出す。色も戻っている。

「も、戻った?!」

「あイターツ?!」

突然の景色の変化に驚いていると、メイド少女が投げたナイフも動き出し、門番の後頭部へと突き刺さる。

門番少女の悲痛なる叫びが霧の中に溶けていった。

俺は彼女が死んだと、思ったが違った。即座に刺さったナイフを抜きながら振り返り、メイド少女へ頭を必死に下げる姿があった。

「すいません咲夜さんっ!」

「もうこんなすぐ近くまで部外者に近寄られているのはどうしてよ…?」

「あつ、あいええー?! 気を張り詰めて寝てたのに、なんの気も感じなかったんですけどどうしてっ?!」

長く紅い髪を揺らしながら、俺に掴みかかってくる。その時に驚いたのだが、力が強い。とてつもなく。掴まれた肩が、痛い。

「…人間だからでしょう。なんの力もない」

「…あ、何も無いからこそ気づかなかったんですねー。なるほどっ!」
「あ、あの…」

俺はこの二人の会話についていく事ができなかった。なので、自分の話をいつ切り出せばいいかも戸惑ってしまった。

「ん? じゃあこの人間って食べていいんですかね、咲夜さん?」

「構わないわ…。食糧としてなら大歓迎よ」

「っ…?!」

「おっ」「えっ」

俺は辺りに漂う雰囲気から、本能的に危険を察知し、門番少女の手を振りほどいて素早く後退していた。

先程まで俺の喉があつた場所には、門番少女の尖った爪が空に弧を描いていた。

「今のを避けるなんて…。咲夜さん、この人間案外やるかもしれないよ? わざわざ自分の胸で手を見えなくして死角からの攻撃だったのに躲すなんて…」

「ふーん…」

メイド少女は腕を組んで、俺を見定めるようにじっと見つめる。

初めて訪れる沈黙。逃すわけにはいかないと、俺は口を開いた。

「た、助けてくださいお願いしますっ!! この子だけでもいいです…! 雑用でも何でもします…!」

「実はね、美鈴。この人間、さつき時間が止まった中を動いていたのよ」

「…それマジですか?!」

「さあわからないわ…。だから…」

「あ、あの…どう…」

俺がもう一度頭を下げようとした時だった。メイド少女は即座に

片手に懐中時計、ナイフをそれぞれに持ち、俺を睨みつけた。

「今、もう一度確かめるまでよっ！」

再び、世界が色褪せる。

メイド少女は俺へ目掛けてナイフを投擲する。

「ぐっ…?!」

俺は反射的に横へ飛び、回避しようとする。しかし、ナイフは宙で止まり色褪せる。

「…やっぱり、動けるのね」

メイド少女は宙に浮くナイフを回収する。

すると同時に世界が元に戻る。

「わっ移動してる」

門番少女が関心したように声をあげた。

俺はもう、何をされているのかわからなくなっていた。だからこそ、俺は地面へ明寛を寝かせ、彼女達の前で立ち直った。

「あの、戦えば…助けてくれるんですか…?」

信哉は話の通じない二人を相手に助けを求めるのは馬鹿のように感じていた。

先程からの二人の行動から察するに、俺よりも強いのは明白であった。だが、こうする他に考えは浮かばなかった。それほどまでに、余裕が無くなってしまったのであろう。

そして、その様子を見た門番少女は興味ありげに信哉の方へと歩み寄っていた。

「アナタの事…少し気になりましたよ…。咲夜さん、いいですか?」

「私に許可を求める前にもう動いているじゃない。後で罰を用意しておいたらいいのでしょ? わかったわ」

「そこは『わかったわ、いってらっしゃい。怪我をしないでね』って応援してくださいよ」

「嫌よ」

「ちえー…」

信哉はボクサーのように腕を上げて構える。そして、門番少女から漂う只ならぬ気迫、オーラ。まるで強風機の前に立たされるような感

覚で、後ろへ流されそうになる。

しかし、信哉はいつもと違う感覚に陥っていた。いつもより、視界がハッキリとしていて、体が軽く感じた。

今から始まる戦いは、門番少女にとつては遊びに近い部類なのかもしれない。しかし、信哉にとつてこの先生き延びるための重要なモノを得られるとは彼自身も思いもよらぬのだった。

?芽生え

門番少女は長い髪をゆらゆらと揺らしながら信哉へと距離を詰める。

信哉は彼女から放たれる覇気や、気迫に恐怖して、焦っていた。

(ど、どうする…?!あの力で来られたら対処も何も無い…?!)

「隙多いですね…もしかして返し技が得意なんですか?」

「…っ!!」

信哉は瞬きすら出来なかった。彼女の一つ一つの動きに気を取られ、より焦りは大きくなる。

(落ち着け、落ち着いて見るんだ…!?)

彼女との距離が五メートル程まで縮まった時、彼女の体から放たれる波動のようなものに動きが現れる。

彼女の脚、そして右手の波動が急激に膨張する。

(何だ…力が溜まっていくのか…!)

不思議に思っていると、門番少女は地面を音なく蹴り、一瞬で信哉へと詰め寄る。そして、その勢いを右手へと移動させ、高速の掌底を放つ。

「ぐっ!!」

信哉は咄嗟に後ろへ後退し、腹部を両手を交差させて守る。

その事により、少女の掌底は腹部へ命中すること無く、腕が弾かれるだけで済む。

「わっ、よく反応できましたね?!」

「ぐっ…?!うおおああああっ!!」

腕で防げたのはいいものの、腕の骨に響く鈍い痛みと衝撃。波打つように強弱の衝撃があり、腕を痺れされる。

「じゃあこれはどうですか?!」

彼女は次の攻撃を繰り出そうと、前方へ跳びながら左脚を地面と垂直に上げた。

天を貫くようにピンッと上げられた脚では先ほどと同じように波動が膨張しており、避けなければと反応した際には既に信哉の頭上に

脚が高速で下りていた。

音も置き去りにするほどの速さで振り下ろされた脚は大地を砕いた。

「…よく、避けましたね」

「はあっ…はあっ…はあっ…?!」

信哉は目をチカチカさせて息を切らしながら、自身が彼女の蹴りを回避した事に気づく。

どのように回避したのか、咄嗟の行動だったため、あまりわからない。

蹴りを避けられた事にかなり驚いた彼女は一呼吸おいて、体勢を整える。

「ふううー…」

信哉は再び身構える。荒れた息をぐつと抑え込んで、彼女が纏う波動を観察する。

(先程からの傾向からして、あの波動は力らしい。溜まればたまるほど強いのか…)

俺は視線を自身の掌へと移す。彼女ほどではないが薄い膜のように体の表面を流れているのが確認できた。

「余所見とは!!油断大敵ですよっ!」

「ぐっ?!」

すぐに視線を上げたのだが、彼女は目の前に既に迫っており、左手で突こうとしていた。

信哉は体を精一杯捻って躲そうとするが、彼女の掌底は信哉の脇腹へと届いたのだった。

「こほっ…いぐっ…い!」

彼女の手では波動が急激に膨張しており、その波動が自身の体内へと伝わり衝撃となる。体内から破壊されていくに等しかった。

息をする事すら難しくなる。後ろへ倒れながらも、彼女から目を離さないようにしながら、地面へと手を着く。

「ぐうっ…はあっ?!」

「アナタすごいですね。全く武術を取り入れていないのにも関わら

ず、気の扱い方は常人を凌駕してますよ」

彼女は笑っていた。俺の全てを見据えるような、息の詰まりそうな視線を向けて。

呼吸を乱しながらも立ち上がる。構える程の余裕すらなく、ただの棒立ちだが。

「はあっ…はあっ…?!」

「…これで終わりですかね！楽しかったです」

彼女はニコツと笑みを浮かべると同時に、右手に今までで最大級の波動が膨張していた。先程までの戦いは何だったのかと疑問に思うほどの力。

俺は体の表面に漂う僅かな波動をある箇所へと、無意識のうちに集めていた。

「フツ!!」

彼女の足踏みが大地を響かせ、右手に込められる力によって空気が揺れる。

再び掌底の予備動作。今までのと比にならない。

信哉は、いつもと違う感覚に陥っていた。背景が消え、彼女一人しか目の前にない。そして、見える。どのように動こうとするのか。彼女の腕、腰など様々な箇所の筋肉が微かに動く姿を捉えられていた。

何故、この現象が起こっているのか。それは信哉の波動が集まっている場所が関係していた。

目と脳だった。信哉はその二箇所へ波動を集めていた。

信哉は無意識の内に理解していた。この波動が力を増幅させたり、細胞を活性化させることを。

波動によって強化された眼は物事を的確に捉え、そして脳は通常よりも何倍もの効力を発揮する命令を下す。

「ハアツ!!…うーっ?!」

彼女の叫びと共に掌底が放たれるが、僅か一瞬の出来事に度肝を抜かれた様子で体勢が崩れていた。

彼女の掌底は信哉に当たる事がなく、そのまま空を穿っていた。

強化された脳からによる行動は、通常の何倍もの力の元で行われ

た。掌底を避けるために上半身を逸らし、下半身はすり足で横へ移動。彼女の腕が通過した際に、脇に挟め、彼女が前傾姿勢であることを逆手に後方へと引っ張る。

以上の行動が僅か一瞬で行われたのだ。波動によって強化された脳の伝達能力は超人的な力を開花させたのだ。

そして彼女の勢いは未だに失っておらず、そこに同じ方向の力が加われれば止まるはずの勢いは止まらず、そのまま体勢が崩れてしまう。そして二人は目にも止まらぬ速さを保ったまま地面を転がり倒れる。

「ぐ、うああ…?!」

「イタタ…。ま、まさか避けた上に引っ張られるなんて…。ん？んん？」

信哉の姿を見て彼女はなにか不可解な事を感じたのか、頭上にクエスチョンマークを浮かべせたかのような表情をする。

ちなみに少女が信哉へと覆いかぶさっているような状態なので、信哉は何も動くことができなかった。

「アナタ…この感じ。もしかして気を操れています？」

少女は腰を下ろし、信哉の上に座る体勢で、右手を上げて波動を膨張させた。

「くっ?!」

信哉は咄嗟に両腕を交差させて、腕の波動を膨張させる。

すると、彼女は違う違うと言いながら自身の右手を指さした。

「今、この手に溜めている気が見えますか？」

「あ、えと…黄色やら緑やらそんなオーラみたいなのが手で玉になっってます…」

「へえ…いやあ見えてるんですね。さっき腕で防御しようとした時に、腕で気を固めていましたけど操ったりもできるんですか？」

「操っているっていう実感はありませんけど、その…何となく意識で波揺れるみたいなのそんな薄い感覚でしか…」

彼女はへえ！と戦う時と同じような笑みを浮かべる。しかし今の視線は、敵意などの見据えるような恐ろしいようなものではなかつ

た。

ただ人が人を見るために使う、普通の視線であった。

そして、彼女からは先程まで感じていた迫力などが消えていて、朗らかな印象であった。

「咲夜さん！咲夜さん！」

彼女が信哉の上から立ち上がると、メイド少女の方へと駆けていく。

信哉は何が今起こっているのかが理解出来ず、ただ呆然と二人の少女へと視線を向けることしかできなかった。

「あの人を助けませんか？」

「お嬢様からは人間を近づけるなって言われているけど？」

「そこを何とか…!!ダメです？」

「私は嫌よ。お嬢様に許可を求めに行くなんて面倒だし。そんなに助けたいならアナタがお嬢様の所へ行つて頂戴。私は仕事に戻るわ」

メイド少女はその言葉を最後に目の前から姿を消す。残された紅い髪の女性は信哉の方へと向き返り、駆け寄る。

「じゃあ少し私に着いてきて下さい！直接お嬢様の所へ許可をしに行きます！」

彼女はそう言うと言信哉の手を取って、館の中へと進もうとする。

信哉は引つ張られつつも明寛を慌てて抱き上げて、少女と共に館の中へと入っていった。

信哉は未だに少女の考えを読み取ることができなかった。先程まで食べようとする考えがあったはずだが、逆に今は助けようとしている。わからない。読むことができない。

悶々としながら彼女に引つ張られ続けると、とある大きな扉の前へとたどり着く。その扉には見覚えがあった。この扉の奥で、力尽きた事を信哉は覚えていた。

「少し待ってて下さいね！」

少女はそう言うと言つてから扉の中へと入っていった。

絶望の中で彷徨っている時にはあまり気づかなかつたこの館の内装。長く続く廊下には窓があまり無く、また照明は蠟燭の灯火なのだ。

が数も少なく、暗闇の空間が多い。灯火で照らされる床や壁は紅く、目に突き刺さるような錯覚を覚える。

信哉は不安を紛らわすように、明寛の様子を確認する。明寛の体に付いていた氷は溶けてなくなっており、また息も落ち着いていて弱っている所は見受けられなかった。

その事に少し安心していると、扉がキイイと静かに開く。扉の奥から少女が顔だけを出して、入れと手招く合図をしてくる。

信哉は素直に扉の奥へと進む。

部屋の中は廊下と同じように、またはそれ以上に暗闇に包まれていた。

ただし、その暗闇の奥で紅く光り輝く二つの眼光が信哉達を捉えていた。

「…っ!」

思わず身震いしてしまう。

猫ともトカゲとも違う眼は、今からでも獲物を狙っていると言わんばかりの鋭さを感じさせた。

恐怖しているからなのか、肌寒く感じる。先程まで戦闘の余韻で暑い程だったのにだ。

信哉達をジッと見つめ、ほんの少したった時、暗闇の奥から少女の声が聞こえた。しかしただの声ではない。重くのしかかるように感じさせ、緊張で喉が詰まりそうになり、口が動かせない。

今、信哉は目の前にいる者に命を握られているような、そんな感覚であった。

「…人間よ。貴様は何とも不思議な奴だ…。運命が定まってない…」

少女の声が闇に溶け込むようにサツと消える。そして再び沈黙。再び見据える。

「…いいわ。美鈴」

「お嬢様ありがとうございますっ!」

隣に立つ少女は勢いよく頭を下げ、その場を後にしようとする。その後を信哉は継るようについて行くのだった。

部屋から出ると久しぶりに生きた心地を感じたのだった。

「ふ、ふああ…」

「やっぱり、怖いですか？」

「す、すごく…」

壁へ体を預けていると、少女は良かったですね！と手を握ってくる。

「やりましたね！アナタはここで暮らせますよ！」

「ほ、ホントですか?!ありがとうございます…!!」

信哉は少女へと勢いよく頭を下げる。目頭が熱くなっていくのを感じた。するとタイミングよく明寛に反応がある。

「ん…んう…」

「?!?トラ…トラッ?!」

目を擦りながら明寛は信哉の顔を見る。まだ寝ぼけているのか、とろーんと甘い表情になっている。

しかし、すぐにハツとして辺りを見回す。大事なものを探すように忙しなく辺りを見回す。

「信兄、父さんは…?」

「父さん、は…な……」

信哉は助かったと喜んだ矢先に、明寛からの問いで罪悪感が蘇り、また明寛へ父さんの事を言う覚悟ができていなかったため言葉が出てこなくなる。

少しの間の沈黙が明寛を理解させてしまったのだろう。

明寛は涙を浮かべ、そのまま信哉の肩へと顔を押し付けた。

「…っ…っ!!」

そして信哉はまた更に罪悪感を感じた。小学に上がって間もない少年を、親が亡くなった悲しみで声を上げて泣かせてやれないのを凄く申し訳なかった。

だが同時に救われもした。明寛が声をあげなかった為に、信哉の心は保たれているのだ。もしも号泣なんてしてしまったら父を亡くした悲しみに囚われ続けてしまうだろう。

だからこそ、信哉はまるで生きた気がしなかった。

ほんの少し時間が経つと再び明寛は眠ってしまった。疲れたのか、

または心を保護する為なのか。

信哉は明寛の頭を撫でつつ、少女の案内の元、ある部屋のベッドへ寝かせるのであった。

「ありがとうございます…。えっと…。自己紹介がまだでしたね…。俺は黒羽信哉です。遅れてすいません」

「私は紅美鈴といいます。そしてここは紅魔館と言って主が吸血鬼です」

美鈴はそう言うと、手を出してくる。信哉がゆつくりとその手を握り返すと、美鈴は笑みをみせた。

「この子はこのベッドで寝かせておいて構いません。ですが信哉には私と一緒に行動して欲しいのです」

「紅さんですね。わかりました」

美鈴と信哉はこの部屋を後にすると、今まで通った道を戻り、門までやってくる。

「うーん、やっぱりこの景色はつまらないなあ…」

辺り一面、濃い霧で覆われている事で殺風景となり、それが美鈴にとって不服らしい。

「ま、別に寝るから関係ないんですけどね…。さてと、信哉にこれからの事を説明させていただきますね！アナタは第二の門番です！つまり、私の部下です！わかんない事があつたら聞いたりして、私の命令には従うように！」

「わかりました、大変微力ですが、お願いします…!!」

信哉は再び深々と頭を下げる。

美鈴は大丈夫ですよと笑い混じりに言う。

「さてさてくじやあ早速私の命令を聞いてもらいますよ！少し脚を触らせて下さい！あ、立ったままで構いませんよ」

「わ、わかりました…」

美鈴はしゃがんで信哉の太ももやふくらはぎなどを触り始める。にぎにぎと押したり、指でつついてみたり、手のひらで撫でたりなどする。

「んんん…：それほど筋肉や脚が強いとかそういう訳ではなさそうで

すね……。じゃあなんであの時あんなに素早かったんだろう……。ねえ
なんですか？」

「えっ」

突然の問いに信哉は驚いた様子で、答えようとしてもなんの事を
言っているのかが分からず、答える事ができなかった。

その事を見据えたのか、もう一度質問をする。

「私の掌底を交わした時ですよ。その前にはバツチリ掌底くらって
て、立っているぐらいでかなり苦しい筈なのに……」

「あ、あの時は確か……。紅さんしか見えなくなつて……。どう動くのかが
理解できて……。あとは我武者羅でした」

「ふうん……」

美鈴はまあいいやと立ち上がり、元の場所へ戻る。

信哉はリュックを置いていつてしまったのを思い出し、門周辺
を探す。霧が濃くて視界が悪いものの、置いた場所は何となく覚えて
いたので、時間はかからずに見つける事ができる。

「えつと……。どこに入れたっけ……。あつた」

信哉はリュックの中からメモとペンを取り出して、美鈴の方へと訊
ねる。

「あの紅さん、ここは何て街なんですか？」

「街……。この世界には街なんてもの、ないと思いますけど……。あ、人里
ならありますよ……」

「街がない……。じゃ、じゃあここは何県なんですか？」

「県……。それも聞いた事がないですね……。ここは幻想郷、ただそれだ
けですよ……」

信哉はよく理解ができなかった。幻想郷という場所は聞いたこと
もないし、逆に県すら不明なのは想定外であつたからだ。

ペンやらを構えたのはいいものの、肝心な情報が手に入らないので
あれば意味はなかった。

頭を抱えていると、横から美鈴が信哉の顔を覗き込む。

「ど、どうしました……。？」

「やっぱり信哉、肌綺麗だね。できものとか、痣とか何もなし」

「そうですか…う…あまり気にした事はなかったですね…」

信哉は自分の頬を触れてみる。特に変わりない、いつも通りだ。思い返してみれば少し気になったことが信哉にはあった。それは自分達以外の男性を見ていない事だ。

メイドはいいとして、門番、主が女性であるというのは少し気になった。でも、その事を美鈴に聞こうとは思わなかった。それほど重要性を感じなかったからだ。

それからは美鈴と他愛もない会話を挟み、時間を過ごす。

ある程度話し続けると、話す事が無くなってしまう、沈黙画訪れる。

信哉はリュックから主導蓄電器を取り出して、取っ手部分をキュルキュルと音を発しながら回す。

すると、蓄電器に興味を持ったのか美鈴がしゃがみこんでジッと見つめる。

「信哉、これは…？」

「蓄電器です。回すことで電力を溜めれるんです」

この蓄電器には電池を嵌め込む部分があり、電池を嵌めると充電できるのだ。なので、今手元にある二つの乾電池を嵌めて充電しているのだ。

このように中々にハイテクなのだが、回し続けなくてはならないので地味で疲れるのだ。

早くも疲れが現れて面倒に感じてきた時、美鈴が手を挙げて言った。

「あの、信哉！私にやらせてください！」

美鈴は目を輝かせて信哉に詰め寄った。一体どこにそんなやりた要素があるのかは、信哉にはわからないが素直に美鈴へと蓄電器を渡す。

キュルキュルキュルキュル…

キュルキュルキュルキュル…

キュルキュルキュルキュル…

美鈴はただ黙々と回し続ける。かれこれ三十分ほど経ったはずだ。でも、美鈴はまだ飽きた様子がない。

「あ、あの…飽きたりしたら止めてもいいですからね…？」
「心配無用です。楽しいですし」

美鈴が蓄電器を回し続けるのを信哉はただ眺めていた。その事に気づいた美鈴は信哉へと命令を出した。

「信哉あく肩揉んでください」

「あ、あのやっぱり疲れたんじゃ…」

「そんなことない。いけます…！」

美鈴はドヤ顔で親指を上げる。一体どこに楽しさを感じているのだろうか。

信哉は美鈴の肩を揉みながら、キュルキュルと回す音を聞き続けた。

時間が進み、日が沈もうと辺りが闇に包まれそうな頃。美鈴達の元へやってくる者が、門の奥からいた。

「美鈴、差し入れを持ってきたわよ…って何してるの？」

その者は何時ぞやのメイド少女で、布を被せた藁で編まれた籠を持ってやってくると共に、美鈴が回し続ける蓄電器に気づく。

「あ、これは蓄電器です。紅さん、ずっと回しているんですけど、やっぱり止めた方がいいですよね…？」

蓄電器に没頭している美鈴が変わって信哉が答える。メイド少女は相槌をうつものの、興味はないようであった。

「蓄電器ねえ…ふーん…。ところでアナタ、どうしてここにいるの？」

メイド少女は冷たくあしらう様に質問してくる。少し戸惑いながらも信哉は答えた。

「ほ、紅さんのお陰でこの館に泊めていただけの事になりました黒羽信哉と申します…自己紹介が遅れてすいません…」

「知ってるわよ。お嬢様から聞いていますし、わざと聞いたのよ。私は十六夜咲夜。紅魔館の家事担当してるの」

「十六夜さんですね、俺は大変微力ですけどよろしくお願いします…」

信哉は手を前へ差し出して握手を求めるが手には籠を渡され、メイド少女…咲夜はそのまま紅魔館へと帰ってしまった。

「やっぱり、歓迎はされないよな…。泊めてもらえるだけでも感謝し

なくちやな…」

何とか安全な場所を手に入れたはいいが、この先にある壁を超えるにはかなり苦勞しそうな事を、信哉はヒシヒシと感じていた。

ピ。ピ。ピ。ピッ

「うわっ」

咲夜の背中を見て申し訳なさを感じていると、後ろから充電している電池が満タンになったアラームとその音に驚いた美鈴の声が聞こえた。

信哉は苦笑いを浮かべて、美鈴の元へと駆け寄ったのだった。

(何とか…力にならなければな…)

別に仲良くなりたいたいかそんな感情からではなく、助けてくれた恩義を報いたい思いがあるからこそ、何としても力になりたいと信哉は強く思うのであった。

? 辺りに漂うは紅き霧

信哉は早朝の涼し気な風に当てられて目を覚ます。

体にはリュックに入れてあったタオルが羽織られていて、信哉の脚を枕にして寝ている美鈴の姿があった。

信哉は思わず声を出してしまいそうになったが、頑張つて飲み込んだ。

そして、その時に手に袋が握られている事に気づく。

「…ああ、また家に戻れたんだっけ」

記憶は朧気だが、再び元の世界にて物を取り揃えた後に、こっちの世界へ戻った感覚があった。

「…夢が現実になつて、その夢を自由に見れるのかな…」

袋の中を覗くと、中には蟻酸（用途としては皮革加工で用いる）や濃塩酸、濃硫酸、トイレ用洗剤（塩素系）、ブラシにたわしが入っていた。

手に持っている袋をリュックの中へ入れると、未だに信哉の膝で寝ている美鈴を起こす事にする。

「紅さん、起きてください…。朝ですよ…」

「んっ……んう…」

肩を揺すり、声をかけるが中々起きそうになかった。なので起きるまでずっと揺さぶっていたが、門の奥から咲夜がやってくる。

「おはようございます、十六夜さん」

「…美鈴、起きなさいっ」

咲夜は美鈴にナイフを投げつける。痛烈な叫び声があたりに響き渡る。

「い、いたっ?! ええっ?!」

何が起きているのか状況を掴めておらず、寝ぼけてもいるために、のらりくらりと辺りをうろつき始める。

「うーん……ここは…」

「何を言ってるの。早くしつかりなさい」

咲夜はそう言うのと、ナイフを再び投げつける。一直線に進んだナイ

フは軌道上にいた美鈴を射る。

二度目の痛みで美鈴はようやく目が覚めた様子だった。

「ナイフが二本…私専用の目覚ましです…」

刺さっているナイフを愛おしく撫でながら咲夜へと手渡す美鈴。

咲夜は呆れ顔で溜息をついていた。

「しつかり起きてなさいよ」

咲夜はその言葉を最後に館へと戻る。その際に、朝食が入っているのであろう藁の籠を置いていったのだった。

美鈴は籠を持ち、信哉へと歩み寄った。

「ふふふ朝ごはんにしませう！」

「ありがとうございます…！」

朝から驚かされてばかりであるが、柔軟に対応していかねばと思う信哉であった。

同時刻。明寛はこの世界に来てからの事を思い出していた。

道も家もなければ街灯などの灯りもない真っ暗な夜。カエルを肩に乗せて遊んでたら、空を飛んでヒヤヒヤと感じる少女に襲われて。父は別の空飛ぶ少女に連れ去られて。

「どうして…こんな事になっちゃたのお…!!」

嘆くように布団へ顔を埋める。悲しいのか、怒っているのか、もう何もかもが混沌としていた。壊れそうだった。

だから明寛は、考えないことにした。ただブーツと無意識下で過ごすことにした。せざるを得なかった。

ベッドから降りて、部屋を出る。

靴も履かずにちてちと暗い廊下を彷徨いはじめる。

まるで吸い込まれていくかのような場所へと、明寛は移動していった。

階段へと辿り着くと、今度は降りてゆく。三階、二階、一階、地下…。

地下の途中で大きな扉が佇んでいた。扉の奥からは空気の流れによるゴオオオという音が聞こえた。扉の奥は広いらしい。

明寛は手を伸ばした。しかし、扉は重いのか明寛の力では動かす事ができなかった。

階段へと戻り、またさらに地下へと降りてゆく。

最下層へ辿り着くと、そこには今までの扉とは雰囲気の違いが一つあった。

手前に鉄格子のような防護柵があり、その奥に木の扉があった。部屋への入口というよりは、牢屋または監獄の入口だろう。

明寛はまず鉄格子の鍵を開ける。穴に棒が刺されて鍵が掛けられる仕組みだったので、その棒を抜くだけで鉄格子は開けることが出来た。

そして鉄格子の奥にある扉の取手に手をかけた時だった。

「待ちなさい」

「…!!」

後ろから唐突に聞こえる声。振り返ると背中から悪魔のような黒くて鋭い翼を生やしたロングの赤髪の女性が本を数冊持ちながら立っていた。

「そこは開けてはダメよ。こっちへおいで」

女性は明寛を抱き寄せて、開けられた鉄格子に再度鍵をかける。

そして、女性は明寛と向き合った。

「…失ったのね。かけがえのないものを」

女性はもう一度、明寛を抱きしめた。

理解できなかった。なぜ知らない人が抱きついていいるのだろう。なぜ自分の顔を覗き込んだらそんな悲しそうな顔をするのだろう。わからなかった。でも、恐怖はなかった。

「アナタは、生きている。そして大丈夫。きっと周りの人達が手を伸ばしてくれるから。だから、大丈夫…」

「…う…」

自然と涙が流れた。何も知らない女性に宥められて、恐怖を抱けなのまま、ただ心の安定を求めるかのように、女性に抱きついていた。

「アナタは、まだ戻れる。心を捨ててはいけないわ」

「うあ…!!」

悲しくても、泣いてはならないし、言ってもならない。信哉が悲しんでしまうから。

だから泣かない為にも心押し殺す。

まだ知識なき子供であるからこそその不器用さで、心押し殺すも悲しみだけを選ぶことは出来ず、喜怒哀楽全てを押し殺そうとしていた。このまま行けば、精神は朽ち果て、泥人形のようにボロボロと生きる事になっていただろう。

しかし、それはこの女性によって阻まれた。明寛は彼女に抱かれると懐かしい感情、感覚が蘇った。母からの愛情表現である温かい抱擁だ。事故によって奪われた温かき場所をその日から、求め縋っていた。

悲しませまいと家族の前ではより笑顔に。

明寛は思った。

(悲しみを押し殺すなんて出来るはずがないじゃん…!!元から…悲しんでたじゃん…!)

明寛は、今まで悲しんでいないと自身へ無意識に暗示している事に今、初めて気づいた。

自身にすら裏切られた感覚になる。

しかし、そんな感覚もすぐに消えるのだ。それは自身がこの女性の母性を感じ、また受け入れてるからだ。

「うああ…っ!!ええええええええっ…!!!」

明寛が女性の抱擁を返すように力を込めると、女性もまたより強く明寛を抱きしめたのだった。

夕暮れの光が霧に溶け込み、辺りの空間を橙に染める。

信哉は朝から夕方まで美鈴との会話や、何故か戦い方も教わったりと、様々な事をして過ごした。

そして、その時に信じられないような事も知った。まず、美鈴が人間ではないということ。この事に関しては、空を飛ぶ少女などを見ていたため、信じ難いのだがどこか納得してしまう自分がある。

もう一つは、自分達がいる場所はもともと自分達のいる場所ではないということ。夢で何度も元の世界へ行き来している為、この世界が別世界という事を無意識の内に理解していたが、改めて理解すると頭を抱えさせられる内容だ。

日は完全に沈み、月が上り始めたときに美鈴から指示が出た。

「信哉、一旦屋敷へ戻しましょう。お嬢様から話があるので」

「わかりました…」

門を空けて良いのだろうかと疑問に思ったが、美鈴の言葉に従ってついていく。

屋敷へ入り、階段を上り、長い廊下を歩いて大きな扉の前に立つ。主の部屋だった。

中へ入ると、エントランスから差し込む白金の月光が部屋を照らし、数人の少女を白く染めていた。

「さて、人間。貴様の名は」

エントランスの柵に身を預け、あの猫ともトカゲとも違う鋭い目の紅い瞳を向けられる。相変わらずの緊張感であった。しかし、今度は余裕がある。月光が少女を照らして姿が見えているからだろうか。

「俺は黒羽信哉です。この館での在任許可、誠にありがとうございます。主様…!!」

小学生である明寛よりも小さい少女へ、膝を落とし頭を下げる信哉。彼女からは圧倒的強者である覇気と風格があった。故に、誰であろうとこの少女の前では頭を下げ、忠誠を誓いたくなるカリスマ性があった。

「私はレミリア・スカーレット…。この館の主よ」

レミリアを名乗る少女は柵の上から、翼をパタパタと羽ばたかせながら降りて、その場の全員へと問いかけた。

「この世界では…弾幕ごっこことやらで随分と退屈のしない世界であろう。しかし…夜中しか動けないとなると少し肩苦しい。…：：：そこだ。私は日光さえ妨げれば活動できるのだ…。もし出来たのなら、私は昼であろうと関係なく外へ出れる。私の家族の事も共に考えられるだろう…。長きに渡る準備、とても助かったわ。翌日の早朝、計画

を実行するわ。各自、心して迎えよ!!」

信哉はレミリアが何を言っているのか、何をしようとしているのか理解が追いつかない。太陽を遮る。ただそれだけは理解出来た。

レミリアの喝が終えると皆は部屋から出ていった。信哉も美鈴と共に出ようとした時、レミリアに呼び止められる。

「人間、少し話をしましょう」

「え…」

「お嬢様、何か気になったこととかあったんですか？」

美鈴が信哉を庇うように、レミリアとの間に入る。信哉が戸惑いと恐怖を見せていたからだろうか。

「安心なさい、美鈴。別に悪いようにはしないわ。ただ、この先に起こることを伝えておこうと思っただけよ…」

レミリアはそう言うと、信哉へこの先の事を話した。

計画を邪魔する者が館へとやって来ること。そして、その者を倒さなくてはならないこと。

そして弾幕などの攻撃手段が無いことを見通して、レミリアはあえて信哉をこの部屋へと通ずる一本の廊下の警備を任せた。

「別にアナタが倒そうとか思わなくていいわ…。足止めが出来れば、充分。そう思ってるわ。それだけよ。下がりなさい」

レミリアは言いたいことを言い終わると、信哉と美鈴を部屋から追い出した。

門へと戻る最中、美鈴から話を受ける。

「もし、命に関わるようなことがあったら逃げて下さいね」

「…わかりました」

美鈴は慎重な顔つきでそう言った。

これからどのような事をするのかを具体的に知らない信哉はどのような対処をしたらいいのか、どのような被害がでるのかなど、無知である恐怖を感じたのだった。

今夜は美鈴と門番を続け、日が昇る前に信哉は館へ戻り、眠りについたのだった。

同時刻、レミリアは目を遮るための紅霧を紅魔館を中心に広範囲に

散布した。

「始めるわよ…皆、気を引き締めなさいっ!!」

? 無力

門番を終えてベッドに潜り込んだ記憶を最後に、気づけば俺は再び元の世界へと戻っていた。

やはり、夢限定で戻ることが出来るらしい。

「…買いに行くか」

信哉は自身の部屋から出ると、そのまま家を後にした。

買おうとしているものは、爆竹に着火剤にマグネシウム、あと数多くのワイヤー。

信哉は自身の持てる知識を最大限に活用して、紅魔館の護衛に徹しようと考えていた。

マグネシウムは店舗で購入できる見込みが無いため、とあるネットショップの即日配達で購入。爆竹も共に購入。

着火剤は近くのホームセンターへ行き、購入。大量のワイヤーやフックもその場で購入。

後はマグネシウムと爆竹が届けば全てが整ったも同然だった。

「…少し、時間がかかるな。間に合うといいが…」

信哉はいつ幻想郷へ戻ってしまうのか分からないため、爆竹等の到着が一分一秒と待ったびに不安が過ぎる。

信哉はじつとしていることに苦痛を感じたのか、突如立ち上がり、家を飛び出した。

自転車に跨り、街を出る。

目の前の坂を登りきると、奥には自然が青々とした山があり、その中腹には大きな施設があった。

信哉はその施設の中にある場所へと向かっていたのだ。

「ふううく…俺は、まだ一人じゃ生きていられないみたいだよ、母さん…」

信哉は施設へ辿り着くと、中にある数多くある墓石の内の一つの前に立っていた。

【黒羽衣久】と刻まれた墓石は少し埃が被っていた。信哉は墓石を掃除して、改めて墓石と向き合った。

「…俺はかなりのお母さんっ子らしい。今になっても母さんの声がまるで今聞いているかのように頭の中で聞こえるんだ…」

辺りの静けさが、信哉の首を締めるようであった。

信哉は合掌すると、立ち上がりその場を後にする。

「ありがとう母さん…俺、トラを何としても守るよ…」

家に帰る頃には日は沈みかけ、月が顔を覗かせていた。丸々と大きく、赤く染まろうとしている月が高い建築物から覗いていた。

玄関へ入ろうとした時、後ろから声をかけられる。

「あのく宅配です。ハンコと名前を…」

「あ、ああわかりました」

家に帰ると同時に届く、通販の品。二つの箱を受け取って、大きな袋の中へと詰める。

「さて…どうなるかな…」

信哉はワイヤーなどの入った大きな袋を抱くと、そのまま目を閉じて呼吸を落ち着かせていった。

……………

沈みゆく意識のなか、体が浮くような感覚に陥る。

その状況が長く続くといつの間にか、体に重みを感じる。体の各部位の感覚が蘇る。

頭痛を伴いながらも、信哉は目を開ける。

すると紅魔館のベッドに入っていて、手には大きな袋が。

ワイヤー&フック、マグネシウム（粉末）、着火剤（ジェル系）、爆竹が入っており、欠けているものが無いことを確認する。

「今は…どのくらいだ」

信哉は部屋の窓から空を見る。紅く不気味に光る月が上がりつつあるのを確認する。

「…もう準備はしていいか」

信哉は休む暇もなく、すぐさま行動へと移る。

まずは一階〜三階までの階段の上部にフックを差し込んでワイヤーを張り巡らせる。

これは幻想郷の人々が空を飛ぶことが出来るという事を踏まえた上で、飛行妨害するためだ。暗闇の中だと触らなければわからないだろう。

ワイヤーを貼り終えたとき、外から何色もの光が数少ない窓から差し込んで、覗いてみると美鈴と誰かが戦っている姿が見えた。

「…紅さんもあの玉出せたのか…」

美鈴と戦った時の事を思い出すと、改めて安堵した。しかし、美鈴と戦う者。すなわち敵。信哉が足止めしなくてはならない者なのだ。

「急がなくては…」

信哉はワイヤーを貼り終えると、廊下へ各部屋にある大量の家具を運び出し、飛べば簡単に通れる程の障害物を三十メートル程に渡って設置する。

窓から色とりどりの光が差し込むが、やがて静かになる。

すると今度は時間停止の現象が起き始める。

「十六夜さんの…?!まさか紅さんが…!!」

信哉は最悪のケースを考えて、より迅速に行動する。

マグネシウムの粉と着火剤を混ぜたものを爆竹に付ける。

試しに大量の爆竹のうちの一つを取って、マグネシウム混合着火剤を点火させる。

すると辺りに爆発音が響きながら、眩い閃光が信哉の目を突き刺した。

「ま、まぶつ…?!…、これでいけるな…」

目くらまし程度には効力がありそうな爆竹閃光弾が出来上がり、最後の行程へ移る。

取り出したのは蟻酸と濃硫酸。

水などを注げそうな容器などを各部屋から持ち出して、壁際に等間隔で置いていく。

できるだけ家具の上に置けるようにして、手前の容器から蟻酸と濃硫酸の二つを入れてゆく。

すると混ざったことにより、発泡反応が起こる。

「俺が倒れないようにしなきゃならないな…」

信哉は蟻酸と濃硫酸を混ぜて、一酸化炭素を発生させたのだった。無味無臭の凶悪な毒。一般的には不燃焼状態に陥る事で発生する毒ガスだ。

そしてその毒を体内に取り込んだ場合、一酸化炭素中毒に陥り、吐き気や頭痛など伴わせる。

紅魔館の廊下のように広い場所では中々症状を発症する事例は少ない。だが、閉鎖空間であるならば別だ。紅魔館は窓が少なく、空気の動きが少ない。故に拡散する場所が極端に制限されるために溜まってしまふのだ。

さらに言うと、紅魔館の廊下の証明は蠟燭の灯火だ。熱は上へ上へと空気の流れを作って、上部へと留まらせる。

一酸化炭素はほんの少しだけ軽く、上部へと上がりやすい。そこに蠟燭の灯火が作る上昇気流に押されればどうだろうか。

天井付近は条件的に一酸化炭素が溜まりやすいのだ。

その事を踏まえた上であれば、信哉がなぜ家具を廊下に設置したのかが分かるはずだ。

幻想郷の住民が空を飛ぶ事を知った信哉は、廊下に家具を置くことで飛行を誘っているのだ。

「…何をやってるんだろうな」

信哉は自身の行動に対して呆れと嫌悪感を抱くようになっていた。学校で習った知識を応用させて、赤の他人を苦しめる為に使っている。

赤の他人は別に自分へは何もやってはいない。

それに、下手したらその人は死ぬかもしれない。自分も。

「はあ…」

落胆の末のため息は、咲夜が発動させたであろう時間停止によって妨げられる。

音が無くなると同時に現れる静寂が自身の背中を押しているような気がして、信哉は廊下を抜けて、階段を降りていった。

時間停止が解除されたのは階段を降りている途中でだった。あまりにも長い時間停止は咲夜の断末魔のように信哉は感じた。

階段を降りて、玄関から直接通じた広場へ出ると、お祓い棒を持った紅白の特徴的な服を来た黒髪の少女が立っていた。

「ん…？」

そして、その少女と目が合う。

信哉から見るとその少女は幼かった。だからこそ、本当にこの少女が敵なのかを疑った。

しかしその疑いも少女の手によって払われる。

「アンタがこの霧の原因？だとしたらすぐに解除させなさい」

少女はお祓い棒を信哉へと突きつけた。少女の鋭い目付きは、腹を空かせた猛獣が餌を目の当たりにしたかのようなものであった。

先程まで少女を弱そうに見ていた自身を責めなくなる程に、今の少女は強かった。

しかし、怖気付いてもいられない。

「解除はできない。途中で赤い髪の長い女性や、メイド服の銀髪の女性と出会った筈だ。二人はどうした…？」

あの二人がこの館に構えていながら、目の前に少女がいる。このことからわかり切っている筈なのだが、信哉は少女へ聞いた。

「邪魔してきたから倒したわ。あんたも同じ目に会いたくないのなら早くこの霧を出している主に会わせなさいよ」

寒いよ！とか愚痴をこぼしながら、お祓い棒を振り回す少女。

信哉は素早く深呼吸をすると同時に意志を固める信哉。そして少女を睨みつける。

「この館に住まわせてもらっている以上、攻め寄せる者は食い止めなくてはならない!!俺は黒羽信哉、主を守るべくここに馳せ参じる!」

信哉は少女へと駆け出す。手の平に爆竹を隠して。

少女はお札を取り出して身構える。

「うおおおーっ!!」

信哉は拳を高く上げて、殴りかかるような素振りを見せる。その様子を深く観察している少女は既に躲す体勢へとなっていた。

上げた拳を開いて手の内に隠した爆竹を投げる。既に火は着いており、小さく煙を発しながら少女の目の前へと宙を飛ぶ。

少女は信哉の手から何が放たれたのを見ていたが、暗闇のせいで何かまでは分からず、咄嗟に左へ跳ねて、爆竹を凝視し続けた。

このことが信哉の思惑通りであったのかは定かではないが、灯りの乏しい空間に眩い閃光が目突き刺さるように連続して発生する。

「うあっ…!?!」

少女は驚いた様子で、目を咄嗟に抑えていた。

閃光と共に発生する爆発音。少女を怯ませるには充分であった。

信哉は爆竹を投げたあとも足を止めず、そのまま怯む少女へと殴りかかろうとする。

狙うは顎。顎さえ叩けば脳は揺れて、行動が出来なくなるはず。

拳は少女へと確実に近づいていた。しかし、信哉の頭上に突如光源が発生して辺りを照らす。

驚きから足を止めて見上げると、光弾———弾幕というものが迫っていた。

「うおおあっ?!」

信哉は咄嗟に後ろへ飛び退いて、弾幕を回避する。転がる勢いを手について殺し、顔を上げると、目を擦りながら歩み寄る少女がいた。

「や、やってくれたわね…!!まだチカチカしてるわよ…!」

「くっ…!!」

信哉は素早く立ち上がり、先程自身が降りてきた階段へと向かう。すると少女も逃げんな!!と叫びながら信哉を追いかける。

信哉の思惑通り、少女はフワツと浮かび上がって信哉へと距離を詰める。

少女の飛行はフクロウのように無音で、地面と垂直に猛スピードだった。

バチバチバチバチッ!!

信哉は爆竹を再び投げて、少女に対抗する。しかし、二度目はさほど効果がないようで少女は腕で目を閃光から防いでいた。

信哉は何とか階段へ辿り着き、段を飛ばしながら全力で駆け上が

る。

瞬間遅れて少女も階段へ辿り着き、段差を無視して浮上しようとするが、信哉が貼ったワイヤーによって阻まれる。

「きゃあっ?!」

少女の目は眩しい光のせいで暗闇に対してあまり見えていないらしく、ワイヤーに気づくのが遅れてしまっていた。

ワイヤーにかかった少女はそのまま階段へと落ちるように降りる。

その時を見計らっていた信哉は再び少女へ殴りかかる。しかし、信哉の拳は少女が持つているお祓い棒によって受け止められる。

「なっ…?!」

「アンタ、中々やるじゃない。その様子からして霊力がないみたいだしね」

少女は信哉が視界に入っていないなくても、わかっているかのように見据えていた。

少女の手が自身へと伸びると同時に、急いで階段を駆け上がる。

死角からの攻撃を防がれた信哉は狼狽えていた。その様子を見た少女は信哉へ追い打ちをかけるように次の言葉を告げる。

「私は勘が鋭いみたいだね。なんとなくわかるのよ。なんとなくね」

信哉は声を上げたくなるが、既に少女が階段を登って迫ってきているため、急いで逃げることにする。

少女へ攻撃が入らなくとも、飛行から走行へと誘導することが成功したため、即座に毒ガスを散布している廊下へと向かう。

一階を登り終え、二階へと続く階段を曲がると同時に壁の影に隠れ、脚を横へ蹴り払う。

蹴りは少女に受け止められ、止めることが叶わない。しかもそれどころか足を掴まれてしまう。

信哉はギョツとして焦り、少女から足を離そうともがくが、離れられない。ここまできかと思つた時、少女のすぐ後ろで眩い光が持続的に発生する。

その原因は、床を破って放たれる強大なエネルギー放射…レーザーのようなものであった。

「ぎゃっ?!」「うおっ?!」

信哉も予期してなかった事態が幸を指す。少女が驚いて信哉の足を離してしまったのだ。

「くっ…!!」

信哉は即座に階段を駆け上がる。少女はまあーりいーさあー…と怒りを込めた声で唸りながら、信哉を再び追う。

二人が階段を登り終える頃には若干息が上がっていた。

階段から続く廊下へ出ると、所狭しと設置した家具が現れる。

信哉は少女へ攻撃しようとはせず、待ち伏せせずに家具を跳び超えて奥へと進んでゆく。

少女も遅れてやってくる。蝋燭の灯火がワイヤーを無いことを知らせると同時に、走りずらい廊下を目の当たりにしたことにより、少女は無意識の内に飛行する事を選んでいった。

「蝋燭の炎が青い…!!ちゃんと溜まっているようだな…!」

信哉は息をできるだけ潜めて、廊下の奥へと移動する。そしてその際に椅子や枕などを少女へ投げつける。

広い筈の廊下は信哉が設置した家具によって狭くなっており、椅子など大きな物が避けることが難しくなっていた。

そのため、少女は信哉の投げけるものを受け止める他なく、天井付近に浮遊する時間が長くなるのは必然であった。

「こ、このっ…?!」

少女はイラついた様子で椅子や枕をお祓い棒で弾く。

このままならいける、と信哉は思ったが浅はかであった。

少女は御札を廊下の四隅に投げつけると、札は宙に浮いたまま不思議な線で繋がれてそのまま四角形の半透明の橙色に光る壁が生成される。

信哉はその壁へ向かって再び椅子や枕を投げつける。しかし、枕や椅子は少女へ届くことがなく、橙色の壁に阻まれる。

「くっ…!!」

妨害する術がなくなった信哉は逃げる事しか出来なくなる。

少女はイラついた様子で、橙色の壁に手を当てて前へ進もうとす

る。すると壁ごと前へと動き出し、設置されていた家具も同時に押されゆく。

「んなっ?!」

メキメキと悲鳴を上げる家具達をお構い無しに、少女は強引に家具を押し信哉へと迫る。

メキメキツツ…バキキツツ…!!

家具全てを力技で押しつけて信哉を追う事を誰が予想できただろうか。予測不可能。否、回避不可能。

「嘘だろおおおおおっ?!」

少女の作った壁は家具の津波を引き起こし、信哉は絶体絶命の状況へと追い込まれる。

少女の飛行スピードは尚も上がり続け、部屋へ逃げ込むことも出来なくなる。

逃げ続ける事、一分程。廊下の終着点が姿を現して、完全に逃げ場を失う。

「あ…ああ…うあああーっ?!」

信哉は壁と家具に挟まれて、身動きが一切封じられる。自身の体が直接傷つけられた訳ではないが、椅子の脚や棚などが壁へめり込んで信哉の関節を固定させる。

家具が高く積み上げられて壁となっており、奥から少女の声が聞こえた。

「この大きな扉が主への部屋なのね。案内ありがとうね」

「なっ…待て!?待ってくれ!俺はまだー!」

戦える、と言葉を繋げようとした時、自身が立っている床がひび割れて光が差し込む。

何が起こっているのかと疑問に思った時だった。

正体は先程と同様、床を突きぬけて放射されるレーザーであった。

レーザーは叫び声をあげる間もなく、自身の体を包つくし、意識を遠い何処かへ大量に押し込まれた家具と共に吹き飛ばしたのであった。

黒髪の少女を止めることも叶わず、更には地面から突き抜けるレー

ザーに被弾し、何も残す事を出来なかった事を事実として突きつけられた感覚を信哉は最後に味わったのだった。

? 第二の不穏

体の節々が痛い。それに考えるだけで頭痛も。どうしてなのか、記憶がない。何故だろう。

信哉は失っていた意識を取り戻す。

ぼんやりと見える視界には、紅い霧が漂う空と倒壊しようとしている紅魔館が映る。

朦朧とする中、空を見つめ続けていると、突如眩い光が空一面に発生する。

「ぐっ…!」

深い眠りから無理やり起こされたような感覚と似ており、朦朧としていた意識は刺激によつてはつきりと覚醒する。

空の光が消えると、信哉は目を凝らして発光した場所を見る。すると先程まで戦っていた黒髪のお祓い棒を持った少女が、レミリアと戦っていた。

「な、何も…出来なかった…」

二人の少女が激闘する姿を見て、自身の無力さを思い知らされる。手を伸ばしても決して届くことはない。とても届きうる事は無い。嘆いていても何かが変わる訳でもない。なのでその場から移動しようとするが、その時に自身の状況を改めて理解する。

「ぐっ…?!」

信哉には家具だったであろうガラクタが積み重なっており、足は完全に潰されていた。

何故か痛みはない。しかし、足元からドクドクと流れる血を見て死を想像する。

「そ、そんな…?!何とか…しないと…」

信哉はガラクタを退けようと手で掴んで力いっぱい引っ張った。しかし、複雑に重なっているからなのか、ビクともしない。

「……っ!誰か、誰かいないか…?!」

縫るように辺りを見回す。瓦礫の山の隙間を覗いてみるが、人らしき影すら見つかからない。

「ぐううっ…!!クソオツ!!」

怒号と共に地面を殴りつける信哉。力任せに積み重なったガラク
タを動かそうとするも、体力の無駄な消費でしかなかった。
はつきりとしていた意識も再び朦朧とする。寒気も強くなる。

「か、へあ……」

信哉は再び地面を殴りつける。しかしその行動が最後の体力を使
い切り、体が鉛のように重くさせた。

無力。何も出来なかったことへの後悔と自責が押し寄せる。唇を
噛み締めたくとも、もう瞼すら上げる力もない。

最後に見た景色は色鮮やかに光る弾幕が飛び交う空であった。

体力を失い、気力も失いつつある信哉に待つのは死のみと思われ
た。しかし、それはある衝撃によって先延ばしにされる。

バキバキバキバキ…!!

先程、信哉が殴りつけた地面から亀裂が走る。既にボロボロだった
床はいつ崩れてもおかしくはない状態で、そのきつかけとなったのが
信哉の拳であつたらしい。

亀裂の走った床はあつという間に陥没し、信哉を地下へと誘った。
運が悪いのか良いのか、信哉の上に積み重なっていた瓦礫の殆どは
引つかかって落ちず、信哉だけが地下へと落ちる。

そして落ちた場所は階段になっており、そのままゆつくりと転げ落
ちると、どんどん加速する。

「ぐおあああっ?!」

段差から落ちる度に角が体にめり込んで、鈍い痛みを伴わせる。
止まった頃には左腕が奇妙な曲がり方をしながら、関節が無いはず
の部分も曲がっていた。

見たことも無い気持ち悪い左腕を見て、信哉は恐怖を抱く。暗黙し
てゆくはずの意識は鈍い痛みによって連れ戻され、再び視界がはつき
りとする。

「な、なんなんだよお…!!」

右腕で体を支えながら起き上がる。

顔を上げると、目の前には鉄製の檻で保護された木製の扉があつ

た。

今まで見てきた扉よりも少し小さく、また施錠が嚴重であった。

信哉はその扉の奥から人であろう気配を感じとった。

「がっ?! た、助けて…:くれえっ…!!」

信哉は檻を開け、扉の施錠も解除させる。

助かりたい一心で、嚴重に閉められし扉を開けた。

「…??…??」

扉を開けると中は真っ暗闇であった。感じていた人の気配もまるで最初からなかったかのように消えてしまう。

「そん、なあ…」

信哉は痛み、脱力からその場に膝から倒れてしまう。足がひしゃげている程の怪我。動けること事態がおかしかった。

床に、歪に広がる血溜まり。暗闇の中、無風で静寂の中に徐々に弱まる信哉の呼吸音が響き、そして溶ける。

信哉はうつ伏せて力が入らずとも、顔だけでも前を向こうとする。息絶えだえの中、何とか前を向くことが出来て目を開けた時だった。

暗闇の中に暖色系から寒色系までの様々な輝きを放つ複数の水晶のようなものがみえる。

その輝きはまるで自身が歩む行き先の目印のような、そんな錯覚に陥る。

「…!…!」

信哉は無意識にその光へと手を伸ばしていた。途方に暮れた際に現れた希望の道筋を追うかのように、腕を伸ばした。

既に、信哉の目にはぼやっとしか光は見えていなかった。限界が来たのだ。生命としての。

光る水晶は揺れながら、ゆっくりと信哉に近づいて行った。水晶は信哉の目の前で止まる。

すると、信哉の呼吸音が掻き消されるように少女の声が響く。

「ねえ、何をしてるの…?」

少女の問いに対しての返事はない。信哉は殆ど意識を失っている

からだ。

しかし、少女の問いは終わらない。

「アナタが…フランのお友達になる人…？」

信哉の頭が少し浮く。声の主は髪の毛ごと引っ張られているらしい。

「…つまんない。つまんないよ」

少女は声を震わせる。その声に一体どれほどの思いがこもっているのかは本人以外知る由もない。

「血、あげるからフランとずっと遊ぼう…ねえ？」

少女はそういうと信哉をうつ伏せから仰向けにさせて、上体を起こさせる。

「もう、離さないよ…。一緒に、ずっと…遊ぼうね…」

少女は煌めく水晶を揺らしながら、信哉の首元へ噛み付いた。

すると水晶の光に照らされて薄らと露わになる信哉の噛まれた首筋と少女の口の隙間からタラリと赤い一滴が零れる。

シユワアアア…

すると辺りに炭酸が抜ける時のような音が響く。共鳴するかのようになり、信哉の体に噛まれた場所を初めとした赤い光が波打つが如く駆け巡る。

その波は一度だけではなく、二度…三度…と間隔が狭ばまりつつ激しくなる。

「う、お、ああああああつ!？」

失った筈の意識が甦ると同時に信哉の体に変化が現れる。

爪はいきなり伸びだして鋭くなり、八重歯が他の歯を押しつけて急成長する。他にも筋肉が膨張と収縮を繰り返したり、痙攣のような症状も発生する。

「ぎ、あ…がっ」

「アハ…アハハッ…。これで、一緒に遊べるね…」

少女の薄らとした笑みは暗闇の中に直ぐに溶け込み、本当に笑っていたのかもわからない。

しかし、少女のケタケタという笑い声が呻き声と共に響き続けたの

であった。

崩壊寸前の紅魔館上空では、紅月の光によって強化されたレミリアとお祓い棒を振り回しながら弾幕を放つ黒髪の少女が激闘を繰り広げていた。

「こ、これで決めるわよっ…!! 『紅色の幻想郷』」

レミリアが一枚のカードを掲げると、全方位へ巨大な弾幕が曲がりながら発射される。そして、その軌道上には小さな弾幕を生成させて不規則に移動。

超広範囲の弾幕は黒髪少女の逃げ場を確実に無くしていく。

少女にとって躲しつつ反撃する事はかなりの苦行らしく、苦しい表情を薄らと浮かべる。

しかし、少女も対抗して一枚のカードを発動させる。

「終わりよー！ 霊符『夢想封印』」

少女から眩い光が発された次の瞬間、レミリア目掛けて高速で虹色の光弾が発射される。

レミリアは驚いた様子で回避しようとするも、少女が放った光弾はレミリアを追うように曲がって炸裂した。

「そ、そんな」

レミリアはピチューンと謎の音と共に爆ぜる。すると空を覆っていた紅霧はゆっくりと薄くなっていく。

その様子をみた少女は溜め息をついて、その場を去っていったのだった。

「はあ…これで解決ね。あー疲れたー…」

紅月が沈むに連れて、空が明るくなる。そして太陽が顔を出す頃には、紅霧は完全に消えていたのであった。

……
……
……

後日、紅魔館の被害状況が確認された。

地下……半壊

一階以上……倒壊の恐れあり

天井……複数の風穴を確認

激しい激闘の末の結末。被害は甚大。

同時に怪我人なども確認された。

軽傷者……紅美鈴、十六夜咲夜、パチュリー・ノーレッジ、レミリア

ア・スカーレット、その他妖精達

行方不明者……黒羽信哉

保護対象……黒羽明寛

黒羽信哉の消息が確認できず、行方不明の扱いとなる。

幻想郷に配られる新聞……文々。新聞では今回の紅霧異変を大々的に捉え、博麗の巫女について報じられた。そして、新聞の一番最後の端には異変を解決した事での宴会が博麗神社にて開かれるという書き込みが。

異変に関わった者のみならず、幻想郷の人妖達が集まるという……。

異変以来、レミリアは神社へ赴くようになっていた。まるで我が家のようにくつろぎ、遠慮なんでもものは存在していない様子だった。

宴会を数日後に控えたある日。この日もレミリアは神社へと遊びに来ていた。

神社の主である博麗霊夢は、もう諦めた様子でレミリアが神社にいらることを受け入れ始めていた。

霧が晴れた事により、夏本来の暑さが戻って強い日差しがジリジリと地面を焼いていた。雲一つない、清々しい快晴であった。

しかし、そんな天気も一変する。

ゴロゴロ……!

青天の霹靂の如く突如雷鳴が鳴り響く。

霊夢やレミリアが驚いた様子で空模様を確かめていると、遅れてやって来た暗雲が猛スピードで広がった。

「お、おい!? 凄い急に変わったぞ」

空から箒に跨りながら舞い降りる一人の少女……霧雨魔理沙が驚

いた様子で神社へとやってくる。

すると雷鳴が再び鳴り響き、空気を振動させる。

「…あら、湖の方だけ雨が降ってるわ」

レミリアは持ち前の常人離れした身体能力で、ある場所だけ雨が降っている事を確認する。

「湖の方って…。たしかアンタの家があるんじゃない？」

「追い出されたのか。可哀想だな」

レミリアは魔理沙を一瞬睨みつけた。すると魔理沙は即座に手で口を覆って、何も言っていないアピールをする。

「…まあいいわ。雨が降っていたら帰れないじゃない…泊まろうかしら」

「それだけは勘弁よ。出てけ」

しっしっ、と手で追い払う素振りを見せる霊夢。神社の中へ入っていき、お祓い棒を持ってくる。

「ちよっ、ちよっ?!本当に追い出すの?!」

「お、どこか行くのか?」

「が、外出ね…驚かさないですよ。どうせなら私の家見てきてちょうだい。……………私が追い出される筈なんてないんだから、ええですよ。うん」

レミリアはどこか寂しげな様子で、何やらブツブツと暗示なようなことをしていた。

魔理沙は霊夢がどこかに行くを事を感じ取って、何処に行くのかを訊ねた。

「吸血鬼の家に行くのよ。面倒だけど、またイヤな感じがするしね…」

霊夢は持ち前の直感で何かを感じ取り、文句を言わずにレミリアの頼みを聞くことにする。

魔理沙は、霊夢が行くならしやらない、と言葉は渋々としているが行動は嘘をつけず、ちゃっっちゃかと紅魔館へ行くのであった。

雨は湖手前から降り出して、紅魔館へ近づくほど強くなっていつ

た。そして、魔理沙はこの雨が自然的なものではなく人為によってもたらされた現象と何となくでだが考えていた。

この雨は人を近寄せない為に降っているのか。はたまた、ナニカを紅魔館から出させないよう雨の檻で幽閉しているのだろうか。

それは紅魔館へ行けば、全てがわかるのであった。

「なあ霊夢。この雨、多分魔法で降ってるみたいだ」

「魔法、ね…。霧の次は雨雲とか…。余程あそこの住民は日光を嫌うのね」

呆れ混じりに霊夢はため息を吐いた。

紅魔館へ近づくとつれて強くなる雨足。その強さはやがて声などの音すらをも消し去る程のものとなる。

「おいおい…。こりや酷すぎる。前が霧で見えなくなって来てるぜ…」

「こつちよ。嫌な予感がピンピンと感じるわ」

まるで某漫画の主人公のアンテナさながらの感知能力で、紅魔館へ向かう霊夢。

魔理沙は霊夢を見失わぬように必死についていった。

数分後、霊夢達は無事紅魔館へと到着する。

紅魔館は未だに破損部分があり、中は雨漏りだらけであった。

窓が少なくとも、亀裂や穴などによつて強制換気されており、湿気が籠ること逃れられているようだった。

「雨漏りが酷いな…。本とか大丈夫か、これ…??」

魔理沙は図書館のある地下へと視線を向ける。

すると霊夢が階段を下りだす。

「下から感じるわ。行くわよ」

「あいよ」

階段を下りると、いくら壁や天井に穴が空いていようと光が差し込まない為、暗闇が広がっていた。

「暗いぜ」

「たまに脆いところがあるから気をつけなさい。……あ、そことか」「んぎゃー!!」

霊夢が忠告すると同時に魔理沙が脆くなった床に足をとられ、そのまま転んでしまう。

「も、もうちよつと早く言えっ」

「…!!魔理沙、お出迎よ」

魔理沙の叫びはスルーされるが、暗闇の奥から一人の少女が現れる。

紅魔館随一の魔法使い、パチュリー・ノーレッジであった。

「今日は喘息の調子が良くていいわね…。あなた達、帰った方がいいわよ」

「そうもいかないんだぜ。あのちびっこから見てこいと頼まれたからな!」

「ちびっこ……レミイの事かしら。だとしたら伝えてあげて。もうちよつと神社に遊びに行つてもいいわよつてね」

「私は嫌よ。だから無理やりにも帰らせるわ。それと…嫌な感じがするんだけど、また何かやろうとしているわけじゃないわよね」

「…。何を言つても分かつてくれそうにないわね…。今日は調子もいいし油断しない方がいいわよ?」

パチュリーは宙にフワリと浮かび上がり、辞書が何冊にも重ねられたような分厚い本が開かれる。

「また相手してやるぜ、パチュリー!勝つたら本貰うぜ」

魔理沙が不敵な笑みを浮かべながら前が出る。

「ピリピリとした空気が霊夢達周辺の空間が包み込む。」

戦いが始まるうとしていた時、図書館よりも地下…。鉄格子で補強された厳重な扉から、少女と青年の二人の影が現れたのだった。

「いくよ、バディー!」

少女は青年の手を引いて、羽と思わしき煌めく水晶を揺らして、階段をゆつくりと上がって行った。

? 激情

「むきゅ〜…」

不思議なうめき声と共に倒れていたのはパチュリーであった。

魔理沙とパチュリーの弾幕ごっこは、ほぼの互角に見えたが、魔理沙は狙ったのか定かではないが、強引に弾幕網を突破した事が勝敗を決した。

「あ、危ねえ…!! 喘息の調子良かったらこんなに強いのかよ…!!」

とはいえ、勝った魔理沙も息絶えだえで、座り込んでいた。

「ここには本もないから全力でやれただけよ…はぁ疲れた…」

パチュリーは地面に寝転んだまま、起き上がる気配がない。満身創痍、又は疲労困憊という状態なのだろう。

「……気をつけなさい。妹様は危険よ」

「…誰よ、妹様って」

「レミイの妹よ…。この前の異変で外に興味を持ちちゃって出ようとしてるの」

「出させりゃいいじゃない。何よりこのこの主が帰れなくなってるんだから」

霊夢は呆れ混じりに言うと、パチュリーは続けて言った。

「アナタは知らないだけよ…妹様の能力を…」

「能力…? どんな…?」

「私の事、知りたいならその身で味あわせてあげるよ」
「っ?!」

突如暗闇の奥から聞こえた、少女の声。

霊夢達が目を凝らして先を見つめていると、ポッと虹色に光り輝く石が宙に浮いているのが見えた。

そしてその石はゆっくりと霊夢たちへ近づいていく。

やがて目の前のロウソクの灯火に照らされて現れたのは、見た目十歳前後の金髪少女フランドール・スカーレットと、手を引かれる一人の男性……黒羽信哉であった。

「……なるほどね。確かに妹様とやらは強そうね。そして、行方不明になっていた人間が今目の前にいると…確か、信哉だっけ？」

霊夢はほんの少し足をずらして、臨戦態勢へと移行する。

「信哉はね、私の永遠のバディなの！初めて生きたままで出来たの！」
「バディだか何だか知らないけど、面倒事はゴメンだわ。なんなら今すぐにでもあのチビを神社から追い出したいのだけど」

「…それは嫌だなあ。まあでも、あなたがアイツをここへ連れてくるのは無理ね。だって…」

「……はあ、なんでこう血の気が多いやつしかいないのかしら…」

霊夢はお祓い棒を強く握り、札を持って身構える。

するととてつもない圧力が、フランから発される。まるで肌に静電気が何度も起こるような、感覚に陥る。

「あなたが、コンティニューできないのさ！」

フランが手を上げて、霊夢へ襲いかかろうとした時、隣にいた信哉がフランへと手を伸ばし、腕を引いた。

するとフランは燃えるように煌めく紅い瞳で、信哉を睨みつける。

「邪魔しないでよ…!!」

「フランドール、今は待て。待て、だ。あの人は恐らくこの世界の中でかなり強い筈だ。今ここで、そんな人と遊んでしまつては後が退屈だろう？」

パチュリーは目を疑う光景を見て、言葉を失ってしまう。

能力の影響により、危険という危険を持ち合わせた妹様…フランドールを信哉が言葉で抑制させたのだ。

フランは耐えるように手を下ろし、パチュリーへと命令した。

「ねえパチュリー、雨を止ませて？私、信哉と外に行く」

「そ、それは……」

パチュリーは魔理沙との戦闘による疲労が長引いており、未だに動く事ができなかった。

故に、止めたくても止められない。

雨を止めさせないと云ったらどんな手を使って雨を止ませようとするのだろうか。

予想できないからこそ、何もできなかった。

黙ることしかできないパチュリーを見た信哉は、パチュリーの元へと歩み寄る。そして彼らにしか聞こえない程の小さな声でパチュリーへ告げた。

「俺が、最大でも一ヶ月後にはフランドールをここへ連れ帰ります。信じてください」

妨害する体力を失っているパチュリーは、信哉を頼らざるを得なかった。

信哉がフランの手を引いて紅魔館から出て行こうとした時だった。信哉の目の前に、霊夢が立ち塞がる。

「…俺に何か？」

「いえ、少し気になったのよ。あなたが行方をくらましていた間、一体どこにいたのか…」

「…」

信哉は落ち着いたようすで、霊夢をじつと見る。霊夢も信哉の目をじつと見つめ、沈黙の時間が流れる。

「…ずっとフランドールといた。それだけだ…」

「ふうん。ま、ここの主はあなた達がいようと居なかりょうと帰らせるつもりだから別にいいわ…」

「そうか…」

霊夢が身を退いて、空いた道を信哉達は歩き出す。

霊夢と信哉がすれ違う時、お互いに小さく囁いた。

「トラを頼む」「暴れたらすぐに退治するから」

信哉とフランは廊下の奥にある階段を登って、パチュリー達の前から姿を消した。

「ねえ、やっぱりあの女と戦いたい」

「…頼むから我慢してくれ…」

信哉は頭を抱えたまま、フランと共に紅魔館を出て行ったのだった。

パチュリーは未だに体力切れで起き上がることが出来ないらしく、傍にいる小悪魔の助けもあってようやく起き上がる。

「…はあ。あの男、ただ生きていただけじゃなく妹様とも接していたとは…」

「たまたま咲夜さんや美鈴さんが近くにいないらしいので、今回の事は運が悪いとしか…」

「ち、近くにいない…？緊急時の雨を降らせているというのに?!…ゴホッ?!」

「あああ?!落ち着いてください…」

パチュリーは焦りと同時に苛立ちも覚えていた。

なぜ咲夜、美鈴がいないのか。

いくら考えようとも、答えは思い浮かばない。

小悪魔が咳き込むパチュリーの背中を摩る。

すると奥からドタバタと慌ただしい足音と共に急いでやってくる二人の影が迫っていた。

美鈴と咲夜であった。

「すいません、パチュリー様！」

「い、妹様は何処へ…?!」

「信哉と…一緒にここから出ていったわ…」

パチュリーの一言に、美鈴は信じられないという表情で言葉を失い、咲夜は目を一瞬見開いた後、尋常ならぬ殺気が解き放たれる。

「あの男…!!」

「待つて。信哉は一ヶ月以内には連れ戻すって言っていたわ」

「し、しかし…!!」

咲夜は怒りを隠すことができない様子で、自然と拳が音を鳴らしていた。

「まず妹様は吸血鬼。能力で言えばレミイよりも狂暴と言えるから、一人のにんげんにどうこう出来るわけはないわ」

「信哉は…どこにいたんですか…？まさか、最初から…妹様の部屋に…?!」

異変後、誰一人として信哉の姿を見たものはいなかった。

そのため、瓦礫の中に埋もれて死んだとか、妖怪に食われた、妖精に攫われたなどと騒がれていたが、彼は生きて紅魔館にずっといたの

だ。

「…はあ。レミイが帰ってきた時のことを考えると頭が痛いわ…」
「すいません、対処に向かうのが遅れたばかりに…!!」

「過去を気にしても何も変わらないわ。今後の対策を考えましょう」
後日、咲夜と美鈴がパチュリーの元へやってこれなかつた訳を聞いた。彼女達曰く、進んでも進んでも、館の中で同じ場所に留められたとの事。

そんなことが有り得るのだろうかと思いつつも、その場所周辺の調査をすると、咲夜が発動させていた空間操作術が、人為的に変化させられている事がわかった。

そこで彼女達は改めて気づく。今回の出来事は、全てが計画されたもの。そして、その計画した者と大きく言える人物が黒羽信哉だということを。

雨の止んだ紅魔館へ帰ってきた主は、現状を聞いた瞬間に顔を青ざめさせていた。

「そ、そんな…!!」

彼女には能力がある。その能力の力で、少し先の未来を『知る』又は『視る』事が出来るらしい。

そして信哉を館へ迎え入れたその時、彼女が視た未来はフランが信哉や明寛を含めた自分達と笑う未来であった。

「可能性の未来だったか…!!」

レミリアは己の過信を強く責めた。しかし、現実是不変ならない。

紅魔館を去った信哉とフランの行方は誰にもわからない。

運命の歯車は確実にズレて狂ってゆく。

信哉とフランが共に去ってから一週間が過ぎ、幻想郷にとある噂が流れ始める。

妖怪や動物の謎の変死体が相次いで発見されているらしいのだ。

その噂は妖怪達の間で流れていたが、人里を行き来する妖怪の耳にも噂が入り、人里に噂が広まるのは早かった。

十六夜咲夜は己の失態や信哉への憤慨などの激情によって、見れば

誰もが恐怖を抱くような表情になっていた。

目付きは鋭く、話しかけただけでも攻撃してくるのではないかというぐらいに誰もが近寄れない空気を醸し出していた。

だがそんな彼女も紅魔館の家事全般を担う者。姿に問題はあれど仕事はこなさなくてはならなかった。

無論、人里への食料調達もだ。

しかし、この時はタイミングがあまりにも悪かった。

里の人々は咲夜の形相を恐れ、無意識のうちに噂の元凶と関係があるのではと結びつけるようになってしまう。

さらに噂は様々な情報が盛られて、妖怪や動物の変死体は体中の骨が抜かれているだとか、カラカラに干からびているだとか、四肢をバラバラにされていて頭が潰れているだとか様々だ。

人々は咲夜を恐れてから逃げるようになり、噂の元凶を彼女に押し付けるようになる。

やがて博麗神社へと情報が伝わり、とうとう巫女が動き出すまでに。

「変死体が出てるのは事実なのよ。……でも、ホントにそれをあなたがやったとは思えないわ」

「…知らないわ。そんな噂」

紅魔館へ直接赴いた霊夢は咲夜へとそう告げた。

咲夜は以前よりもまたさらに殺伐としており、尋常ならぬ殺気を放っていた。

「…。あまりピリピリし過ぎない方がいいわよ。ま、私には関係ないけどね」

霊夢は言葉を残して紅魔館を後にした。

咲夜の感情は許容を超えた激情で今にも爆発するのではと危惧するほど強大で、咲夜自身も激情に蝕まれるように負の感情に囚われていった。

「あの男を…アイツを…!!」

あと数日で信哉が告げた一ヶ月になろうとしていた。

変死体の噂は消えるどころか、変死体が人里・紅魔館付近の森で見つかったことよって、事件として捉えられ皆が恐れるようになる。そして噂の元凶と疑われていた咲夜への敵意はますます強くなっていた。

咲夜自身も負の感情が以前よりも膨大となり、既に区別の境界線すら見えなくなっていた。

「咲夜さん、一度休んだ方が…」

「黙りなさい。殺すわよ」

激しい憎悪の矛先は仲間へも関係なく放たれるようになっていた。咲夜は主のレミリアでさへ殺意を向けるようになっていた。ことある事に殺気を放ち、今、彼女がなぜ紅魔館の家事をこなせているのかが不思議でならない。

そして危機として感じているのは咲夜のみならず、レミリアもまた同様であった。

「…なによこの運命…。掻き乱したっていうレベルじゃないわよ」
能力で運命を察知したレミリアは顔を青ざめさせていた。

彼女が察知した運命とは、燃える世界の中で様々な生物が死んでゆくものであった。

地獄と言っても過言ではない光景らしい。

その日の夜、美鈴はレミリアから徹夜で三日間ほど門番する事を命じられる。

普段なら文句を言う美鈴も何かを感じとったのか、一度で顔を縦に振った。

「んー…なんだか胸騒ぎが…。気の所為ですかね…」

見えない異常に気づいているのはレミリアや美鈴のみならず誰もが本能的に察知していた。

虫の鳴き声や動物の声が静まり返って、静寂が世を包み込む。誰も
が息を飲んで耳を済まして警戒していた時だった。

『ゴゴゴゴゴ…!!!』

大きな地鳴りと共に揺れ始める大地。揺れは徐々に大きくなり、地

面に亀裂を発生させる。

「ちよ、ちよつとこれはまずいんじや…?!」

美鈴はあまりにも強い揺れに立ち続けることが出来ず、反射的に飛翔する。

空から見える光景に呆気にとられてしまう。

大地の亀裂は大きく広がって地割れとなり、激しい隆起や陥没が発生。

紅魔館も激しい損傷が既に発生しており、強い揺れが続くと崩壊しかねない程であった。

森に住まう鳥達が鳴きながら大量に羽ばたいた。揺れの音、鳥などの生物の鳴き声が辺りに響き渡る。

「…!!」

言葉を失っていると、さらなる事態が巻き起こる。

地割れの奥底から赤い光が放たれた瞬間であった。地中奥深くにある筈のマグマらしきものが、勢いよく地割れから噴出したのだ。

マグマは空中で溶岩化して大地や森に降り注ぐ。高温の溶岩は木々に直撃して発火させ、辺りの森を一瞬にして火の海へ変貌させる。

溶岩は依然、噴き出し続ける。

「お、お嬢様…?!」

美鈴は紅魔館へ戻ってレミリアの指示を受ける事しか、考えられなくなっていた。

目の前で天変地異と捉えられる程の出来事が、美鈴の思考や判断を制限させたのだ。

紅魔館へ戻ってくるや否や、美鈴は再び言葉を失ってしまう。

扉を開けてホールのような広場に、レミリアやパチュリー、咲夜が立っていて、一人の男性と一触即発の状況であったからだ。

しかしその状況下にてら美鈴はその男の姿を見て、その名が自然と口から零れた。

「信哉…」

やつれて肩が下がり、目の下に濃い隈を作った信哉が、咲夜達と対

立していた。

10. 救出作戦

信哉はただ立っていた。構えなどせず、咲夜達の前に立っていた。そこへ扉を勢いよく開けて美鈴が入ってくる。

信哉は視線だけを美鈴へと向けていた。

「信哉…」

信哉は何の反応もせず、ゆっくりと咲夜達へ意識を戻す。

「人間よ、問うわ。フランは何処なの」

「…。無事だ。だがここにはいない。俺がここに来た理由は…ツ!!」

信哉が答えを返している途中で、咲夜が時間を止めて信哉へ襲いかかる。

信哉は止まった時間の中で動ける為、咲夜の飛びかかりを素早く回避する。

「待ちなさい！今ここでアナタをナイフで切り刻んで、皮を剥いで、火で炙り殺してやる!!」

「ぐっ?!」

時間を止めた中で動けるとはいえ、咲夜の連撃は凄まじく回避が徐々に遅れていく。

「このっ…!!」

「がっ?!」

信哉は咲夜の手首へ手を翳し、弾幕を発生させる。

ゼロ距離での弾幕生成により、生成と同時に炸裂し咲夜の腕を弾く。

体制が崩れた所を蹴りを放ち、距離を置く。

信哉の蹴りは咲夜の右脇腹に直撃し、そのまま薙ぎ払われて地面を転がった。

咲夜が地面を転がると同時に時間も動き出す。

「咲夜っ?!」

突然、咲夜の位置が変わり声を張るレミリア。

すると信哉が額から汗を滲ませて、叫んだ。

「フランは少し離れた所にいる！俺がここに来た理由は十六夜咲夜

だ。彼女の異常を軽減、もしくは解決させるつもりだ」

蹴り飛ばされた咲夜が起き上がる。手にはナイフが握られて、投擲の構えを取った時だった。

『バキンッ!!』

「?!」

ものすごいスピードで何かが壁を突き破って、レミリア達の目の前に転がり倒れる。

「ふ、フラン?!」

「イテテテ…」

壁を突き破ってきたのはフランであった。体の各場所から出血していて、枝や木の板の破片などが刺さったりもしていた。

「フランドール、大丈夫か?」

信哉がフランの元へと駆け寄って手を差し出す。

フランが信哉の手をとって立ち上がる頃には傷は癒えていた。

フランの突然の乱入にレミリア達は思考が停止していた。しかし、咲夜は違った。

「殺すっ!!」

フランが壁を突き破った衝撃で遮られたものの、再び構えてナイフを投擲したのだ。

「ぐっ?!」

信哉は咄嗟にナイフを避けようとするが、ナイフの速度が突然加速し、避けきれずに信哉の肌を切り裂いた。

「ぶ、物体の運動すらも能力で操る事が出来るのか…!!」

信哉は鮮血が溢れる部位を手で抑え、咲夜と対峙する。

するとフランが心配するように信哉の傷口にそっと触れる。

「大丈夫だ…それよりも『ヤツら』の暴走を止める事が優先だ」

「分かった…!」

フランが外へ再び向かおうとした時だった。レミリアがフランを引き止める。

「待って! 何処へ行くの?!」

「…」

「あ…」

レミリアは反射的にフランを止めた為に、言葉を考えておらず、フランに見つめられて言葉が詰まってしまう。

何か言わねば。しかし、何かを言ったところで睨まれ責められる。どう、すねば…。

考えれば考えるほど言葉を失っていく。

フランの口が動きだした瞬間、レミリアは俯いた。

しかし、フランから放たれた言葉はレミリアが予想にも出来ないものであった。

「お姉様、どうしたの?」

「え…」

レミリアは思わず顔を上げて、耳を疑ってしまった。

彼女の視界には、睨みや叱咤と何も無い純粋な疑問を抱いた眼差しを向けるフランが映っていた。

「大丈夫だよ！フランは外の敵をやっつけにいくだけだから！」

「え、ええ…」

レミリアは呆気にとられてしまい、開いた口が塞がらなかった。

フランは外へ出ていこうとした直前に、再びレミリアの方へと振り向いた。

「お姉様、ありがとう…！その…嫌いなんかじゃないからね！」

「え…? ええええええええ?!」

レミリアは信じられなかった。一瞬、夢を見ているのではと思った。

フランの一言は一瞬にしてレミリアを混乱させてしまったのだ。

(え、え…?! ふ、フランが私の事を…?! ええ?!)

レミリアが困惑している間に、フランは再び外へと飛び立ってしまった。

呆然としているレミリアの瞳からは一滴の雫が流れ出ていた。

「貴様は…！貴様は絶対に殺してツ…!!」

「あぶっ?!」

信哉は咲夜の猛攻を避ける事しか出来なかった。

しかし避け続ける事も難しく、壁の破片に足をとられ体勢がよろめいてしまう。

すると、ここぞとばかりに咲夜は三本のナイフを信哉目掛けて投げつけて、また本人も両手にナイフを握って突き刺そうと突っ込んでくる。

無駄のない動作で、信哉が1つ行動する間に咲夜は複数の行動を終えているため、一手三手と遅れが生じ、信哉を確実に追い詰めていた。

咲夜は自身の攻撃が当たる事を確信して笑みを浮かべた。しかし、咲夜の攻撃は信哉に当たる事はなかった。

「待ってくださいー！」

「っ?!」

信哉と咲夜の間には、美鈴が割り込んで咲夜の攻撃を妨げる。

咲夜は憤怒の形相で、言葉を発さずに美鈴の首へと躊躇なくナイフを突きつける。

美鈴は咲夜の手を弾いて難なく回避すると、咲夜を止める為に力一杯肩を押し、足を引っ掛けて、地面へ倒れ込む。

「ううっ！」

「抑えっ…ぐっ?!」

美鈴は咲夜の腕を捻って拘束するが、咲夜は異常なまでの力で美鈴の拘束を振りほどこうとする。

腕を捻られて、上から押さえつけられている状態から、上体を起こし力づくで立ち上がる。美鈴の力が負けているのだ。

「ええっ?!ちよ、つよ…!!」

拘束して有利であったはずの美鈴は、すぐさま状況を変えられて不利になっていた。

「に、人間の…力を超えているっ！」

妖怪である美鈴のパワーに勝る咲夜のパワー。異常であった。

すると体勢を立て直した信哉が咲夜の額を鷲掴みにすると、咲夜の体は一瞬浮き上がり、壁に打ち付けられる。

「ぐうっ?!」

しかし咲夜に怯んだ様子もなく、間髪入れずにナイフを信哉の腕へと突き刺し、浮いている体をしならせて強烈な蹴りを信哉の腹部へ送り込む。

「ぐ……う……」

信哉は腹部を手で抑え、その場に膝を落とした。

咲夜は口が裂けんばかりの笑みで、ケタケタと奇声をあげながら信哉の頭頂部目掛けてナイフを振り下ろす。

美鈴が咲夜の手を止めようと全力で飛びかかるが、咲夜は瞬時に時間を止めた。

昨夜の手に握られたナイフが信哉へ向かって一直線に向かってゆく。止める者はこの咲夜の世界において誰一人いなかった。故に信哉自身が動かねば避けられないが、信哉は腹部への強い衝撃で動くことができなかった。

必中と思われる咲夜の攻撃。だがその攻撃は彼女自身が、信哉に刺さる直前に止めてしまう。

「ぐ、う……?!」

咲夜は突如、強烈な痛みが腹部に発生した事によりよろめいてしまう。

食あたりなどの張るような痛さではなく、明らかに外部からの衝撃による痛さであった。

あまりの痛さに咲夜は膝を落とす。そして信哉と同じ腹部から痛みを感じ手で抑える。

すると時間停止が解除され、飛びかかる美鈴が再び動き出す。

美鈴は突然腹部を腕で抑えた咲夜を見て、空を蹴って咲夜への直撃を回避する。

「こ、これは……?!」

信哉と咲夜が腹部を抑えて動けない光景を前に美鈴は戸惑った。すると信哉が脂汗を滲ませながら、美鈴へと言った。

「俺の……能力です……。『共鳴』させま、し

た……」

苦痛の表情を浮かべていた信哉だが、数十秒程経つと平然とその場

に立ち上がる。

すると咲夜も動けるようになったらしく、ナイフを持って信哉へと切りつける。

しかし、腹痛のダメージが余程咲夜を苦しめたのか先程のようなキレは失っていて、信哉は咲夜の攻撃を容易く躲し、先程美鈴が咲夜を押し倒したように、信哉も咲夜に足をかけて押し倒す。

「ぐ、う…!!」

「えーと…あの…。すみません、この人を魔法か何かで拘束してもらってもいいか?」

信哉は咲夜を押さえつけながらパチュリーへお願いする。

パチュリーは一瞬考える素振りを見せる。直ぐに咲夜へと手を翳す。すると光の鎖が地面から現れて咲夜を縛り付けた。

「アナタの…話を聞きたいわ。話してもらえるかしら?」

「今から話させてもらう。外で天変地異並の災害が発生しているのを知っていると思うが…。元凶は十六夜さんであって、詳しく言うとは人ではないんだ」

信哉の言うことに美鈴や小悪魔は頭上にクエスチョンマークを浮かべて首を傾げる。

パチュリーは表情を一つも変えずに、ただ信哉の話を聞く。

「十六夜さんの中では今、とんでもない事が起こっているはずだ。このままだと、彼女の魂は消える。俺はそう予想している」

「…早く結論をいいなさい。粗方予想はできたわ」

パチュリーが溜め息を吐きながら、大きな魔導書を開く。

パチュリーに言われた通り、信哉は直ぐに結論を言った。

「十六夜さんは霊の類に取り憑かれている。呪われていると俺は思っている」

美鈴と小悪魔が信じられないと言うような表情を浮かべる。しかし、パチュリーは納得の頷きをしていた。

「変だと思ったのよ。あなたと妹様が出て行った時、咲夜達は来れなかった原因として空間操作に誤りがあったって聞いたけど、咲夜において誤りは異常だし。こあ達も最近の咲夜が別人のように感じたり

しなかった?」

小悪魔と美鈴はハツとして思い返した。殺意を常に放っていた咲夜の姿を。

皆が咲夜へ視線を移す。咲夜は光の鎖を解こうともがき暴れていた。た。

「気づくのが遅れたわね…。まあでも今すぐに浄化させたら済む話よ」

パチュリーは咲夜へ向けて再び手をかざす。しかし、その間に信哉が妨害するように割り込む。

パチュリーはムツとした表情を浮かべた。

「そこ。邪魔なだけけど」

「十六夜さんの呪いは深刻だ。魂とほぼ融合している。浄化魔法を使つては十六夜さんごと葬る事になるぞ…」

「どうしてそれがわかるの?今にも彼女の魂は貪られているかもしれないのよ?」

「俺にはわかる。わかるんだよ、パチュリーさん」

信哉はジツとパチュリーの目を見つめる。

すると浄化魔法を使おうとしていたパチュリーの手は下がり、信哉へと向き直した。

「そう。じゃあどうしろと?」

パチュリーは不機嫌な様子で信哉へと問う。

信哉は紅魔館の外を指さして、ある一つの案を提案した。

「いま、俺の能力が常時発動中だ。まず俺の能力についてだが『共鳴する程度の能力』だ。本来ならば共鳴しないものですら、俺の能力で共鳴できる。

その上でだが、十六夜さんの魂と紅魔館周辺およそ半径一キロの範囲で共鳴させている。地獄の様な光景になつてしまつているのはそのせいだ。十六夜さんの魂を蝕むものの記憶に等しい…。筈だ」

信哉は、突然のマグマの噴出、燃え広がる森。それらの現象が咲夜の呪いの具現化とも言える、と言った。

小悪魔や美鈴がどうすればいいのかと聞き出そうとした時、先程ま

で混乱していたレミリアが口を開く。

「咲夜の魂を共鳴させているんだとしたら、未だに抵抗する『本当の咲夜』がいるということでしょう?」

「その通りです。この半径一キロ圏内に耐えしのいでいる咲夜の魂を見つけ出し、救出するというのが俺の考えた案だ」

「なるほどね…あなたがいてようやくできる技ね。その応用であの妹様も丸くさせたのかしら?」

パチュリーの問いに対して、信哉は言葉を詰まらせて苦笑いした。凶星のようだ。

「十六夜さんの魂を探す上でだが、本人がもつとも強く思っている…大事だったり思い出のある場所というのは侵食されにくい。つまり、その場所に魂が抗っている可能性が高い」

「思い出…ねえ。だとしたらこの紅魔館内には必ずあるわ」

「やはりか。激しい地割れが発生するほどの巨大な揺れだというのに建物が崩壊しないっていうのは謎に思っていた。もしそうならこの建物の中で最も損壊が乏しい場所こそが十六夜さんの残った魂だろう」

場所がかなり絞られたことにより、咲夜の魂を探す時間はかなり短縮されたように思えた。

しかし、咲夜がこの館を維持させてきたからこそその苦難が立ちはばかる事となる。

レミリア達は二手に別れ、小悪魔とパチュリー、レミリアと美鈴の二手で紅魔館内で咲夜の魂を搜索。

信哉は紅魔館の内装をあまり認知していない為、外にいるフランの元へと向かった。

外にいたフランは手に巨大な炎の剣を握って、紅魔館へと押し寄せ大量の黒い影と交戦していた。

「すまんフランドール。遅れた」

「おーそーいー!!フランでもこの数は厳しいって!!」

フランは剣で影を切り裂きながら、信哉へと怒鳴る。

信哉は申し訳なさそうに頭をかきながら、押し寄せてくる大量の影

と対峙する。

「さて…。そこまで十六夜さんの魂の居心地がいいのか。恩人の一人なんだよ、苦しめないで欲しいな…!!」

信哉は影を睨みつけながら、フランと同様の炎の剣を生成し、振るった。

レミリアと美鈴、パチュリーと小悪魔は紅魔館内を右往左往して必死に咲夜の魂であろう場所を探す。

しかしあまりにも広すぎる。かれこれ数分は廊下を高速で移動しているが、壁が見えない。

その状況で美鈴とパチュリーはある事を思い出す。

「辿り着けない…。やっぱり、この異常な廊下の長さは咲夜さんの…」
「この現象…美鈴や咲夜の言っていたループ現象…?!…まさか咲夜に取り付いている魔物は咲夜の能力を操作できる…?!」

美鈴とパチュリーは額から冷や汗を流す。

パチュリーの理論はあり得ることであった。以前に起きた空間誤操作は魂を乗っ取りつつあった魔物による現象とも言えるからだ。

レミリアも異常に気づいたのか、先ほどよりも周りに警戒していた。すると何かに気づいた様子で、暗く見づらい廊下の奥を凝視する。

「美鈴、何かいるわ」

「わっ?!奥から流れ出る気の強さが桁違いですよ…かなりのヤバイ奴っぽいです…」

美鈴は腰を下ろして構え、レミリアは羽を広げて顎を引き闇を睨みつける。

数秒後、闇からゆっくりと現れたのは影が地面から浮き出たような真っ黒の姿で二足歩行型、高さ百五十センチほどの鋭い牙が口から大きくはみ出した化け物であった。

しかも一体ではない。奥から湧き出るように大量の化け物が音もなく現れる。

「こ、この数は…予想外ね…」

「な、なんか気が不安定で存在自体を認識しづらいです…」

一瞬驚いた表情を見せるが、二人は直ぐに冷静を取り戻し、戦闘態勢に入る。

レミリアは紅く輝く大小様々な弾幕を宙で生成する。弾幕はレミリアからの一定距離を保ちつつ、円を描くように漂う。

また美鈴も同様に宙に色鮮やかな弾幕を生成して、自身を守るように動かないように固定させる。

「さて私の可愛い従者から離れてもらわないとね…。美鈴、私が先頭になって力づくで突っ切るわ。後方支援しなさい」

「わかりました」

レミリアはその場から小さく浮かぶと、羽を広げて高速で前身する。美鈴もその後を追って全速力で駆け抜ける。

化け物達は向かってくるレミリア達に襲いかかるが、弾幕に被弾したり、直接攻撃されたりと反撃されて、いとも簡単に敗れてしまう。

両手でも数え切れないほどいたはずの化け物は一瞬にして肉片へと変貌。

圧倒的強者として存在する二人の姿がそこにあった。

「さっさと通しなさい！この弾幕は遊戯なんかじゃあないわ。道を切り開くただそれだけよ!!」

レミリアは叫んだ。消えゆく従者を救う為に。進む先に咲夜の存在を勘にも等しいほどの不確かなものだが、しっかりと感じていた。

レミリアと美鈴は高速で突き進んだ。

パチュリーと小悪魔は同じ廊下を彷徨い続けていた。不気味なほど静かで、点々と続く蝋燭の灯火が揺れるたびに影も揺れる。

「パチュリー様、完全に閉じ込められた感じですね」

「…そうね、歩くのも飛ぶのも疲れたわ…」

パチュリーは息を上げて、左右に揺れながら進んでいた。

無限に続く廊下。抜け出す手はなく、効果が切れるのを待つのみであった。

「はあ…。この空間が咲夜の魂の魂と共鳴さえしていなければ魔法をぶっぱなししていたのに…」

「パチュリイ様、それでは救う以前の問題で住居破壊行為ですよ」
パチュリイは体力が尽きかけていて、壁によしかかる。

小悪魔もパチュリイの様子をみて立ち止まって、マッサージなどのケアを行う。

「パチュリイ様、もっと運動しましょう?」

「……耳が痛いわ」

肩、脚、腰、肩甲骨周りの筋肉を手際よく揉みほぐす小悪魔。

寝そべりつつあるパチュリイは、マッサージの心地良さに目を細めて、緊張が解けていた。

呼吸も落ち着いて、体力も回復する。いざ立ち上がろうとした時だった。

『バチッ!』

「っ…?!」

パチュリイに、静電気が発生したときのような衝撃が、体中に響く。驚きはしたものの、特にダメージや影響はなく、咲夜の魂探しを再開する。

(今の…本当に静電気なの…?)

衝撃のことが気になっていた時だった。

パチュリイの手を引いていた小悪魔の足が止まる。

そして震わせた声で小悪魔は呟いた。

「ど、ドアが奥から…開いていく…?!」

無限に続く廊下の奥から、ひとつ。またひとつと小悪魔達に近づきながら扉が開かれてゆく。

唾を飲む音が聞こえた。

小悪魔の脚が下がる。開かれる扉の間隔が自分たちの目の前へと迫る。

パチュリイは魔導書を開く。緊張した空気が漂い始める。

『バタンっ!』

そしてパチュリイ達の目の前にある扉が開かれる。

扉の奥から飛び出す影が見えた瞬間、パチュリーは火の魔法を放っていた。

「はあっ！」

「ぐっ?!」

しかし魔法は空中で打ち消される…というよりは弾けた。

だが、その事よりもパチュリー達は今の声の主に驚いていた。

「ま、まさか…魔法を投げつけられるとは…」

扉から出てきたのは信哉であつた。そして後に続いてフランが出てくる。

「パチュリー！いきなり魔法を放たないでよ!!」

フランは、パチュリーの不意打ち魔法にご立腹の様子。それを信哉がなだめる。

「助かった…。フランドルが能力で魔法を破壊してなかったら…考えるだけでも恐ろしい。だけど今は許してやってくれ…」

「むー…。信哉がそう言うなら…」

「ご、ごめんなさい…まさかあなた達だとは思ってなかったから…」

信哉はパチュリーに向き直って、現在の状況を伝える。

「俺達は紅魔館に攻め寄る化け物達を妨害していたが、突然姿を消したんだ。謎に思っていた所で、パチュリーさんと『共鳴』できて、ここまで来れた」

「共鳴…」

「多分静電気みたいな衝撃が来たはず。共鳴できれば、何となく位置は分かる」

パチュリーは立ち上がった時に、全身へ走った衝撃を思い出す。

どういう条件で衝撃が起こって共鳴出来るのかは定かではないが、信哉がこの不思議な空間に関係なくパチュリー達の前に現れたのは、紛れもなく共鳴した上での結果であつた。

信哉は辺りを見回すと、そのまま膝を落として床に手を当てる。

「なんだこりや時間軸がループしてやがる…道理で一歩も進んで居ないわけだ…」

手に触れた床部分から複雑な歯車の紋様が浮かび上がり、輝き始め

る。

目の前に展開された光の歯車はゆっくりと動かされて元々あったであろう場所へと戻ってゆく。

すると無限に続いていた長い廊下が軋み、揺れ、歪み出す。

歯車の移動が終わると、先程まで見えなかったはずの廊下の終わりが目の前に現れる。

「…元に戻った」

「俺は前に十六夜さんと共鳴したことがあるんだ。だから十六夜さんの能力は俺も少しだけ使える」

信哉はその場から立ち上がり、駆け足でその場から移動する。

その後をフランが慌てて追いかける。

「パチュリーさん！この階には十六夜さんの魂はない!!この上の階：紅さんがいる階に十六夜さんの魂はある！」

信哉は階段を素早くかけ昇る。フランは飛翔して階段をショートカット。

パチュリーは息絶えだえで走る信哉を追いかけるのだった。

レミリア達は特攻の末、一番奥の部屋へと辿り着いていた。

パチュリー達と同様に空間の時間軸を変更する術式が組み込まれていたが、レミリアと美鈴の覇気によって掻き消されたらしく、幸運にも辿り着けたのだ。

「美鈴、やるじゃない。いつもこのぐらい活躍してくれてもいいのよ？」

「うっ…が、がんばります…」

美鈴は苦笑いしながら、目の前の扉へと手を伸ばす。

すると後ろから複数の足跡を感じ取る。

思わずレミリアと美鈴は構えた。しかし、走ってくる者の姿を見て構えを解いた。

信哉やフランであった。

「お姉様！フラン外でずっと頑張っていたんだよ！」

「フラン…ありがとう。お陰でここまで来る事が出来たわ…！」

レミリアはたじたじしながらも、フランの頭に手を乗せて撫でた。フランは嬉しそうにはにかんでレミリアに擦り寄った。

「〜!？」

レミリアはその事に慣れていないのか、顔を赤らめて体を硬直させていた。

また美鈴も信哉の姿を見て安心…という名の涙を流していた。

「うあああ〜!!もう何処に行ってたんですか!無断欠勤大罪ですよ!ホントに…!!」

「す、すいません…」

そんな美鈴の勢いに押されたのか、信哉も萎縮して弁論すらしなかった。

「よしっ…!あと咲夜さんを救えば今度こそハッピーで終わられますよ…!!」

「私の従者に手を出した事…後悔させてやるわ…!!」

レミリアは扉に手をかけて、勢いよく開く。

『!』

そして一同は、扉の奥の光景を目にした途端、体を硬直させた。

11. 崩壊

扉を開けた先には、部屋がなかった。

ただ床も壁も何も無い、ドロドロとした黒と白で澱んだ空間が広がっていた。

「こ、これは…」

恐る恐る足を前へ伸ばす。すると床の感触はあり、しっかりと踏み込む事が出来た。

「これが…咲夜の魂なの？」

「いや、これは多分…」

白銀のような輝きと夜空のような漆黒の闇が入り乱れた空間は、ある一点へ動きつつあった。

その事に、美鈴は気を感じて知る。

「真ん中に…このぐちよぐちよした空間が集まっています…」

皆が美鈴の指さす先を見る。確かに白と黒が渦のような紋様を描き、収束していた。

信哉が前へ出る。

彼を止めるものはいなかった。この場において最も状況を理解しているであろう者は、この環境を作り出した人物であると、無意識に考えていたからだ。

渦へ向けて手をかざす。

「ぐ…！」

しかし信哉は途端に顔を歪め、その場に膝を落とした。

「お、怨念…。俺への…怒りの塊か…こりや…」

信哉の額からは大量の冷や汗が流れていた。息も荒く、かなりの疲労が一瞬にして溜まる。

「信哉…！」 「信哉っ!？」

信哉の元へフランと美鈴が駆け寄ると、二人は信哉を引っ張って渦から離れさせる。

すると後ろから息絶えだえのパチュリーを抱える小悪魔が遅れて

やってくる。

「ぱ、パチュリー様あ…着きましたあ…!!」

「助かったわ…ゲホッ!ありがと…」

小悪魔は背負っているパチュリーを慎重に下ろすと、そのまま壁によしかかる。

すると信哉が息を整えて、立ち上がる。

「最後の…大詰めだ。状況を説明する。」

この空間は俺への敵意の塊だ…特に濃厚のな。小さく生まれた負の感情は十六夜さんへ取り憑いた魔物によつて限界を超えるまで膨張させられた。

そして今やその感情の存在そのものが魔物と言っても等しい…。

この空間のほとんどが排除すべき存在だ」

「じゃ、じゃあ…ここでゲホッ?!…浄化させたら…いいのね」

「確かにそうなのだが、ほぼ完全に十六夜さんの魂と一体化している…。あの渦の先に残りわずかの魂が残っている…」

「え…?!それって大丈夫なんですかあ?!」

美鈴は顔を青ざめさせて声を荒らげた。

信哉は一度、深く息を吸った。そして吐いた時に、覚悟を決めた。

「十六夜さんも…恩人の一人だ。絶対に死なせやさせない…!」

十六夜さんの魂を100%の状態で助ける!その為にも最初はこの空間に漂う魔物の魂と十六夜さんの魂を分離。その後、魔物の魂だけを切り取って浄化。これでいくしかない」

信哉はフランへと近づいて、しゃがむ。

「フランドール…血を分けてくれ」

「…うん、わかった」

フランは親指の先を噛みちぎり、血を滴らせた。信哉はその滴った血を手で受け止め、口へと運んだ。

その光景を目にしたレミア達は、驚愕のあまり声を失って呆気に取られていた。

フランの血を摂取した信哉からだならぬ圧が発生する。

「これで…行くぞ…」

信哉は再び渦へ歩み寄り、手をかざす。
すると辺りから叫び声のような奇声が鳴り響く。

『ギョギイイイイ!!』

この世の生物の鳴き声とは思えぬ、憎悪すら感じる声。思わず耳を塞ぎたくなる。

「ぐっ…ぐあああ…!!」

信哉から呻き声が漏れる。足を震わせながらも、必死に歯を食いしばって立ち続ける。

すると白と黒が入り交じった空間の黒が信哉に向かい始める。黒の紋様の移動速度は徐々に加速し、信哉に飲み込まれてゆく。

銀の輝きに等しい眩き白が煌々とし始める。澱んだ黒が急速に減ってわずかな時間で、美しい銀世界へと変貌する。

変化に驚いている暇もなく、黒を全て取り込んだ信哉が走り出す。

「ぐ…あ…あ…!!」

呼吸すら忘れるほど信哉はこの場から離れる事に必死であった。しかしだ、取り込む事で体力をほとんど使った信哉はこの空間を出る前に立ち止まってしまう。

「ぐ、お…」

限界がすぐ目の前までやって来ていた。

しかし、誰ひとりとして諦めてはいなかった。

誰よりも早く動き出したのはフランと美鈴であった。

フランはどこからか、先端がスパードの形をした歪んだ棒を取り出して、膝を落としてうずくまる信哉に下から叩きつける。

下から上への軌道で振るわれた棒は信哉の体を浮かし、空間の出口へと吹き飛ばした。

しかし信哉の体から突然黒いモヤで出来た手が飛び出し、出口の縁を掴んで留まっていた。

「そこですっ!!」

そこへ美鈴が掌底を放って、力尽くで信哉を空間外へと吹き飛ばした。

「ぐおあああ?!」

信哉が床に転がった瞬間、黒いモヤが勢いよく飛び出して、美鈴達のいる空間へ戻ろうとする。

しかし、パチュリーが既に待ち構えていた。

「信哉…私はあなたを大きく評価するわ。ありがとう、仲間を救ってくれて…！くらいなさいっ！」

パチュリーの声が弾けると共に、眩い閃光がビームのように前方へ放たれる。

黒いモヤは魔法が放たれる前に察知して、逃げようとしたが、まるでリードが繋がれたかのように移動と共に後ろからの引力で苦しもうにもがいた。

「逃が…さねえ…!!」

信哉がモヤを素手で掴んで引つ張っていた。

黒いモヤは逃げられない事を悟らせる時間も与えないまま、眩い閃光に飲み込まれてボロボロと朽ちたのだった。

信哉は光に包み込まれ、体がフツと軽くなるのを感じた。

極度に疲労した心身は、信哉を強制的に眠りへと誘った。

(能力…を…解除しなければ…ば…)

意識が遠のく中、信哉は咄嗟に発動中の能力を解除する。全てをやりとげた信哉は赴くままに意識を鎮めたのだった。

広場にて拘束していた咲夜は気を失っていた。

レミリア達は信哉と咲夜をベッドへと運び、寝かせたのだった。

紅魔館周辺の森はほとんど焼け朽ちて、殺風景となっていた。

また地割れの規模も深刻で、酷い場所では五メートル程の高低差が出来るほど隆起、陥没した所もあった。

しかしそんな事よりもレミリア達はフランへ聞きたい事があった。

「妹様…その。信哉へ血を飲ませていたのは…」

美鈴が途切れ途切れでフランへと問う。

フランはハッキリと言った。

「信哉は吸血鬼かもしれない。始めて会った時に、死にそうだったから血を与えてみたの」

「やっぱり…そうなのね」

レミリアは驚いているような悲しんでいるような、曖昧な表情を浮かべた。

するとパチュリーがフランへ幾つかの質問をしてきた。

「信哉が日光に当たってるところとか見ました？」

「ううん」

「川を避けたりとかは？」

「肌が痛いとか言って雨とか川とか避けてたよ」

「…人間離れた力を得たと思わせる事とかは？」

「ないよ」

パチュリーはいくつかの質問を踏まえたとの結果を想定する。

「信哉は恐らく半人半鬼の状態であることが高そうね…。でも妹様の血を摂取すればするほど鬼化が進むはずだわ」

「…まずは本人の意志を聞いてみましょう…。吸血鬼となってもいいのか…人間でありたいのか…」

重い空気が流れ、沈黙の時がやってくる。誰も喋ろうとはしない。

しかし、その空気が一転する事が起こる。

『ギィィ…』

突然部屋の扉が開かれる。

一体誰が開けたのかと、皆が扉へ視線を向ける。

すると扉から十六夜咲夜がスツと現れた。

「さ、咲夜…?!」

レミリア達は驚いて、一瞬体を硬直させた。

咲夜の以前のような生々しい殺気を放つ面影は嘘のように消えており、凜とした面影が甦っていた。

咲夜はレミリアへと申し訳なさそうに聞いた。

「あの…私は何をしていたのでしょ…。記憶がないんです…」

「もう大丈夫なの…? 体に痛い所とかない…?」

レミリアが心配そうに咲夜の体をぺたぺたと押し始める。

状況を理解していない咲夜は困惑してしまう。

「あ、あのお嬢様っ?!」

「何も覚えていないようだから私が教えるわ。まず最後の記憶は何を思い浮かべるの?」

パチュリーの問いに対して咲夜小さく唸ったあと、ハツと思い出す。

「最後……あ、妹様が男に連れ去られ……あれ?」

咲夜はフランが信哉に連れ去られた事を思い出すが、フランが目の前に座っているため尚更混乱が生まれる。

「なるほどね。一ヶ月ほど前の事を最後に覚えてるのね。

アナタは今まで妖怪か霊だかに取り憑かれて操られていたの。そして今、アナタに取り憑いた霊だかを取り除いたから助かった。こんな感じね」

「つ、つまりは一ヶ月も寝ていたのですか……?!」

「いえ、取り憑いた奴がアナタになりきって一ヶ月を過ごしていたわ。危うくアナタが取り込まれる所だったけど。

……見た感じ特に問題はなさそうね」

咲夜は難しい表情で自分自身の手を見つめた。

気を引き締め直すように、咲夜はグツと拳を握り締めた。

そしてもう一つ気になっている事を聞こうとする。

「あの、妹様はどうやって帰ってこられたのですか……?」

「信哉と一緒に帰ってきたよ?」

「あ、あの男も?!」

咲夜は声を大きくして驚いた。

するとパチュリーも声を大きくして咲夜を静止させようとする。

「咲夜、落ち着きなさい!」

「す、すいません取り乱しました……。それにしても拐った本人が連れて帰るといふのは……?」

「あー……」

咲夜の問いに対し歯切れを悪くするパチュリー。その間に皆の目を見てアイコンタクトを送る仕草をする。

そしてレミリアが口を開く。

「咲夜、確かに信哉はフランを拐ったけど……。自分の能力を制御でき

るようになって帰ってきたわ。

しかもそれだけじゃないの。帰ってきたと同時に、アナタも助けたの」

「え……」

咲夜の口から声がこぼれる。

呆然とした咲夜の様子を見たレミリアは、咲夜を信哉本人の元へと連れていく事にする。

部屋を出て、客間用に用意してある部屋へと辿り着くと、レミリアは中へと入っていく。

咲夜もレミリアの後に続いて入っていく。

部屋は真つ暗で、隅に設置されたベッドに膨らみがあった。

蝋燭を灯して部屋を照らすと、ベッドに白髪の痩せこけた男性が眠っているのが見えた。

「髪が…?!」

レミリアは信哉の髪を見て、焦りの表情を浮かべる。

呼吸も弱々しく、今にも死ぬのではと思うほどに信哉は衰弱していた。

帰ってくるのが遅いと感じたパチュリー達もやってきて、信哉の姿を見てレミリアと同様の反応を見せる。

「血行も悪そうね…。多分もう待つてられないわ」

パチュリーは信哉の呼吸、肌、心拍状態を見て断言した。

「そ、それって…」

「ええ、妹様の血を摂取させて生命力を強化。かなり強引だけど、体力を殆ど失っている彼に生きる道はそれしかないわ」

その事を聞いたフランは真剣な顔つきで、素早く袖を拭い、腕を出した。

「信哉が死んじゃ嫌だ！早く！」

「待つて」

フランが自身の腕に傷をつけようとした時、レミリアが静止させる。

「彼はまだ人間。多量摂取をしてもし肉体が耐えきれなかったら、そ

れで彼は死ぬわよ…!!」

「で、でも…!」

フランは拳を握り締めて体を震わせた。

するとパチユリーは溜め息混じりに言った。

「じゃあ投与回数を決めて投与量を最小限に抑えましょう。一回目の投与と二回目の投与の間に六時間程度を挟むこと。そして、様子を見て日に日に増やしていく事ね。それで耐えられないのなら打つ手無しよ」

「分かった…!!」

フランは力強く頷いて、自身の腕を傷つけようと手に力を込めた。

「待って。今まで一回でどのくらい血を与えていたの?」

「多分…三、四滴ぐらい」

「じゃあ二滴ね。一回の投与量は二滴分」

「分かった」

フランは腕の表面を鋭い爪で小さく切り裂いた。切り口が赤く滲み、そして液体がタラリと流れ出す。

信哉の口元へ目掛けてゆっくりと血の雫が一滴…二滴と落ちたのを確認すると、フランは傷口を手でぐりぐりと擦って直ぐに治癒させた。

フランの血を摂取した信哉は先程よりかは血行が良くなったのか肌にも赤みが蘇る。

「…回復しているようね。このままいけば多分大丈夫なんじゃないかしら」

「そう…良かった」

レミリアは胸を撫で下ろし、再び咲夜へ向き直る。

「アナタには約一ヶ月の記憶がないからあまり強要はしないけど…彼の事を…憎まないであげて…」

「は、はい…」

レミリアのお願いに対し咲夜は少し戸惑いながらも返事をした。

しかし、今の彼女には彼を憎んでいたりはしていなかった。

むしろ、どのようにして助けてくれたのか、不安定であった妹様を

安定させたのか、なぜそこまで尽くすのかと興味を持つようになっていた。

レミリア達は信哉を徹底的に献身する事を決めると、信哉の元へ必ず一人は監視として置くようにさせた。

特にフランとパチュリー、咲夜の三人は一日の内に定期的に訪れて、信哉へ血を投与させたり健康状態をこまめに確認する体制を取った。

そうした状況から三日目、深夜から昼まで監視担当となっていた美鈴が信哉の寝ているベッドに違和感を感じ取った。

「……ん？何か……盛り上がってる……？」

信哉の体によってではない事が明らかかな毛布の隆起が、ベッドの右端にあった。

少し申し訳なさを感じつつも、美鈴は静かに布団をめくる。

「ふ、袋……？」

布団の下には中身の入ったビニール袋があり、信哉はそれを握っていた。

「い、一体いつからこれを……？」

美鈴は困惑しながらも、袋を握る信哉の手を解いて、袋を回収する。

そして何気なく袋の中を見るとまた更に美鈴は困惑した。

「こ、これは何なんでしょうか……?!」

袋の中から出てきたのは植木鉢、紙パックで包まれたトマトやバジルなどの種だった。

「し、信哉はこれらをどうやって……？……あ」

もう袋の中には何も入っていないかを確認する為に覗いた時、一枚の紙切れが入っている事に気づく。

その紙には信哉の執筆らしき文面が綴られていた。

『ありがとうございます』

紙にはお礼の言葉、ただ一言しか書かれていなかった。

美鈴が紙切れと信哉を交互に見ていると、扉が開いて咲夜が入ってくる。

「あ、咲夜さん……これ……」

美鈴は咲夜へとすぐに紙切れ、そして袋に入っていたものを見せた。

咲夜は驚いた表情をしてマジマジと未だ眠っている信哉を見た。

「…本当は起きてるの？」

咲夜はそつと信哉の頬を指先でつついた。しかし反応はない。

すると後ろから美鈴が言った。

「氣の流れがあまりにも落ち着いているんで、まだ起きてはいないかと…」

「じゃあ…これは何処から…」

二人が疑問に思つていくら考えようと、解決する事はなかった。

しかし、その日から毎朝信哉の手には袋が握られるようになった。中身は様々で、缶詰や可愛らしい手布、髪留めやリボンが入っている事もあった。そしていずれの袋の中には必ず紙切れが入っており、感謝の言葉が書かれてあった。

そんな日々が一週間と三日ほど続いた時だった。事態は急変する。

『ポタタツ』

今朝もフランは血を投与しに信哉の元へパチュリーと共に赴いていた。

以前の状態と比べると格段に良くなった信哉であるが、問題は目を覚まさないことであった。

血を投与し終え、フランとパチュリーが部屋を出ようとした時だった。

「あ…」

監視の担当であった咲夜が声を漏らしたと同時に、フラン達は背後で何かが動いた気配を感じ、振り返る。

「あつ…」

フラン達も声を漏らした。彼女達の視線の先には、ベッドから状態を起こす信哉の姿があった。

「信哉あー！」

フランが弾けるような笑顔になりながら、信哉の元へと駆け寄る。

信哉はフランの顔を確認すると、頭を右手で抑えながら辺りを見回す。

「俺は…」

意識がはつきりしない中、咲夜の存在に気づいて目が合った瞬間であつた。

信哉の顔が引き攣つたのだ。

「う…!!」

「あの…その…」

咲夜は口を一瞬こもらせたが、一呼吸して落ち着いた上で信哉の目を見てはつきりと言った。

「助けてくれてありがとうございます」

咲夜はゆつくりと頭を下げた。

信哉は未だに顔を引き攣らせたままだが、小さく頷いた。

「あ、ああ…」

信哉が落ち着いたのを見て、パチュリーが口を開いた。

「体の感覚はどうかしら？」

「む……。特に問題は無さそうだ。強いて言うならとてつもなくお腹が空いたってぐらいだろうか」

「そう…。…血行、呼吸とかに異常はないわ。後は咲夜と妹様に任せるわ…」

パチュリーはそう言うと、背を向けて部屋を後にした。

信哉は布団から出ると、ゆつくりと立ち上がって前を見据えた。

「…かなり寝ていた筈だが衰えてもない…。むしろ以前よりも強靱になっっているな」

「あう…」

信哉が不思議そうに手を握ったり開いたりしていると、フランが申し訳なさそうに小さく信哉へと言った。

「その…信哉が寝てる間、フランの血をあげちゃったから…。もう人間じゃ…」

最後は声も掠れ、聞き取れない程にまで小さくなっていた。フランの目に薄く涙がうかぶが、信哉はぽふっとフランの頭に手を置いた。

「フランドール…助かった、ありがとう」

フランはそのまま何も言わずに、信哉へと顔を押し付けた。

信哉はフランの頭をゆっくりと撫でながら、咲夜へと顔を向けた。

「十六夜さん、体に支障とかは…？」

「いえ、何もなかったわ」

「そうか…良かった…」

口が綻ぶような暖かい時間が流れる。

咲夜は薄く微笑み、信哉がフランを撫でる様子を見守った。

すると数秒程してからだった。

「……………なっ…?!」

信哉が突然、辺りを見回したのだ。

咲夜が信哉へ何かあったのか聞こうとする前に、信哉はフランから

素早く離れた。

「え…？」

フランが驚いた表情で信哉を見る。彼女の視界に映った信哉は顔を青ざめさせて、とても焦っている様子であった。

「フランドール、十六夜さん！すまない…!!」

「な、何を…?!」

信哉がいきなり咲夜の背後の壁目がけて走り出した事に反応出来ず、咲夜は咄嗟に身構えてしまう。

信哉は咲夜をヒラリと躲して、壁へ直進。

壁にぶつかる手前で信哉は腕を高く上げて振り下ろす。

すると一瞬で壁は壊れ、それどころか全ての階に渡って亀裂が生じ、紅魔館を断頭する裂け目が現れる。

「うおおおおっ!!」

信哉は叫びながら破壊した壁から身を飛び出した。信哉が空中で身をキュツと縮こまると、バネのように勢いよく放たれた脚が空を弾いた。

『パァンッ！』

辺りに破裂音に似た音が響き渡る。その瞬間、信哉は宙を地面と並行に前へ爆発的に加速。

『パァンッ!』

再び空が弾け、信哉は再び急加速。

フランと咲夜が壁から信哉を追おうとした時には既に姿は遠い彼方にあつた。

呆氣に取られていると、日傘を持ったレミリアが上から降りてくる。

「咲夜、フラン! 急いで人里へ行くわよ……!」

レミリアはかなり焦った様子でフランと咲夜へ叫んだ。

フランと咲夜は壊れた壁から飛翔する。

咲夜はどこからともなく日傘を取り出してフランへ日光が当たらないようにする。

信哉が真つ直ぐ跳んで行つた先には人里があつて、そこへ向かつて移動しているというのをレミリア達は直感的に察していた。

人里へ近づくとつれて、異様な光景が露わになる。

辺りには血の匂いが充満し、空気がピリピリとしていた。

レミリア達は自然と気を引き締めて、今まで以上に警戒していた。

「お嬢様、妹様……。これは一体……」

「……天狗共の死体ね。これは」

三人の眼下には、胴体を切り離されたり、潰されたり、無残な姿となった白狼天狗や鴉天狗が点々と見受けられる光景が広がっていた。「もつと加速するわよ……!!」

レミリアが飛行速度を上げると、フランと咲夜はその後をついて行つた。

人里へ行くにつれて増えゆく天狗などの妖怪の死体。

やがて建物が見える程人里に近づくと、黒い煙が各地から上がっているのが見えた。

レミリア達は上空から信哉を探す。

「戦闘があつたらしいのですが……この様子からだとも既に時間が経っているようですね……」

荒れに荒れた人里に人の姿は見当たらず、火事で焼けた後の煤が宙に舞っていた。

目を凝らして信哉を探していると、突然フランが人里を出てすぐの森へ指をさした。

「多分…あそこ！」

「フラン！」

フランはレミリア達を置いて森へと全速力で向かった。

すると先程フランが指さした方向で突如爆発が発生。日が未だに傾いていて影が伸びていたのだが、眩い閃光が影を一瞬消し去った。

レミリア達はより速度を上げ、爆発地点へと目指した。

「し、信哉…！」

爆発した場所へたどり着くと、立ち上る黒煙のすぐ傍に信哉が膝を落としていた。

フラン達は信哉へ駆け寄るがその最中で、粉々に吹き飛んだ肉片が辺りに散らばっているのに気づく。

信哉もレミリア達に気づいて振り返る。すると彼は目から涙を流していた。

その原因は彼の胸元の存在であった。

「ケホッ…ウゲエ……」

「と、トラあ…?!」

吐血しながら腹部から大きな出血の見られる明寛がいた。

フラン達は信哉へ声をかけようとしたが、どう声をかければいいのか分からず、その場に立ち尽くす事しかできなかった。

すると信哉が明寛を強く抱きしめながら口を開いた。

「何度…。何度繰り返し返そうと…トラは死んだ…何故なんだ…。何故俺たちは生きる事が出来ないんだ…!!何故、失っていくんだ…!!」

信哉の悲痛な叫びは木々に吸い込まれ、消えてゆく。

明寛の弱々しい呼吸が二回繰り返し返された時だった。信哉は咲夜へとお願いをした。

「十六夜さん…ナイフを一本下さい…。トラを…このままには出来ません…」

「…。ええ…わかったわ…」

咲夜はナイフを取り出して、信哉へと渡す。

信哉は受け取ったナイフを地面に一旦置いて、抱いていた明寛を地面へと寝かせる。

そして左手を明寛の心臓があるであろう場所へ乗せ、ナイフを拾い上げる。

「トラ…。ごめんな…」

信哉は明寛へそう言うと、右手に持ったナイフを自身の左手ごと明寛へ突き刺したかった。

「信哉?!」

フランとレミリアが驚いて声を上げたその時だった。

とてつもなく濃密なエネルギーが信哉達を包み込むと、眩い光が発されてレミリア達の視界を奪う。

「あうっ?!」「なっ?!」「くっ?!」

三人は咄嗟に腕を目元に押し付けて、何とか信哉の様子を探ろうとする。

眩い光の中でうつすらと見えたのは、二人を繋ぐように刺さっているナイフに信哉が溶けていく姿であった。

眩い光と凄まじいエネルギーの収縮は僅か六秒ほどで静まった。

三人の前に居たはずの信哉の姿・瀕死状態であった明寛の姿はなく、血色も良く力強く呼吸している明寛ただ一人しかいなかった。

「な…何が起こったの…?」

「信哉が…ナイフに吸収されたようにも見えたわ…」

「し、しかし…そのナイフがあの子には刺さっていませんよ…?」

三人が困惑していると、明寛の目がゆっくりと開いて、ゆっくりと起き上がった。

「ぐ…う…う…あれ…信兄い…?」

明寛は不思議そうに辺りをキョロキョロと見回す。

そして咲夜達へと質問した。

「信兄いがいたと思ったんだけど…いなかった?」

「え…あ…」

レミリア達は顔を横に振る。状況に追いつけず、言葉が浮かばないのだ。

すると奥の草むらが急に揺れ、何かが飛び出した。

「せめて此奴だけでもっ…!!」

草むらから飛び出したの片腕を失った白狼天狗であった。刀身の大きな刀で明寛を切り殺そうと腕を大きく振り上げていた。

「咲夜っ！」

「はいっ！」

咲夜は即座に時間を止めて、白狼天狗目掛けてナイフを投擲。そして明寛を抱き上げて移動する。

「そして時は動き出す…」

「ぐかつ…」

宙で止まっていたナイフは時間が動き出すと同時に動き出し、白狼天狗の首に突き刺さる。

声にならない悲鳴をあげる白狼天狗は苦しそうにもがいて、やがて動かなくなる。

「怪我は無い…？大丈夫…？」

「え、あ……。はい」

咲夜は優しく明寛へ問いかける。明寛は呆気に取られながらも返事をした。

「人里で何があったのか聞いてもいいかしら…？」

レミリアは明寛へと近寄る。明寛はうーんと唸りがなら言った。

「ごめんね…その、覚えてないんだ…。信兄いがいたような気がしたのは覚えてるんだけど…」

「そう…。…?!咲夜…」

「はい…」

再び草むらが揺れだし、警戒する咲夜達。

しかし草むらから出てきた者の姿を見て咲夜達は警戒を解いた。明寛も声を漏らし、その者へと駆け寄る。

「慧音さんっ」

「明寛…！良かった、無事だったか…」

草むらから飛び出したのは、人里で明寛を保護してくれた上白沢慧音であった。

慧音はレミリア達の存在に気づく。

「貴女達は確か紅霧異変の…」

「上白沢慧音…だったかしら？人里で一体何があったの？」

慧音は俯いて顔を横に振った。

「私にも分からない…。急に天狗達が襲撃してきて、人里を隠すことすら間に合わなかったから咄嗟に人々だけを隠したんだ…」

「天狗達が人里を襲撃…?!」

「何がともあれ…明寛を救ってくれてありがとう…。恩に着る…」

慧音は咲夜達へ頭を下げる。

その後は辺りを巡回し、天狗がいないことを確認作業を行って慧音は人々を戻す。

レミリア達は状況をまとめるために紅魔館へと帰って行ったのだった。

この日の出来事は幻想郷の存在を大きく揺るがす事態となる。

人間と妖怪の存在、そして人間側の妖怪への不信感が大きく膨れ上がり、妖怪の山と人里の間で一触即発の状況へと陥ったのだった。

人と妖が住まう世界の均衡が崩れようとしていた…。

12. 再燃の始まり

信哉が目覚めて、消えた日の夜。

咲夜は夢を見た。

「……………」

彼女は真つ白の何も無い空間にただ一人立っていた。

「夢…ね……………」

夢と自覚できる夢を見たのは久しぶりだった。咲夜は何も無い空間を取り敢えず歩く。足音も何も無く、無音の時間が続く。

「不思議ね…。こういうのって。……………何?!」

ボーッと何も無い空間を眺めていると、目の前に真つ黒の渦が現れる。

咲夜は反射的に後ろへ下がった。

渦は最初三メートル程の大きさだったが、瞬間的に圧縮、そして弾けた。

黒い渦が弾けると、前に姿を現したのは信哉であった。

「あ、貴方は…」

「十六夜さん、夢の中失礼します。能力を使ってお邪魔させてもらっただ」

「え、ええ…」

咲夜は戸惑いながらも頷くと、信哉は頭を掻きながらため息混じりに言った。

「あく…。敬語とか少し苦手なんだ。タメ口で話させてもらおう…。いいか?」

「大丈夫よ。それよりも今どこに居るのよ…。妹様やお嬢様が心配していたわよ」

「俺は明寛の中で生きている状態だ。あの時借りたナイフ、無くして済まなかった…」

信哉は頭を下げる。咲夜が別にいいわと優しく言うと、信哉は顔をあげた。

「俺が十六夜さんの夢に来たのは、俺の今までとこれからを話す為だ。

聞いてくれるか…?」

「いいわ。聞きましょう」

「ん。まず俺達は一ヶ月半前ぐらいにこの世界へやってきた。当時は父もいたが、妖精や妖怪に襲われて離れ離れになり、命からがら辿り着いたのが紅魔館だ」

「それは何となく察していたわ。よく見つけたわね」

「もちろん一回目で見つけた訳じゃない。だいたい…三回目か? 紅魔館に辿り着いたのは…」

「三回目…?」

「この世界には能力が存在するのだろうか? この世界に来た事で俺達にも能力が備わったんだ。俺が『共鳴する程度の能力』を持っていることは知ってるよな?」

「ええ。その能力のお陰で私も助かったし…」

「明寛にも能力があったんだ。それは明寛自身にそんな得のあるような能力じゃない。むしろ呪いのような能力だったんだ」

「呪い…?」

「明寛の能力は『王と家臣の程度の能力』。いまいちよく分からないような感じだが、簡単に言えば永久の側近契約。明寛が王で、俺が家臣。家臣は王を守る為にペナルティが課せられる。それが呪いだったんだ…」

「王…。絶対的命に逆らえないの?」

「命令に逆らえないとかじゃないんだ。家臣が死んだ時、時間は巻き戻り死んだことが無かったことになる」

「時間の巻き戻り…」

「俺は死ねないのさ。これから先も死を味わって生き返る。…一度限りの死が無限に増えたんだ…精神面でいずれ追いつかなくなる」

信哉はそう言うと、俯いてギリリツと歯軋りを鳴らした。だがすぐ前を向いて話を続けた。

「その呪いのお陰でフランドールや十六夜さんを助けられたんだけどな…。まあこれが俺の今までだ」

「そう…」

咲夜は何も言わなかった。信哉の目を見て、じつと話を聞き続ける。「そしてこれからの事なんだが…。きつと明寛は近いうちに俺を探しに幻想郷のあちこちをまわる筈だ。周りから反対されようとも、俺の事になれば行ってしまう。トラはそんな奴だから、せめて十六夜さん達だけでも明寛の味方になって欲しい」

「それは別にいいのだけど…。本当の事をあの子に言うのは嫌なの？」

信哉は上を向いて、小さく微笑んだ。

「はははっ。俺は明寛に自由に生きてほしい。その為にも沢山の経験をするのは重要なんだ」

「だから敢えてどこに探してもいない貴方を探させるの？終わりがないじゃない」

「絶対に本当の事を知る機会を訪れる。とてつもなく遠い時かもしれないし、実は今直ぐにだったりもな」

「はあ…」

咲夜は頭を抱えてため息を吐いた。しかし、その手の奥では微笑んでいるように見えた。

「いいわ。助けてくれたお礼も兼ねて、私が貴方の弟を助けるわ」

「ありがとう。恩に着る」

話終わると、辺りの空間が徐々に薄くなっていく。

どうやら夢が覚めるらしい。

「話す事はこれで全部だったか？何か残っていたような…」

咲夜には既に信哉の姿がぼやけていて、声も途切れ途切れであった。

「あつ…!?何よりも伝えなくちゃいけない事を忘れてた！十六夜さ」
声が聞こえなくなると同時に辺りが真っ白に包まれる。

浮遊感すら感じる。ふわりふわり。

長いような短いような浮遊感が消えると、咲夜はベッドの上にいた。

「…。まずはお嬢様に伝えますか…」

咲夜はベッドを出て、素早く身を整えて部屋を出たのであった。

咲夜は朝食時、夢での事を早速レミリアへと伝えた。

レミリアは話を聞くと、小さく頷いてそのまま皆へと今後の趣旨を伝えた。

「近々、信哉の弟：明寛が信哉を探す為に行動を起こすらしいわ。もしその時が来たら私達総出で明寛を見守るわよ！」

「弟…あの子ですね！わかりました」

美鈴はグツと拳を握って嬉しそうに言った。

すると美鈴が何かを思い出したように、声を上げた。

「あつ！そうだお嬢様に伝えなきゃいけない事が私にもあるんです！」

「何かあったの？」

「昨日の夜、射命丸という鴉天狗がやってきたんです」

「鴉天狗が…？」

「はい。そして口頭で伝えてくれと頼まれたのですが、現在、天狗社会が二つに断裂していて、今回の人里の件は片方の集まりらしいです」「断裂ねえ…。どうしてそんな事になったのかしら」

レミリアは呆れながらため息を吐いと、皿に盛られた料理を口へ運ばせた。

「変死体事件が続いている時に、あんな事が起きちゃったら人間であろうと野良妖怪だろうと皆警戒するわ。その状態だとほんの些細な事で暴動が起きやすいから動きずらいわあ…」

レミリアはううくと唸りながら、両手で頭を抱えて蹲った。

しかし、明寛の様子を常時監視しないと行動が把握出来ないのと、とりあえず美鈴を人里へ向かわせる事を決めて、その日の朝食は終えたのだった。

太陽が頭上にかかる頃には美鈴は人里へとたどり着いていた。

そして常人離れな身体能力で少し遠くから明寛を監視し、ひっそりと見守っていた。

(それにしても…やはり弟という事もあって目元とか信哉に似てますねえ…)

明寛は今、人里をグルグルと歩き回っていた。信哉を探しているらしく、すれ違う人達に尋ねている。

(ふーむ…。本当の事を言っただけではないのですが…信哉の願いですしここは耐えなければ…)

数時間ほど人里を歩き回った後、明寛は一度、居候している上白沢慧音の宅へと帰って行った。

数分後に明寛が姿を現すが、小さな背中には信哉が持っていたリュックが背負われていた。

(なかなか重装備ですね…。どこか遠出するのかな…?)

明寛は慧音の宅を出ると、人里のはずれへと歩き出す。

歩き続ける明寛の先には、妖怪奇襲対策用の防護柵と見張り人がいた。

見張り人が明寛の存在に気づくと、明寛へ近寄って話をし始める。見張り人は明寛の話に対して、手や顔を横へ降って拒否の仕草をする。

終いには見張り人は明寛を抱き上げて、人里の方へと無理やり方向転換させられていた。

(まさかもう人里の外へ出ようとしたんでふか…?!兄弟揃って行動力が漲ってますね…)

美鈴は明寛に感心しながら監視を続ける。

追い返された明寛は、その場で地団駄を踏むとすぐに移動し始める。

明寛が次に向かった場所は、木々が生い茂って森と人里がくつついた場所であった。

木々が鬱蒼としているため、バリケードも先程の場所よりかは薄く、子供であれば通り抜けることができる隙間は多く存在した。

明寛は隙間から防護柵を掻い潜り、そのまま人里から外へ出た。

(ほ、ホントに人里を出ちやいましたよ?!)

明寛が人里を抜け出したのを確認すると、美鈴は明寛へと約七メー

トルほどの距離まで近づいて、いざという時に対応出来るようになる。

明寛がガサガサと野草を掻い潜って向かっていた場所は、最後に信哉と出会った場所……つまりは、天狗達に襲われた場所であった。

「信兄い……どこに行っちゃったの……」

明寛は辺りを彷徨って信哉を探す。

戦闘の激しさを物語るものは未だに残っており、微かに腐臭が漂う。

明寛はそれでもなお、周辺を探し回る。

林の中に明寛の信哉を呼ぶ声が響く。

「信にー!!」

明寛の呼び声が林に溶け込むように感じた。そして訪れる静寂がより強い孤独感を明寛に与えた。

「……」

目から滲みつつある涙を手で拭い、再び辺りを探し始める。

しかし明寛はこれ以降、信哉の名前を叫ばなかったのだった。

…

……

……

明寛は淡々と辺りを彷徨って信哉を探し続けるが、空が朱色に染まるとやつれた様子で帰って行った。

美鈴は家に帰っていく明寛をみて一安心した。

(よ、良かった……ひとまず今日は帰ってくれますようですね。大量の荷物もってるからもう旅立つのかと思いましたが……)

美鈴は胸が締まるような感覚を覚えながら、明寛の後を追った。

雲一つない星々が煌めく深夜、明寛が眠り着く事を確認した美鈴は紅魔館へと帰宅する。

紅魔館のロビーでは皆が集まっており、美鈴からの状況報告を待っていた。

レミリアが一步前にでて美鈴を迎える。

「お帰りなさい美鈴。明寛の様子はどうかだったのかしら？」

「信哉が最後にいた場所へ向かって長時間探し続けていました。手を伸ばしてあげられないのが…とても苦痛です」

「そう…」

レミリアは美鈴の表情を見て、悟ったように悲しそうな顔を見せた。空気が重くなる。

するとフランが空気を入れ替えるように、手を挙げた。

「はい！今度はフランが信哉の弟を見守りたい！」

純粋な子供らしい笑顔で手を挙げたフランに皆は思わずじつと見つめてしまった。

すると美鈴が微笑んで、フランへと近寄った。

「いいですよ！じゃあ妹様、明日は私と行きませんか？」

「ほんとっ!？」

フランははにかんで、顔を隠すように美鈴へと抱きついた。美鈴は優しくフランを抱き返す。

すると咲夜が一瞬羨ましそうな眼差しを向けて、美鈴は気づかないフリをして内心で苦笑いをした。

「そ、そうだ！小悪魔さんも連れていきましょう！明寛は確か小悪魔さんと一緒にいることが多かったはずですよ！」

美鈴は気を少しでも紛らわせるべく、咄嗟に話をふった。
するとパチュリーは静かに抗議した。

「こあは私だよ。妹様と美鈴で行ってきなさいよ」

「そっそうですよね?! すいません！」

ただ一人で焦る美鈴を静かに無視して、レミリアが「じゃあ」と今後の予定を言おうとした時だった。

『?!』

突然、空気が震え上がるほどのエネルギーの波が彼女達を支配した。

「くあっ…!!こ、このエネルギーは…!!」

「いつ…一体…?!」

「そ、空からだわ…！何が…?!」

レミリアは翼を広げ、窓の近くへと飛行する。窓から空を覗いてみると紫色の空間が大きく広がっており、その空間の奥にある無数の瞳が不気味にこの世界を見下ろしていた。

大小様々か瞳と目が合ったような気がして、思わず喉を締めらせた。

目をそらすようにレミリアは皆の方へと振り返る。

「えっ…?!ちよつと、咲夜?!パチエも皆…?!どうしたの?!」

レミリアが振り返ると、床へ力なく倒れた皆の姿があった。

目の前の光景に呆気を取られていると、背後から突然気配を感じ取って、レミリアは全力でその場から翼を広げて二、三步程移動した。体を逸らしつつ視線だけを、先程まで自分がいた場所へとずらす。

レミリアが捉えたのは、空間を割いて現れる着物を装った金色の長髪の女性の姿。幻想郷を創り管理する当事者である『八雲紫』であった。

「チツ…」

紫は焦った様子で再び空間の裂け目の奥へと消える。

レミリアは耳をすまし、肌の間を頼りに素早く反応できるように警戒する。

だが紫はレミリアでも追いつけない速さで、レミリアを掴んだのだった。

「ぐ…う…?!」

レミリアは全力で紫を振りほどこうとする。しかし、意志とは裏腹に体の力は徐々に失われていき、その場に膝を落としてしまう。

「ど、どういふつもり…?!」

「狂った物語を元に戻すだけよ。この後、貴女達はいつも通り過ごせばいいだけよ」

「がっ…!!」

紫はレミリアへそう言うと、左手をレミリアの額へと突き刺した。

レミリアは目を大きく開いて、紫にされるがままであった。

「…これでよし」

紫がレミリアの額から手を抜くと、レミリアはそのまま地面へと力なく倒れ込んだ。

すると紫はレミリア達のすぐ下に空間の裂け目を発生させて、全員がいつも使っている寢床へと送った。

「一体…何がどうなってるのよ…」

紫は疲労を感じながらも次へ向かう場所へと空間の裂け目を利用して、その場から姿を消した。

幻想郷の空に大きく発生した空間の割れ目は一夜限りのもの、朝になる頃にはいつもの空へと元に戻っていた。

そして同時に、その日の夜の事覚えている者は誰一人いなかったという。

ただ、とある人物達を除いて…。

朝が来た。夏といえども朝は涼しく、人々を撫でるかのような優しい風が人里に流れ込む。

「え…？」

明寛は起きると同時に違和感を感じた。今までずっと引つかかっていた嫌な奴が突然消えてスッキリとしたような感覚。

どうしてそんな感覚になるのかは分からないが、明寛は久しぶりに『いい朝』を迎えた。

部屋を出ると、慧音が出迎えた。

「む、起きたか。ちようど朝ごはんができたんだ。一緒に食べよう」

「え…？ええっ?!」

明寛は声を上げて驚いた。何故ならば、ここ連日は人里へと天狗達が襲撃してきた件での対策やら会議などで、朝方すら家にいない事が多かったからである。もし、いたとしても慌ただしく動いて表情も重く沈んでいるはずだ。

しかし、今朝の慧音は爽やかな笑顔でゆつくりと朝を過ごしていたのだ。

明寛は恐る恐る慧音に聞いた。

「け、慧音さん…あの事件に関しての仕事とかあったんじゃないです

か…？」

慧音は明寛の問いに対し、きよんととして答えた。

「事件…？」

「え…？」

お互いに困惑し、一瞬沈黙する。

すると慧音は明寛の頭を撫でて言った。

「何かあったら言ってくれよ？私が助けてあげるから…」

「え、あ…はい」

明寛は混乱しつつも返し、料理が並ぶ食卓を前に座る。

そして慧音と共にいただきますを言って、ご飯を食べ始める。

「慧音さん、何かいい事ありましたか…？久しぶりに慧音さんの笑顔を見れた気がします…」

明寛は嬉しそうに小さく微笑んで、慧音と食事を進める。

慧音は頭を傾けて少し考える素振りを見せた。

「な、なあ…私ってそんなに笑っていないのか？」

「最近は…朝も大変そうにしたり、落ち込んだように見えましたから…」

「そ、そうなのか…。私には最近、落ち込んだ記憶がないんだよなあ…。もしかしたら物忘れとか激しくなってきたのかな？」

慧音は冗談交じりに笑いながら言った。

しかし、慧音のその発言で明寛は小さな疑問を思い浮かべる。

(もしかして…本当に事件の事を忘れたのかな)

その後、朝食を食べ終わると明寛は人里内を散歩する事にする。

外に出ると、同じように違和感を感じた。

「空気が重くない…」

少し歩いてみると、人里が変化していることにすぐに気づいた。

慧音と同じように皆、いつもと表情が明るく怯えた様子もなかった。

子供は大人の手伝いを、大人は集まって世間話を。数日前に天狗たちから襲撃を受けたとは思えないような平和な様子であった。

「ど…どうなってるの…」

明寛は人里の端までやってきた。

前日までは妖怪の侵入防止柵が作られていて見張り人もいたのだが、今朝は打って変わって見張りの姿どころか柵すらも消えていた。驚きのあまりに呆然と立ち尽くしていると、里の外から一人こちらへ歩いてくる影が見えた。

その人は日傘のような物を持ち、前をまっすぐ向いて歩いてきた。ある程度近づいた事で、その人は女性である事がわかった。

髪はショートの色、瞳は血液のような赤色で、スカートを小さく揺らしながら歩いていった。

明寛はなぜか、その女性から目を離すことができなかった。

美しくて見惚れたとか可愛いから凝視したなどではなく、ただ単にその女性を視界から外す事が怖いと感じたからである。

「ふうん…」

女性は人里のすぐ近くまで来ると、何かを見定めるように見つめた。

そして次は明寛へと視線を移した。

「…へえ」

その女性は感心したように声をあげ、明寛に向かって微笑んだ。

「ねえ…その僕。なんか不思議だとは思わない?」

「…。そう、かもしれません」

「どんな風に不思議だと思う?」

女性からそう聞かれた時、どのように不思議か、明寛は答える事がなかなか出来なかった。気持ちとしてはあるのだ。しかし、言葉に表すとすれば中々思い浮かばない。

するとその様子を見兼ねた女性はさらに問いかけた。

「空気が、何か変じゃない?」

「…なんか、軽すぎるような気がします」

「そうね、確かに軽すぎるわ。まるで皆の意思が一つになってしまっているかのようだ」

女性はそう言うと、後ろへ振り返って来た道に戻ろうとする。

なんだったのか困惑する明寛はただその女性の後ろ姿を見続ける

事しかできなかつたが、突然女性が明寛へと再び振り向いた。

「僕は『かかつていない』のね。…また今度会ったら話をしましょう」
女性はそう言い残してその場から去って行った。

するとすれ違ふかのように、後ろから明寛を呼ぶ者がやってくる。

「明寛、ここにいたのか」

「慧音さん。どうしたんですか、こんな端つこの所まで…」

慧音は持つている籠の中身を明寛に見せた。籠の中には野菜などの食べ物が入っていた。

「いっぱいお裾分けで貰ったから、これから博麗神社へと届けにしようと思つたんだ。明寛も行かないか？」

「あ、行きます」

慧音はよしっ！と笑顔を見せると明寛と共に歩き出す。

太陽が頭上に近づくにつれて暑くなるが、空を覆い尽くすような青々とした森の中に道があるため、程よく光が差し込んで風がスッと通り抜けるような快適な道を歩いたので、それほどの苦ではなかつた。

明寛は慧音と談笑しつつ移動したため、特に恐怖を感じたりはしなかつた。

妖怪などの化け物が出ることはなく安全に神社への辿り着いた頃には既に太陽は頭上を超えていた。

「あ、あつい…」

「目を遮るものがないからな…階段が一番大変だったな…」

汗を滲ませながら本堂へと歩み寄ると、奥から怒号が響いた。

「ちよつと魔理沙今わたしの…飯盗み食いたわね?!」

「んな一口ぐらいいいだろ!!小さい女だな!」

「誰の胸が小さいですって?!」

「言つてねえよ?!」

慧音と明寛はお互いに目を見合わせて苦笑いをうかべた。

少し躊躇しながらも靴を脱いで本堂へ上がり、怒号が響く元へと向かつた。

「霊夢、お邪魔するぞ?」

「お、お邪魔します…」

明寛は慧音の後に続いて恐る恐る部屋へと入る。

部屋の中では、狩人となった虎のような覇気を放つ霊夢と慌てながら逃げようとする魔理沙の姿があった。

「れ、れれれ霊夢！お客さんだぞ、ほら！」

魔理沙は慌てて慧音達へ指を指した。すると霊夢はあらほんとだわと少し驚いた様子で慧音と明寛を見た。

「人里での収穫物だ、ほんの少しだが貰ってくれ」

「キヤー?!そんないいの?!ありがとう」

霊夢は魔理沙を追い詰めることをやめ、軽い身のこなしで慧音が持つ籠を受け止めた。

「根菜に干し肉…!!豪華すぎない！」

霊夢は嬉しそうに籠を抱きしめると、慣れた手つきで即座に慧音と明寛のお茶を用意した。

「何もないけどくつろいで行ってね」

「え、私にはお茶は出さないのか？」

「黙りなさい」

「ひよわっ?!」

霊夢は再び魔理沙を睨みつけると同時に、掌から一つの弾幕を放った。

魔理沙は体を捻らせて間一髪で回避した。

「全くもう…。こんな面倒な時にコイツは邪魔ばかり…!!」

「また妖怪退治を依頼されたのか？」

「アンタ達も天狗共から襲われて……………あ、えーと……………そう、あの鴉天狗がまた変なゴシップを流してるみたいだから対処しなくちゃな〜って」

霊夢は最初に何かを言いかけて、しまったと言うかのような表情をして、少しぎこちない様子で言った。

「それは大変だな…」

慧音は霊夢の話に素直に頷くが、明寛は霊夢が最初言いかけた事に思うことがあった。

明寛はそこで、直接霊夢へと話を聞くことにしたのだった。

「あ、あの霊夢さん…いいですか？」

「ん？」

明寛は霊夢の袖をクイクイと引っ張って誰もいない廊下へと連れ出した。

「どうしたの？」

「す、少し気になることがあって…」

明寛は霊夢に耳打ちをする。

そしてその内容を聞いた霊夢は驚いた表情で明寛を見つめた。

「ど、どうして知って…」

「やっぱり、そうなんです…。皆覚えていないんですね」

明寛が霊夢へ聞いたことは、天狗が人里へ襲撃してきた事を覚えてるか、という事だ。

「……いい？それは言っては駄目よ？」

「わかりました…。でも、どうして皆覚えていないんですか？これじゃあまた襲われちゃう…」

「確かにそうね。でも、次は防ぐわ…」

霊夢の雰囲気が一瞬とてつもない冷徹なものへと変わるのが明寛は肌で感じ取る。全身がゾワツとする感覚。恐怖なのだろうか。

明寛は感情よりも先に体に反応が出たことで、自分がなぜ鳥肌をたさせているのかがわからなくなった。

「さてと…じゃあ部屋に戻りましょう…ここ、日が強くて暑いわ…」

しかし明寛が気づいた頃には冷徹な霊夢の姿はなく、暑さでぐでぐでと気が抜けている霊夢がいた。

あまりの豹変ぶりに思わず戸惑うが、霊夢の後に続いて何事も無かったかのように、慧音の横へと再び座った。

「霊夢とどんな話をしていたんだ？」

「……秘密！」

「むっ…余計に気になるが秘密なら仕方ないな…」

霊夢は隣でギャーギャーと喚く魔理沙を無視して、慧音と談笑する明寛の姿をボーッと眺めていた。

(明寛、だっけ……。なんで覚えているかは知らないけど、記憶が残っているっていうことは天狗襲撃の事件に関係があるって事よね……。見た目はただのか弱い男子……。何かが出来るようにには見えないんだけどね……)

霊夢は明寛を見つめながら、昨夜の慌ただしい夜を思い出した。幻想郷の空が空間の割れ目に覆い尽くされた夜を……。

夏であろうと夜は涼しく、風で木々が揺れる音が暗闇に響いて、煌々と光る星々が一つの川を作り上げていた。

真夜中の博麗神社、境内には八雲紫・博麗霊夢の姿があった。

「霊夢、チャンスは……。一度きりよ」

「待ちなさい紫！手がかりはなし、そんな状況で天狗達の反乱を起こした首謀者を見つけろっていうの?!私の勘だけど、反乱軍の結成には一ヶ月もかかっていないような気がするの……」

「でももう時間はないの。人里では妖怪退治の運動が始まっている。今すぐにでも妖怪と人の戦争が始まりかねないわ」

「でも……!!」

霊夢は喉元まで登ってきた言葉を全力で飲み込んで、縦に頷いた。

「やるわ……。やってやるわよ！だから……。絶対にどっか行かないですよ！」

「ええ、ありがとう……。霊夢」

八雲紫は空へ手を広げる。すると紫の体内からとてつもないエネルギーが発生し、小さな光を放ち始める。

「……っ！ハアッ！」

紫が声を上げると、幻想郷上空にとてつもない巨大な空間の割れ目が発生する。

「これから、人里と妖怪の山の人間や妖怪の記憶を改ざんするわ……!! 霊夢、後始末は頼んだわよ……!!」

「早く行きなさい……。長くは続かないでしょ！」

紫は小さく頷くと、前方に小さなサイズの空間の割れ目を発生させて、中へと姿を消した。

「見つけてやるわ……。この落とし前、絶対につけてもらうんだから!!」

……む。…いむ。 霊夢!!

「えっ?」

霊夢はハツとすると、隣で魔理沙がふくれっ面で霊夢を呼んでいた。

「ど、どうしたの魔理沙?」

「確かに飯を盗み食いしたのは悪かったけど、無視するなよ!? 流石に傷つくんだぜ?!」

「え、あ…ごめん…」

周りの声が聞こえないほどに思いふけていた事に驚くと同時に、気をつけなくてはと心に刻む霊夢であった。

ボーツした霊夢を見た慧音は心配そうに顔色を伺った。

「熱に負けたか?…あまり無理は良くないぞ」

「ええ、気をつけるわ…。それよりも、雲行きが怪しくなってきたわ。雨が降らないうちに帰った方がいいわよ」

霊夢は空を見ながら慧音たちへとそう告げた。

空には少し雲があつて、所々陽の光を遮っていた。

「確かに雲が増えてきているな…。濡れる前に帰ろう、行こう明寛」

「あ、はい」

慧音が立ち上がると明寛も続いて立ち上がり、後をついて行った。

明寛達の足音が遠ざかるのを確認すると、霊夢は壁に立てかけてあるお祓い棒を手にとった。

魔理沙は驚いて戦闘態勢になる。

「そ、そこまで恨んでんのかよ…」

「確かに盗み食いは許してないけど、今は違うわ。慧音達を遠くから見守るだけよ」

「はえ?」

霊夢はそう言うと、ふわりと宙に浮いてそのまま神社を超えて飛んで行った。

すると階段を降りてゆく慧音達を上空から確認する。

「ど、どうしたんだ…霊夢? お前がここまで献身的になるなんて…雨

でも降るんじゃないのか？」

霊夢の後を着いてきた魔理沙が、少し引きながらも霊夢の顔を覗き見る。

「霊夢はムツと魔理沙を睨みつけた。

「さっきから言わせておけば……。アンタ後で夢想封印よ」

「えっ」

霊夢は慧音達が人里へ辿り着くまで上空から見守った。

そしてその日の夕方。一人の少女の悲鳴と、奇妙なピチューンという弾ける音が幻想郷に響いたのであった。